石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡

――一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ――

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡

―一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ―

1994年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては，安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して，円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため，一般国道９号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては，埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが，避けることのできない文化財については，道路事業者の負担によって必要な調査を実施し，記録保存を行っています。

当安来道路においても，道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し，同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は，平成５年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として，学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に，道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご協力をいただきたいと思うものであります。

最後に，今回の発掘調査及び本書の編集にあたり，ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成６年３月

建設省中国地方建設局松江国道事務所

所長　神長耕二

序

島根県教育委員会では，建設省中国地方建設局の委託を受けて，平成元年度から一般国道９号（安来道路）建設予定地内遺跡の調査を行っております。本年度からは安来市島田町～吉佐町間（１－１区間）の調査に入りました。この報告書は本年度に実施しました石田遺跡，カンボウ遺跡，国吉遺跡（安来市吉佐町）の調査結果をとりまとめたものです。

安来道路の建設が進められています安来平野一帯は，古代から文化が栄えた地域であり，多くの遺跡が確認されております。今回調査を実施しました石田遺跡，カンボウ遺跡からは古墳時代の集落跡や古墳が発見されました。また，弥生時代や古墳時代を中心にたくさんの遺物も出土し，当時の人々の生活の一端をうかがい知ることが出来ました。これまで知られていた神代塚古墳や穴神横穴墓に加えて，この地域に関する貴重な資料が新たに加わりました。

本報告書が多少なりとも安来平野周辺の歴史を解明する契機となり，また広く一般の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を高める上で役立てば幸いです。

本書を刊行するにあたり，調査にご協力をいただきました地域住民の方々や建設省中国地方建設局松江国道事務所をはじめ関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

島根県教育委員会

教育長　今　岡　義　治

例　　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて，島根県教育委員会が1993年度（平成５年度）に実施した，一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は安来市古佐町に所在する田吉遺跡，カンボウ遺跡，石田遺跡である。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　文化課　広沢卓嗣（課長），山根誠二（課長補佐），中島　哲（文化係長），伊藤宏（同文化係主事）　埋蔵文化財調査センター　勝部　昭（センター長），久家儀夫（同課長補佐），工藤直樹（同企画調整係主事），田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター主幹），丹羽野裕（同主事），深田　浩（同主事），岩橋孝典（同主事），倉敷　実（同教諭兼文化財保護主事），片山寛志（同教諭兼主事），大本公良（同教諭兼主事），花井　浩（同講師兼主事），原　昌徳（同臨時職員）

調査指導　山本　清（島根県文化財保護審議会長），池田満雄（同委員），田中義昭（島根大学法文学部教授），渡辺貞幸（同教授）

遺物整理　加藤佳子，門脇卓子，来海順子，桑谷美代恵，佐々木孝子，陶山佳代，高橋啓子，多久和文子，野中洋子，長谷川弘子，牛尾リヨ子，佐伯明子，野坂栄子，三輪スミ子

4．発掘作業（発掘作業員雇用等）については，建設省中国地方建設局，島根県教育委員会，㈳中国建設弘済会の三者協定に基づき，島根県教育委員会から㈳中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部　布村幹夫（現場事務所長），吉岡勇治（技術員），勝部達也（技術員），原　博明（技術員），松本佳子（事務員）

5．石川悦雄，大谷晃二，大森隆雄，甲斐忠彦，杉谷愛象，常松幹雄の各氏には報告書作成に有益な助言を頂いた。また坂本論司氏には現地調査において協力をいただいた。

6．挿図中の方位は，国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

7．本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

8．本書で使用した遺構記号は次の通りである。

P…ピット，SB…掘立柱建物跡，SD…溝状遺構，SI…竪穴住居跡，SK…土壙

SR…自然河道，SX…その他の遺構

9．挿図の縮尺は図中に明示した。

10. 本書の編集執筆は調査員が協議分担して行った。それぞれの分担は目次に明示した。

11. 所載遺跡の出土遺物及び実測図，写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

第1章　調査に至る経緯 …… （卜部吉博） …… 1

第2章　位置と環境 …… （丹羽野裕） …… 2

第3章　石田遺跡 …… 3

　第1節　調査の概要と経過 …… （花井　浩） …… 3

　第2節　遺構・遺物 …… （岩橋孝典） …… 6

　第3節　小　　結 …… （岩橋孝典） …… 34

第4章　カンボウ遺跡 …… 37

　第1節　調査の概要と経過 …… （丹羽野裕） …… 37

　第2節　I区の調査 …… （深田　浩・丹羽野裕） …… 38

　第3節　II区の調査 …… （大本公良・丹羽野裕） …… 57

　第4節　小　　結 …… （丹羽野裕） …… 83

第5章　国吉遺跡 …… （片山寛志・卜部吉博） …… 85

図　版　目　次

石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡全景 …… 図版1

石田遺跡 …… 図版2～11

カンボウ遺跡 …… 図版12～34

国吉遺跡 …… 図版35

第1章　調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けで，建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス｜建設の基本設計資料として，島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで，県教育委員会では，地元教育委員会の協力を得て，昭和47年，48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果等をふまえ建設省からルート案が提示され，昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかわる遺跡の取扱いについて協議があった。昭和49年7月には安来地区の清水一月坂間のルート案について協議があった。つづいて，昭和50年1月22日付けで県教育委員会あて松江東地区と安来地区のうち清水一月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて，昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし，昭和50年度，松江市竹矢町才ノ峠古墳群，同矢田町平所遺跡，安来市早打町大坪古墳群の発掘調査を，昭和51年度には，松江市平所遺跡の関連再調査，東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では，埴輪窯跡から馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し，52年6月には国の重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には，昭和57年に開催が決定していた「くにびき」国体の主要幹線道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼ばれていた）東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の7遺跡（東出雲町の春日遺跡，夫敷遺跡，松江市の布田遺跡，中竹矢遺跡，才ノ峠遺跡，勝負遺跡，石台遺跡）のうち2車線分を緊急に調査した。

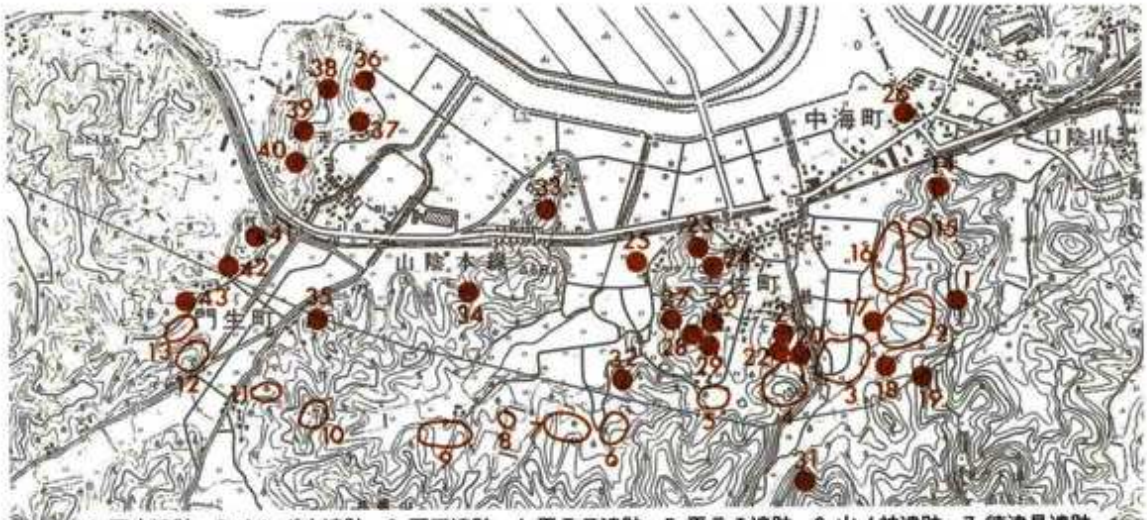
その後，「松江バイパス｜は高規格道路に設計変更され「松江道路」となり，昭和60年に建設省から前回調査した7遺跡の残り4車線分の調査依頼があった。調査は昭和61年度から平成3年度まで，順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが，昭和63年度には高規格道路に計画変更され，「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷一安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため，昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査は，まず，安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インター部を含む）で平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡，佐久保町大原遺跡，同仁コクリ遺跡，同岩屋口遺跡，黒井田町越峠遺跡，同才ノ神遺跡，島田町島田南遺跡）で実施し，平成4年度からは安来市荒島町一東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として，さらに，平成5年度からは安来市吉佐町一島田町を「安来道路東地区」として実施中である。

第2章　位置と環境

石田遺跡，カンボウ遺跡，国吉遺跡は島根県安来市吉佐町に存す。吉佐町は島根県の東端で鳥取県米子市に隣接し，なかでもこれらの遺跡は吉佐町でも東側にあたり，まさに県境の地といえる。国吉遺跡は，島根県と鳥取県の境界となる国吉山の頂上部，カンボウ遺跡は国吉遺跡から西に下りた丘陵の緩やかな斜面，石田遺跡はその西に広がる谷の水田部分にあたる。これらの遺跡の約700m北には中海が広がり，古代においてはさらに遺跡近くまで中海が広がっていたものと考えられる。

周辺には数多くの遺跡が存在しているが，調査例は少なく，様相が知られているのは古墳に限られている。比較的古相の古墳としては，国吉遺跡の北に延びる丘陵先端部にあった，八幡山古墳や今年度調査を行った吉佐山根1号墳が箱式石棺を持っている。カンボウ遺跡に隣接して，丘陵の先端部に存す神代塚古墳は，横穴式石室が露出しており，山陰須恵器編年Ⅲ期の須恵器が表採されているが，古墳の年代を直接的に示す資料であるかは確証がない。またカンボウ遺跡の東上方には神宝古墳群があり，横穴式石室が露出している古墳もある。一方石田遺跡の西の丘陵には，家形石棺内蔵の横穴もある穴神横穴群や平横穴群など横穴墓が多く知られている。なおこれらの遺跡の約2km西には，古式須恵器を生産した門生古窯跡群が存在し，注目される。



1.国吉遺跡　2.カンボウ遺跡　3.石田遺跡　4.平ラⅡ遺跡　5.平ラⅠ遺跡　6.山ノ神遺跡　7.徳津見遺跡
8.目廻遺跡　9.五反田遺跡　10.陽徳遺跡　11.陽徳寺遺跡　12.門生黒谷Ⅱ遺跡　13.門生黒谷Ⅱ遺跡
14.国吉山古墳群　15.吉佐古墳　16.六ノ坪遺跡　17.神代塚古墳　18.きさ貝姫塚　19.神宝古墳群
20.油田・平古墳群　21.四方神古墳群　22.平横穴群　23.河原崎古墳群　24.八幡山遺跡　25.茶屋畑廃寺
26.八幡山古墳　27.嵩横穴　28.塚根山古墳群　30.小枝宅遺跡　31.山ノ神古墳　32.松本古墳　33.八坂古墳　34.八坂経塚　35.陽徳経塚　36.小崎遺跡　37.下口古墳群　38.和田古墳群　39.常福寺山土壙墓
40.山根古墳　41.大歳神社古墳　42.門生・山根遺跡　43.黒谷古墳群

第1図　石田遺跡，カンボウ遺跡，国吉遺跡の位置と周辺の遺跡

第3章　石　田　遺　跡

第1節　調査の概要と経過

石田遺跡は島根県安来市吉佐町字石田815番地外に所在し，西には平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群が存在する丘陵が南北に延び，東は鳥取県との県境にあたる国吉山などの丘陵により東西を遮られた地形を呈し，遺跡は両丘陵の谷間を縫って，南から御茶屋川が吉佐の小平野に流れ出る標高8～13mの低地に立地する。現在遺跡から中海までは，直線で700mの距離があるが，古代においては中海はかなり湾入していたものと考えられる。

調査は1993年4月15日にトレンチ調査を開始し，4月27日より本調査に入った。石田遺跡の大部分を占める水田部をⅡ・Ⅲ区とし，カンボウ遺跡に連続する丘陵部分をⅠ区として実施した。6月中にⅠ区とⅡ　1・2区の調査を終了し，9月中にⅡ区全体を，12月27日までにⅢ区の調査を行い，全体の調査を終了した。

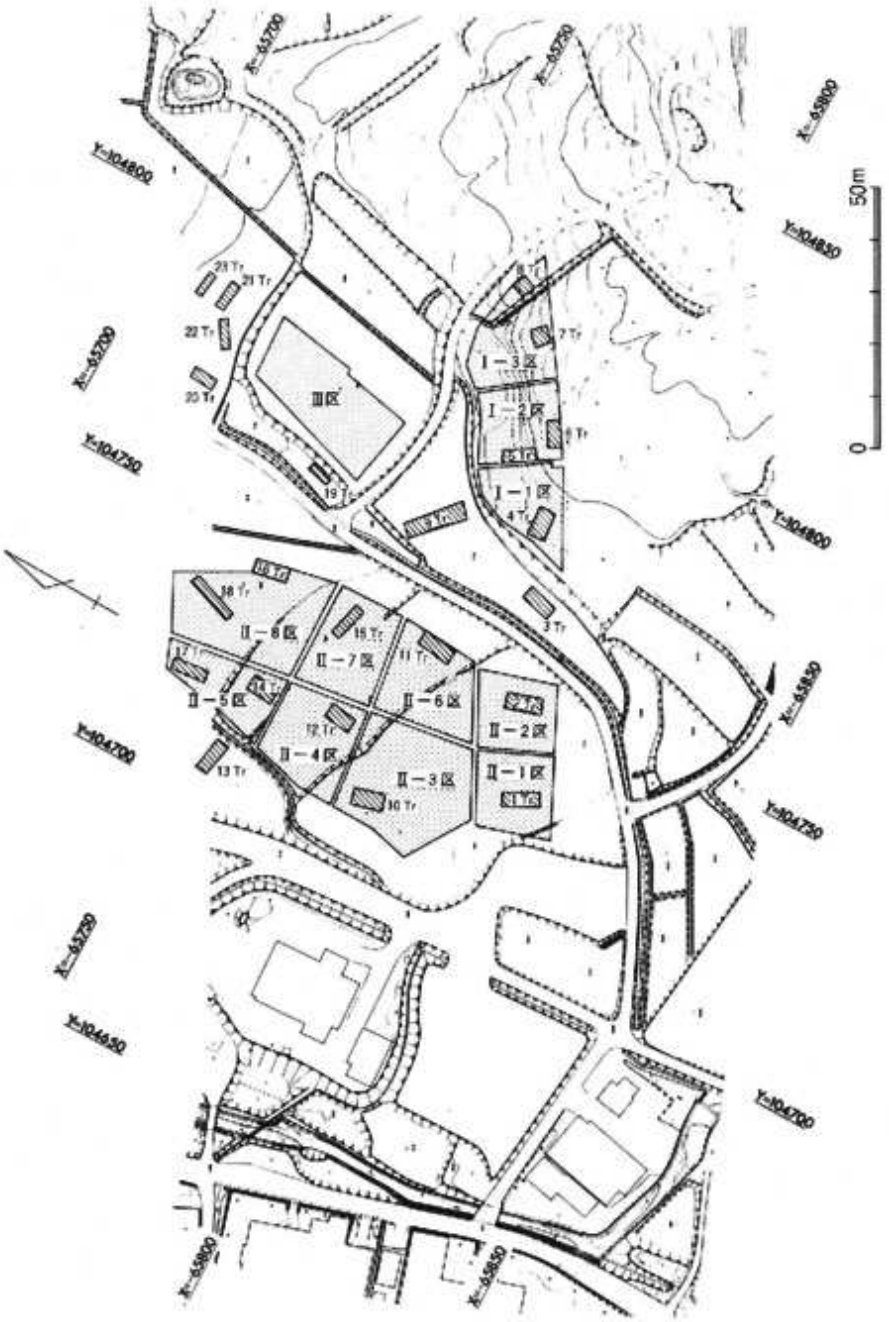
その結果Ⅰ区では古墳時代後期の建て替えの痕跡を持つ竪穴住居跡1棟と掘立柱建物と考えられる柱穴群，溝状遺構，土坑などを検出した。柱穴群の付近には土坑や固く締まった焼土・集石などがみられ複雑な様相を呈している。また，包含層中から多量に古墳時代後期の竈・甑・甕・高杯・杯・土錘などの生活色の強い土器群や，少量ではあるが弥生時代後期の土器が出土している。

調査区は全体的に近世～現代の農耕によりかなりの削平を受けており，Ⅰ区でも竪穴住居跡の北端が削平され一部が消滅していた。Ⅱ区では近現代の水田利用により，耕作土の下約20cmで地山に達し，古墳時代後期に埋没した自然河道と一部の土坑・溝と近現代の農耕に伴うピット群以外は遺構が残存していない状況であった。Ⅲ区ではⅡ区で確認した自然河道の下流部とピット群を確認した。

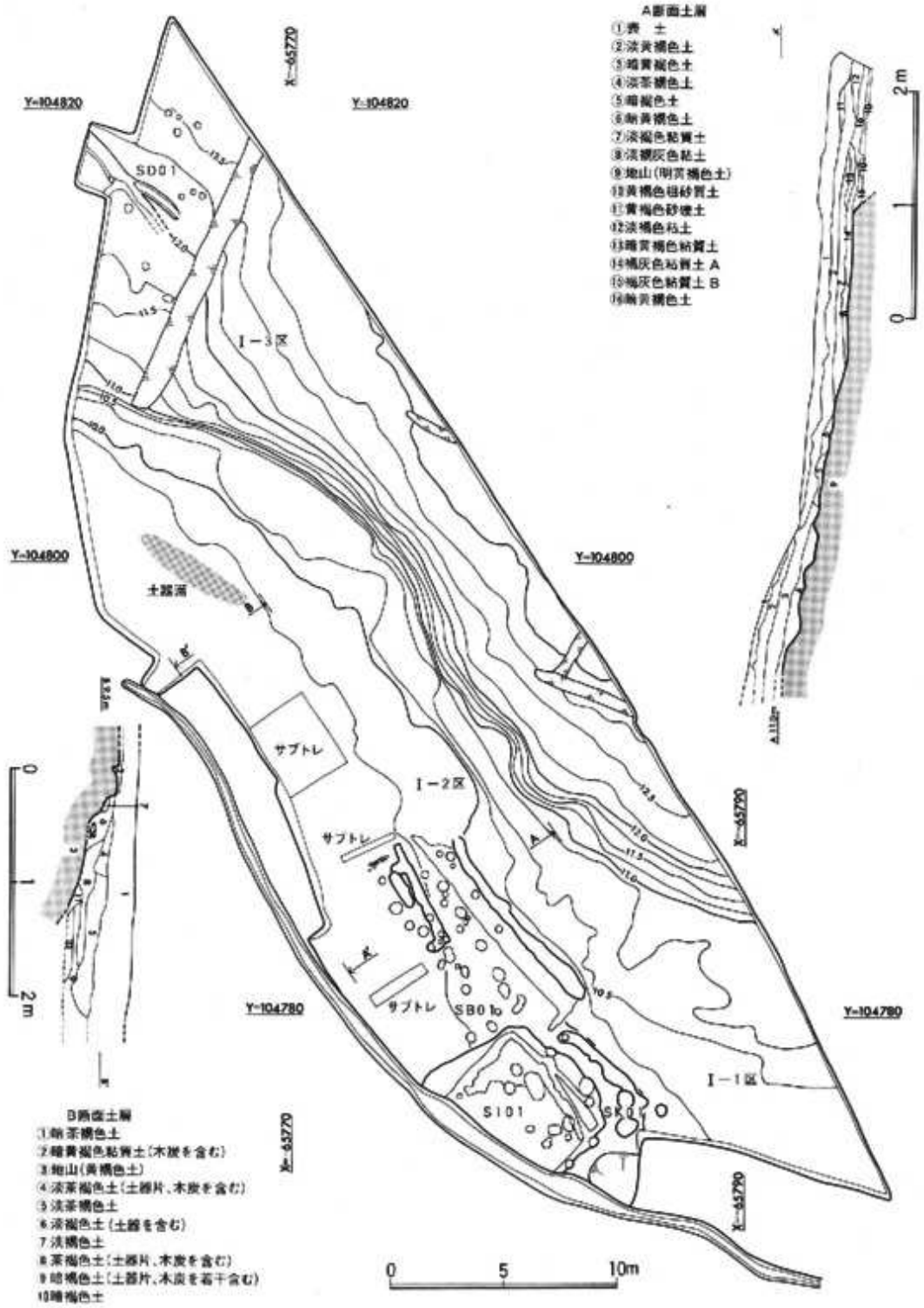
なお，直接遺構には伴わないものの，Ⅰ～Ⅲ区全体の包含層中から鎌倉～江戸時代に至るまでの白磁・青磁・土師質土器・青花・伊万里・唐津・備前・天目など中近世土器や北宋銭・寛永通宝など銭貨・鉄鏃も少量ながら出土したことにより周辺に中近世の集落域などが存在した可能性を考えることができる。

この調査の結果，石田遺跡近辺では弥生時代後期・古墳時代後期・中近世に集落が形成され，その都度過去の遺構を破壊していることが確認できた。

以下，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区の順に調査の概要を記すことにしたい。　（花井）



第２図　石田遺跡調査区図（S＝1/1500）



第3図　I区全体図（平面S＝1/300　断面S＝1/120）

第2節　遺構・遺物

Ⅰ－1区

SI01（第4図）

Ⅰ－1区中央部北端から北側半分近くを農業用水路によって破壊された形で検出した。

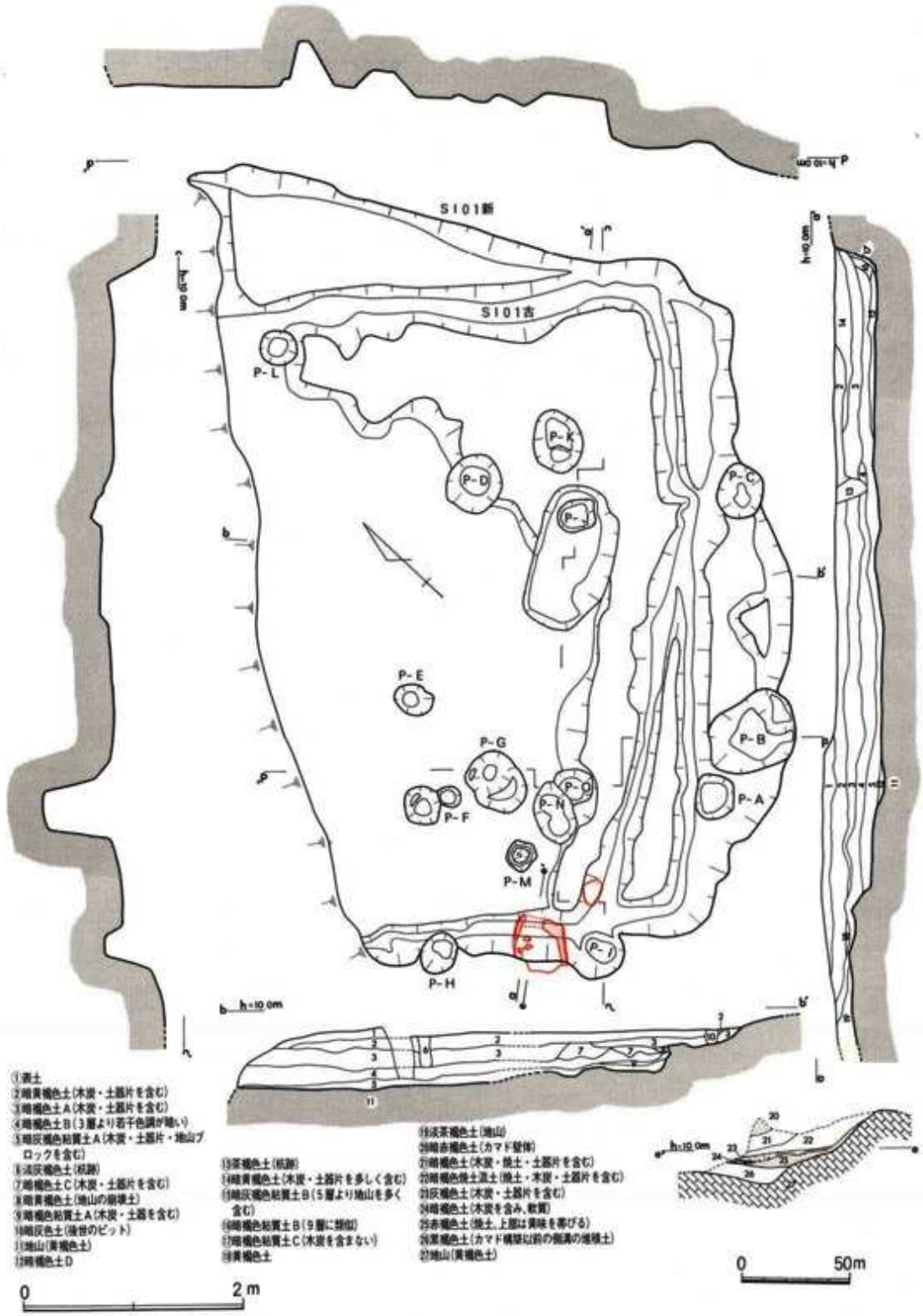
住居跡は建て替えの痕跡が認められ，埋土からは須恵器の杯身・杯蓋・壺・高杯，土師器甕などが出土した。しかし，床面直上からの遺物は側溝内より土錘が1点出土したのみで，新古の住居跡の年代差などは検証しがたいが，埋土中や周辺出土の遺物を考慮すると6世紀末から7世紀前半の時間幅の中で連続的に新古の住居が存在したことが考えられる。

SI01古は北側を破壊されているが南東側上場の一辺で6.15mをはかる方形竪穴住居である。主軸は標高10.0m付近の等高線に沿って南東～北西に取っている。床面の隅には幅15～20cm・深さ5～10cmの側溝がめぐっているが，貼床の痕跡は認められなかった。主柱穴はP－OあるいはP－NとP－Kが対になり，さらに北側の消滅部分に2本の対になる主柱穴が存在したと考えられ，4本柱構造が想定できる。また，住居跡南辺は緩く弧を描くようなカーブを持ち，それに接する柱穴P－BとP－Cの間には階段状のテラスが存在し，出入口になる可能性がある。

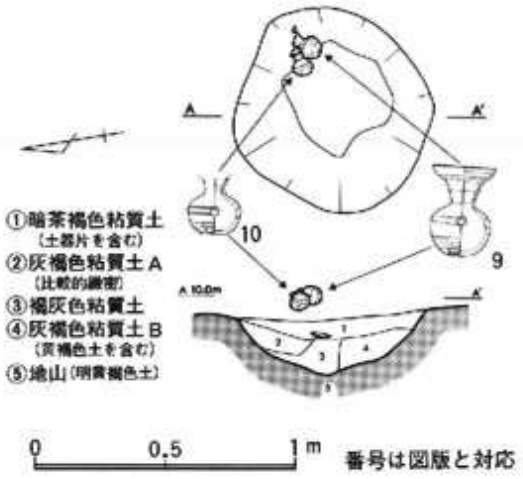
SI01新は古段階の住居より東に振った形で，前段階の住居とほぼ同規模の大きさで建てられている。この住居の主柱穴はP－GとP－Kと考えられ，構造自体は古段階の住居と大差は無いと思われるが，南西コーナーには古段階住居の側溝を埋めた後，新しく作り付け竈が設置されている。竈は幅50cm・高さ45cmの部分まで残存していたが，煙出しなどは消滅していた。竈の上半部は暗赤褐色に焼土化していたが，下半部の壁体は焼土化しておらず脆くなっていたため，明確な壁体の確認はできなかった。しかし断面立ち割りによって底面の固く焼けた赤褐色上が焚口から上方に伸び，その上に灰や木炭を含んだ軟質土が堆積していたことにより，複数回数にわたって使用されたと考えることができる。規模からみて西日本に通例な甕一つ掛けタイプ(註1)であるが，住居の壁面中央ではなく南西側のコーナーにほど近い位置に設置する特異な例といえよう。

SK01（第5図）

SI01の南方80cmの位置に所在する長径75cm×短径80cm・深さ20cmの土坑である。口縁を欠いた甕2個体（9・10）が土坑直上から並んで出土している。土坑内からは土器の細片しか出土しておらず，甕と土坑との関連は不明である。



第4図　Ⅰ－1区竪穴住居跡ＳＩ０１実測図（Ｓ＝1/60　竈断面Ｓ＝1/30）



第5図　Ⅰ－1区ＳＫ０１実測図（Ｓ＝1/30)

Ⅰ－2区

SB01（第6図）

4間分の柱穴を確認したのみであり掘立柱建物ではない可能性もある。柱穴は直径50cm・深さ20～40cmで1間は約80cmである。掘立柱建物と考えるとSD03などもこの建物に付属する排水溝とすることができるが，出土遺物がないため時期は不明である。

SD02・焼土（第6図）

焼土は長さ190cm・幅40～70cmの範囲に広がっており，固く焼き締まって明橙褐色から赤褐色を呈している。焼土直上には古墳時代後期の須恵器杯蓋・杯身・高杯，水晶の原石などが散在していたが，焼土との関係は不明である。

SD02は焼土を囲うようにコの字形にめぐる長さ5m・幅30～50cm・深さ20cmの溝で，埋土は黒褐色粘土が明度により2層に分かれるのみであった。焼土と同時期という確証はないが，同時期とすれば山側からの流水などを断ち，火所を湿気から守るための機能を持っていることが考えられる。

SK02（第6図）

焼土を切ってSD02と平行する細長い土坑である。長径175cm×短径40cm・深さ20cmをはかり，埋土は暗褐色粘質土のみで，中世期の鍋形土器1個体が完形で出土した。

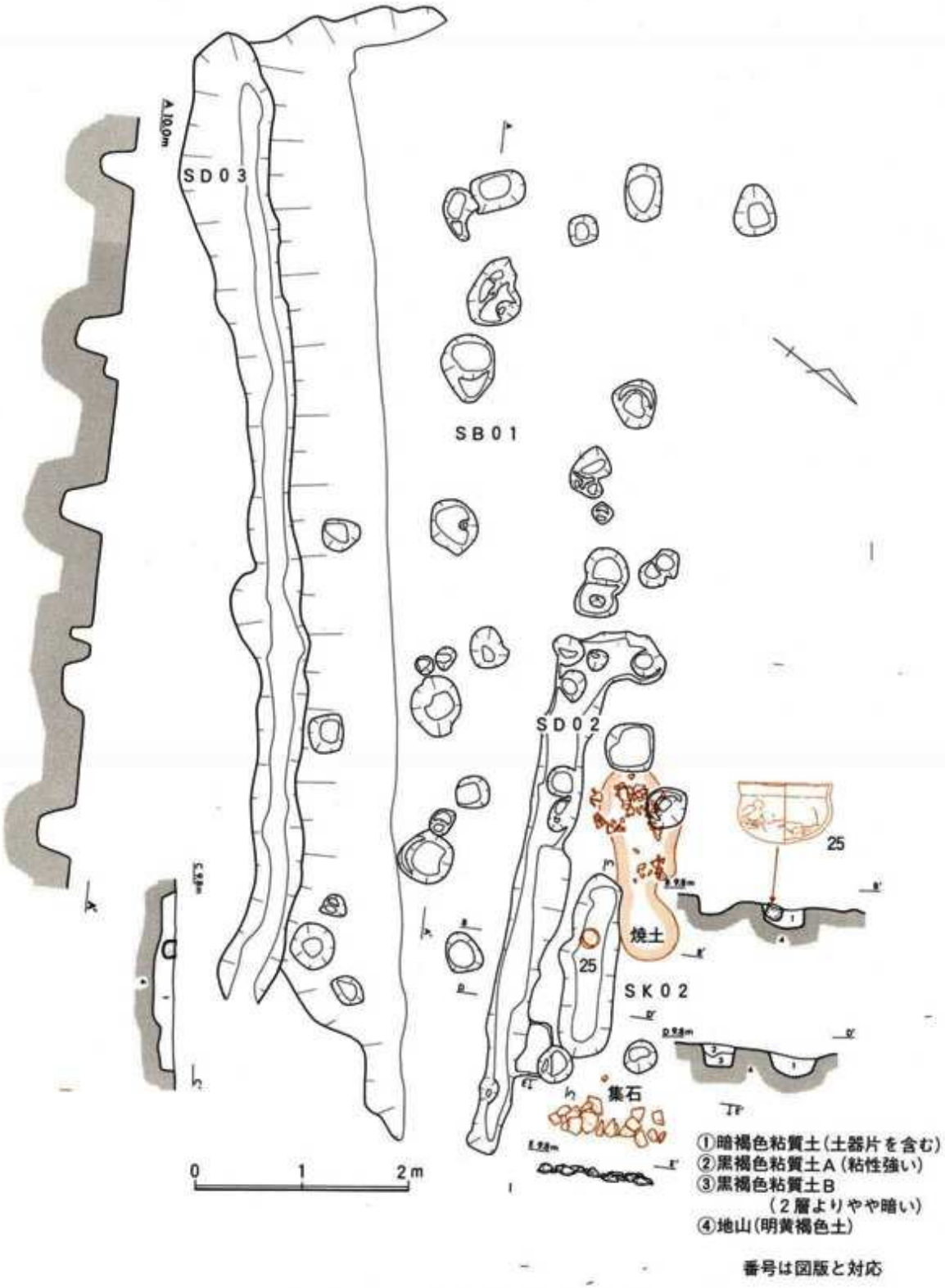
集石遺構（第6図）

焼土から150cm北東の位置に約20個の拳大の礫からなる幅30cm・長さ110cmの集石を検出した。石は標高9.7m付近で高さは揃っているが，土器や下部構造を伴わないため，その時期・機能などは不明である。

Ⅰ－3区

土器溜（第7図）

Ⅰ－3区北側の標高9.0～9.5m付近で長さ5.5m・幅1.5mの帯状の範囲に拳大から人頭大の礫と土師器甕・移動式竈・甑・土製支脚，須恵器甕・壺・杯身・杯蓋・高杯などが集中的に投棄されたような形で検出した。土器は完形やそれに近いものも多く一括性の高いものであり，住居の廃絶時や祭祀など非日常的な行為によって一括投棄されたと考えられる。この土器溜の南方には高さ1.5



第6図　Ⅰ－2区遺構配置図（S＝1/60）

mあまりの崖状の急斜面があり，投棄・転落のいずれの場合でもこの崖上からなされたものと考えられる。

SD01（第8図）

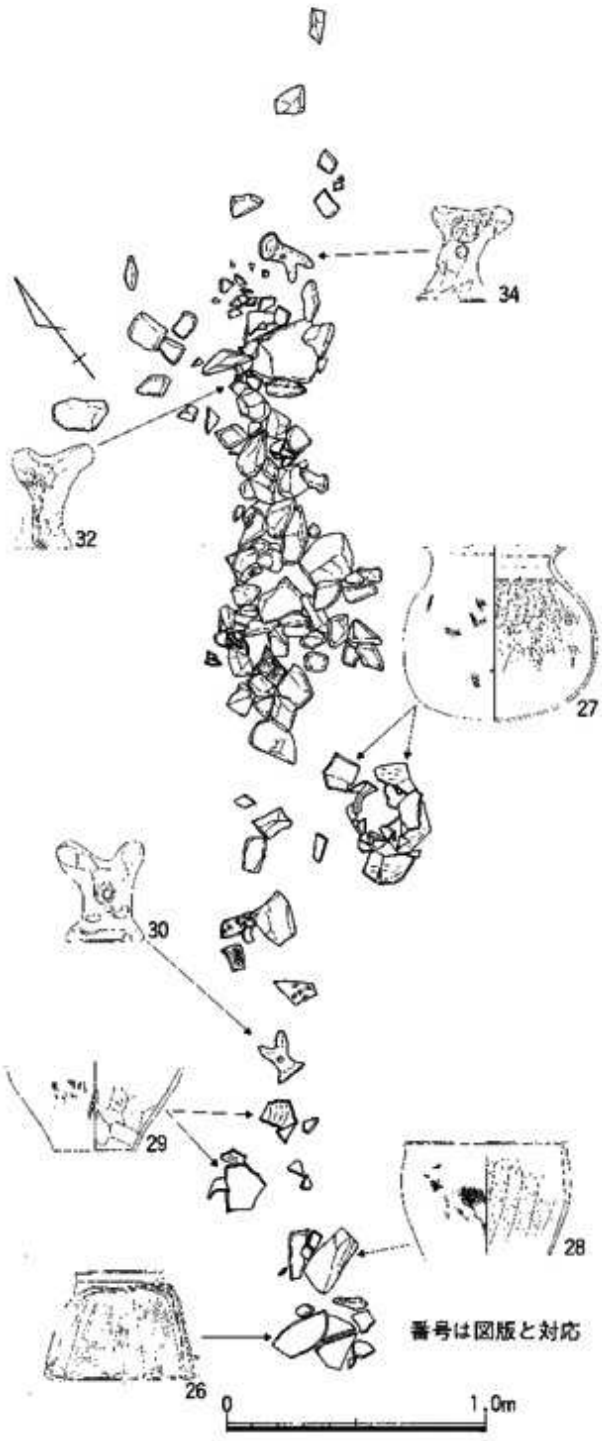
南西から北東方向に延びる溝状遺構であるが，約4.5m分しか検出されなかった。幅80～100cm・深さ40cmほどが残存していたが，中央部は近世～現代の農耕用の溝が重複していた。

溝の底面付近からは須恵器杯蓋・杯身，土師器甕などが出土している。この溝は削平された竪穴住居跡の側溝の可能性もあるが，確証が得られないため保留しておく。

I区包含層

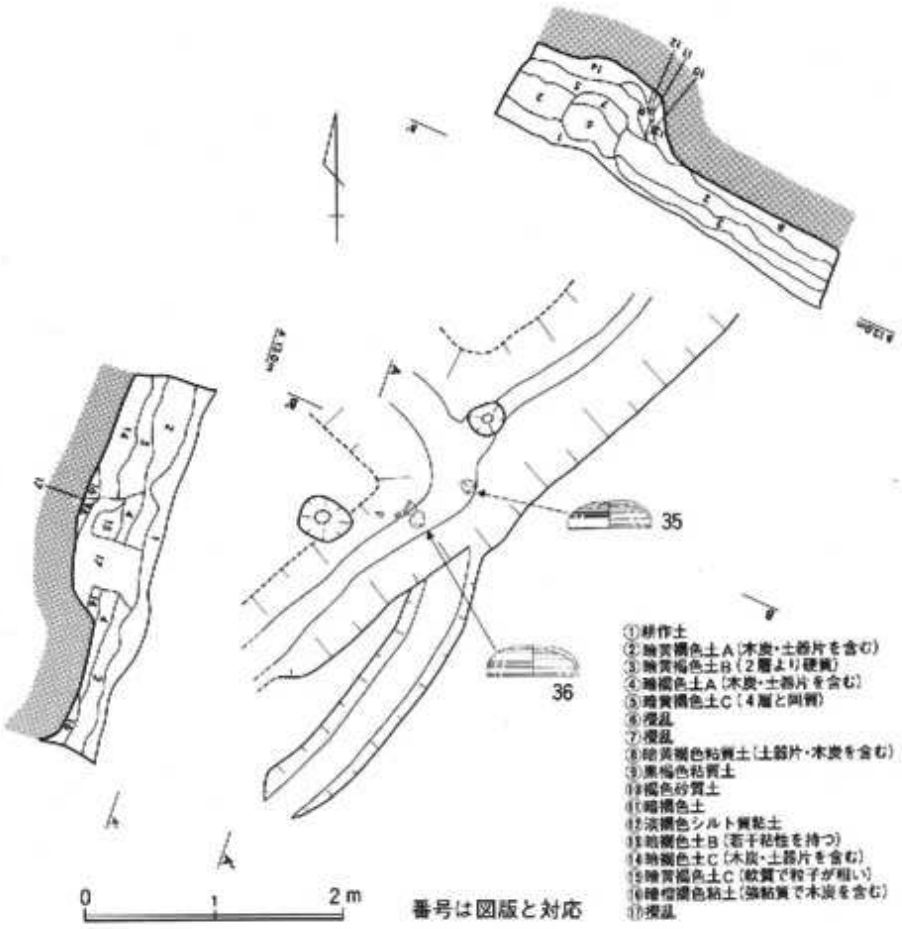
I－2区遺構群の北側で1mほどの包含層の落ち込みを3箇所のサブトレにより確認したが，遺構の存在は認められず，そのまま下段のSR01の氾濫原に達していると判断して，それ以上の掘削を行わなかった。サブトレから出土した遺物は細片のみで図化できなかったが，I区の他地点と同様6世紀後半から7世紀前半のものであった。

I－3区の崖上段にあたる標高11.5～12.5m付近ではI区の他箇所のように明黄褐色の地山が検出できず，暗茶褐色粘質土が深く堆積しており，この土層の上面には弥生時代



第7図　I－3区土器溜実測図（S＝1/30）

中期末の土器が散在していた。遺構は認められなかったもののⅠ－３区表土から太型蛤刃石斧が出土し，東隣のカンボウ遺跡から同時期の土器が断片的ながら出土することからも，石田遺跡を含む近隣の低丘陵地域に弥生時代中期～後期の集落域が展開していたものと考えられる。



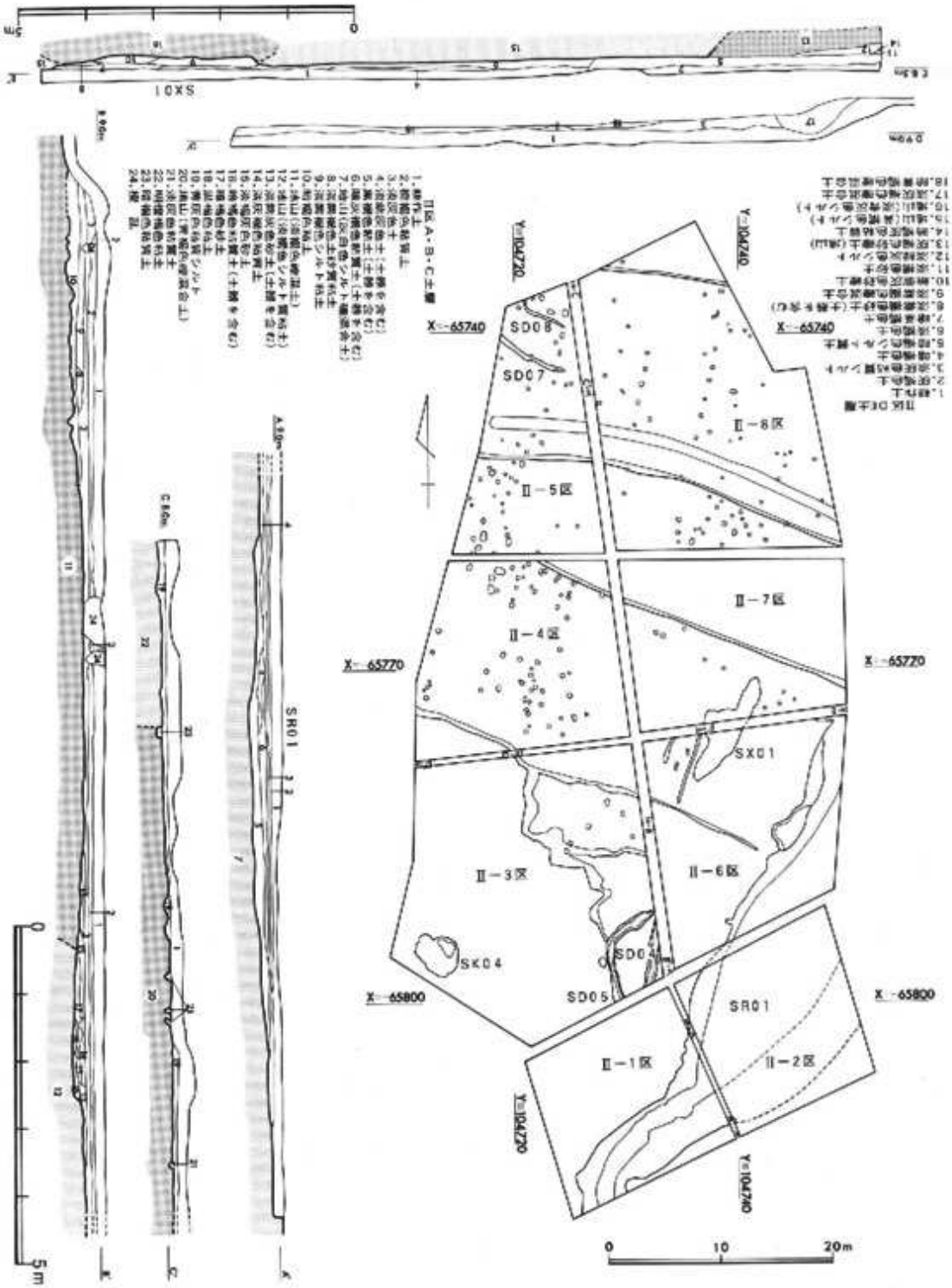
第８図　Ⅰ－３区ＳＤ０１実測図（Ｓ＝1/60）

Ⅱ・Ⅲ区

SD05・06（第11図）

Ⅱ－３区南東隅で検出した溝である。SD05はⅡ－３調査区南端から6.50ｍほど北流して完結する幅90cm・深さ10cmの浅い溝である。

SD06は５ｍほど北流し途中から北東方向に曲がり４ｍほど延びてSD05に合流する前に終わる。



第9図　Ⅱ区全体図（平面S＝1/600　断面S＝1/100）

幅50～100cmで深さ10cm以下の浅いものである。

2つの溝とも埋土は上層が灰褐色砂層，下層が淡褐灰色砂礫層で両層とも古墳時代後期の土器片を含んでいることから，同時期に形成されたものと考えられる。

SK05（第11図）

SD06に近接する長径90×短径70cm・深さ12cmの不整円形の土坑である。SD06で最上層に位置した灰褐色砂層がSK05では最下層に位置することからSD05・06より後出するものと考えられるが，その性格は不明である。

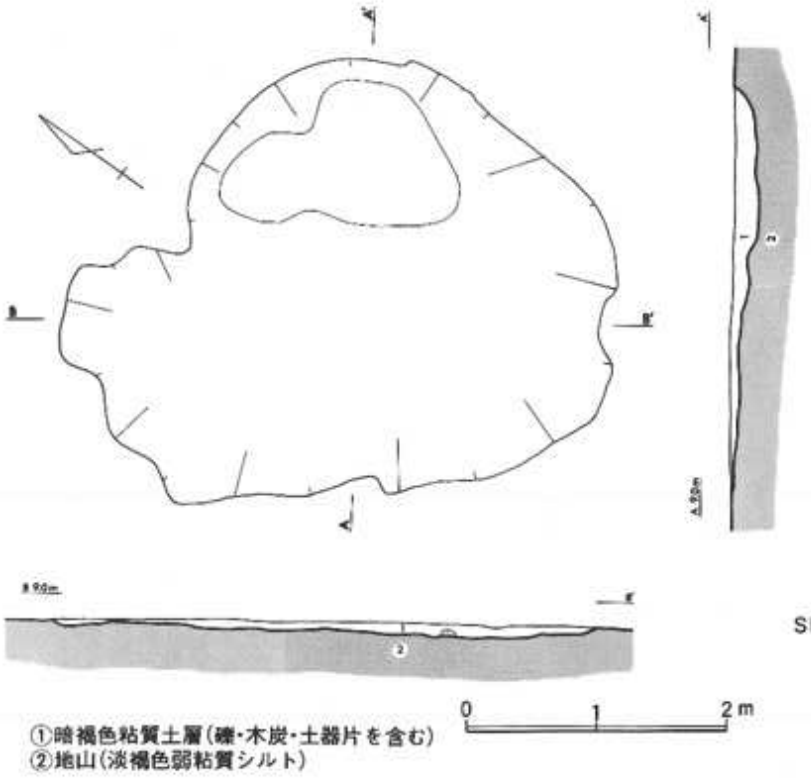
SK04（第12図）

Ⅱ－3区西端に位置する長径4.15m×短径3.25m・深さ20cmの不定形土坑である。土坑の最深部は東側に偏っており，埋土は古墳時代後期の土器片を含む暗褐色粘質土層1層であった。

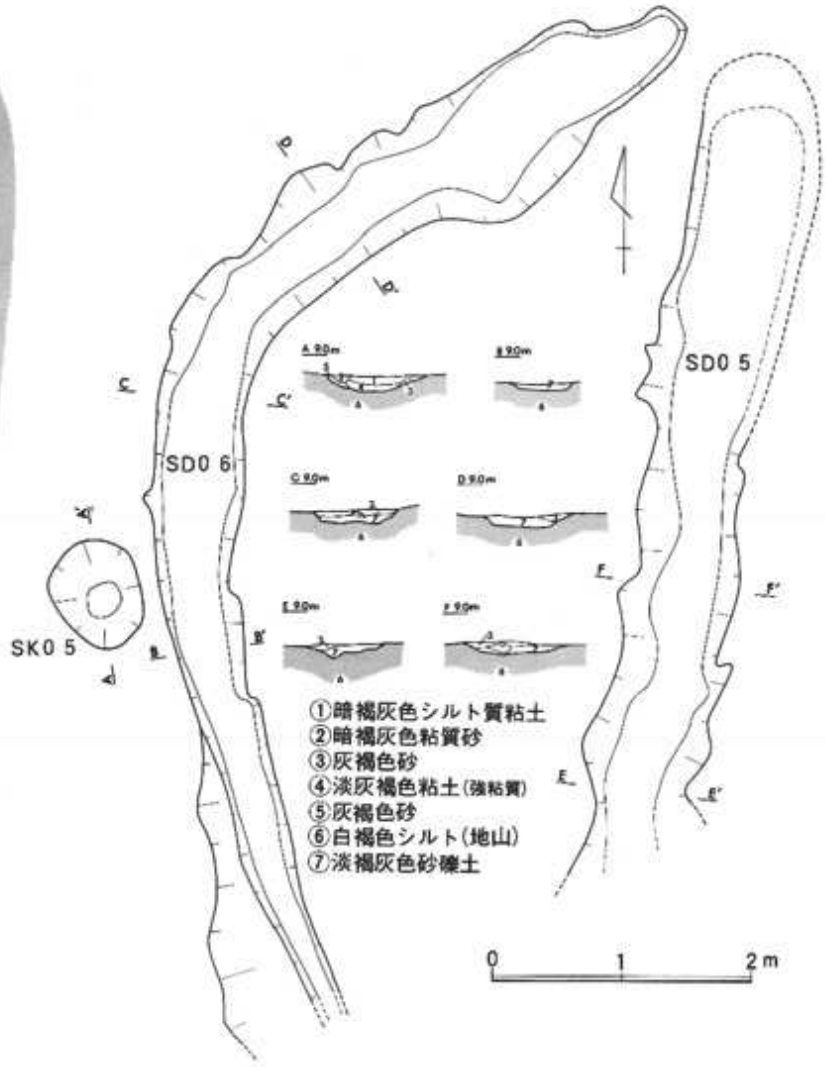
SX01（第13図）

Ⅱ－6・7区にまたがって存在する長さ10.5m・幅3.5m・深さ20cmの不定形土坑状の遺構である。底部には71の杯蓋など土器を含む紫褐色系の砂礫が堆積しておりSD05・06と類似し，形成過程・時期の近似性が指摘でき，SR01の増水時にその流水により形成された小規模な三日月湖状の落ち込みであろう。

第10図　Ⅱ－6区ＳＲ０１実測図（S＝1/150）

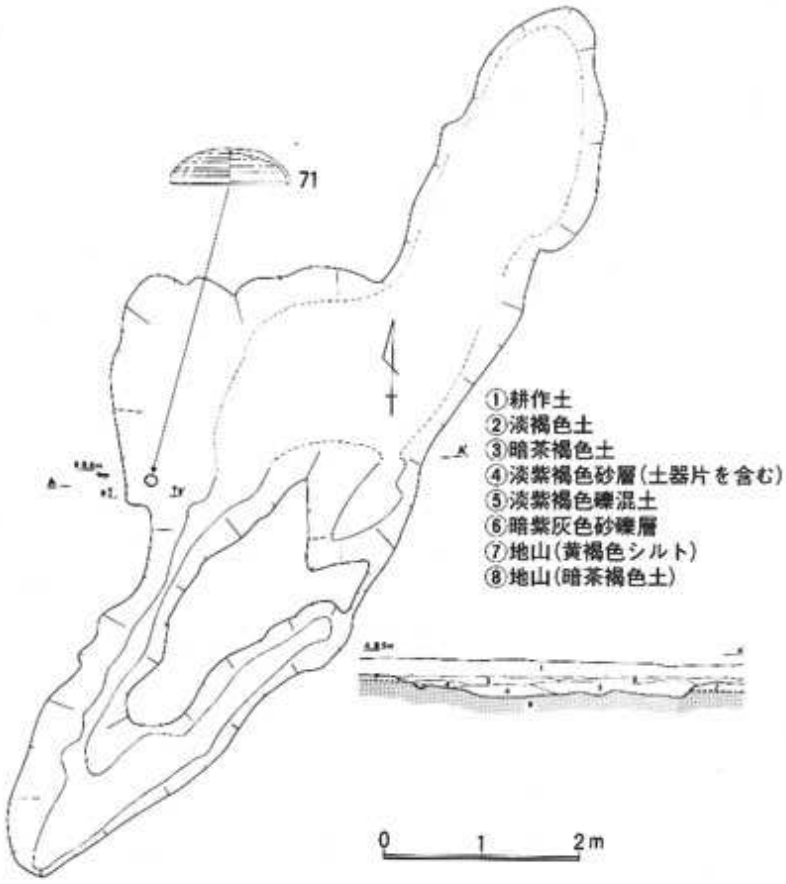


第12図　Ⅱ－3区ＳＫ０４実測図（S＝1/60）

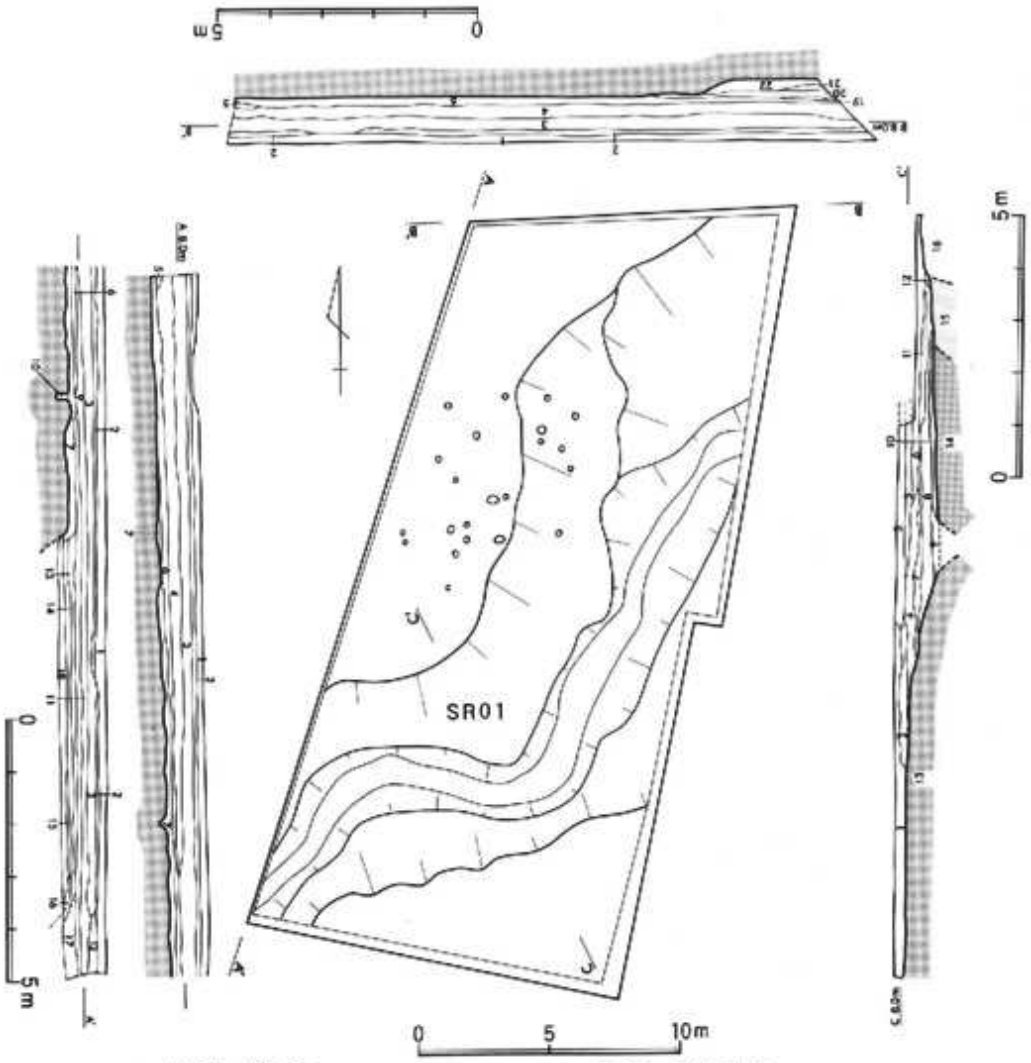


第11図　Ⅱ－3区ＳＤ０５・０６・　ＳＫ０５実測図（S＝1/60）

第14図　Ⅱ－5区ＳＤ０７・０８実測図（Ｓ＝1/60)



第13図　Ⅱ－6・7区ＳＸ０１実測図（Ｓ＝1/80)



Ⅲ区西・北壁土層

①耕作土
②明黄褐色土
③暗褐灰色粘質土
④灰褐色粘質土(木炭を含む)
⑤暗黄灰色粘質土A
⑥暗黄灰色粘質土B
⑦淡茶褐色土(木炭を含む)
⑧地山(橙褐色土)
⑨暗灰褐色粘質土(強粘質)
⑩淡黄褐色粘質土(木炭を含む)
⑪暗灰色粘土(土器片を含む)
⑫暗褐灰色粘質土
⑬明灰褐色砂質土
⑭暗灰褐色粘土(土器片を含む)
⑮明灰色粘質土(粘性弱い)
⑯灰色粘質土
⑰黒褐色粘土(強粘質)
⑱黒灰色粘土
⑲黒灰色粘土(土器を含む)
⑳淡灰褐色粘質土
㉑暗灰褐色粘質土
㉒暗灰色粘土

SR01・C断面土層

①灰茶褐色土
②淡灰褐色土
③灰褐色土
④褐灰粘質土
⑤暗灰粘質土
⑥暗茶褐色粘質土
⑦黒褐色粘土
⑧黒灰色粘土

土器・木炭・流木を含む

⑨黒灰色粘質シルト
⑩暗青灰色砂
⑪白灰色粘質シルト
⑫暗灰色粘質土
⑬淡青灰色礫層(地山)
⑭暗青灰色砂礫(地山)
⑮淡灰白色粘質シルト(地山)
⑯淡青灰色砂礫層(地山)

第15図　Ⅲ区全体図（平面S＝1/300　断面S＝1/150）

SD07・SD08（第14図）

ともにⅡ－5区北端に位置する溝である。SD07は南東から北西に流れる溝で西側は調査区外に及んでいる。幅20～40cm・深さ16cmをはかり，埋土は古墳時代後期の土器片を含む暗褐色粘質土層1層である。

SD08はSD07から北に3.5mの位置しSD07に平行するように3.5mほど北西に向かって流れ，それから北流し調査区外に延びる幅22cm・深さ9cmほどの溝である。埋土はSD07と同様に暗褐色粘質土である。

SR01（第9・10・15図）

Ⅱ－1・2・6区からⅢ区にかけて検出した南西から北東に蛇行しながら流れる自然河道で，現在遺跡の西側を流れる御茶屋川が石田遺跡Ⅱ－1区の直前で90度西に流れを変え，再び北流するように人工的に手が加えられる以前の流れと考えることができる。幅は最も上流にあたるⅡ－1区で4.5m，下流のⅢ区では幅8～10mに広がっている。深さ70cm前後までは上層から暗灰色粘質土・黒褐色粘土・黒灰色粘土など粘性の強い堆積物が広がっており，最上層には中近世土器や鉄鎌・北宋銭など鎌倉～江戸初期の遺物を含み，上層以下では古墳時代後期の土器を多量に含んでいた。粘土層下にはグライ化した青灰色砂礫層があり，大型の流木などを含んでいたが湧水のため掘削を断念した。

Ⅰ－1区出土遺物

SI01（第16図）

1～3は土師器甕であるが1は口径20.5cm，2は口径18.9cm，3は口径24.7cmをはかり，いずれも住居の14層暗黄褐色土から出土している。

4・5の杯蓋はいずれも小片で全体の1/5程度しか残存していなかったが，4は埋土中層出土で復原口径12.5cmをはかる。5は住居跡内のP－Dから出土したもので復原口径12.9cmをはかる。

6は14層から出土した杯身で口径12.2cmをはかる。7は住居跡下層から出土した高杯脚部で底径10.7cmをはかり，透かし孔は3方向に開いている。8の土錘はピットAに接する側溝底部から出土したもので長径3.6cm・厚さ3.0cm・重さ32.3gをはかり，精製品ではなく0.5mm以下の砂粒を含んでいる。

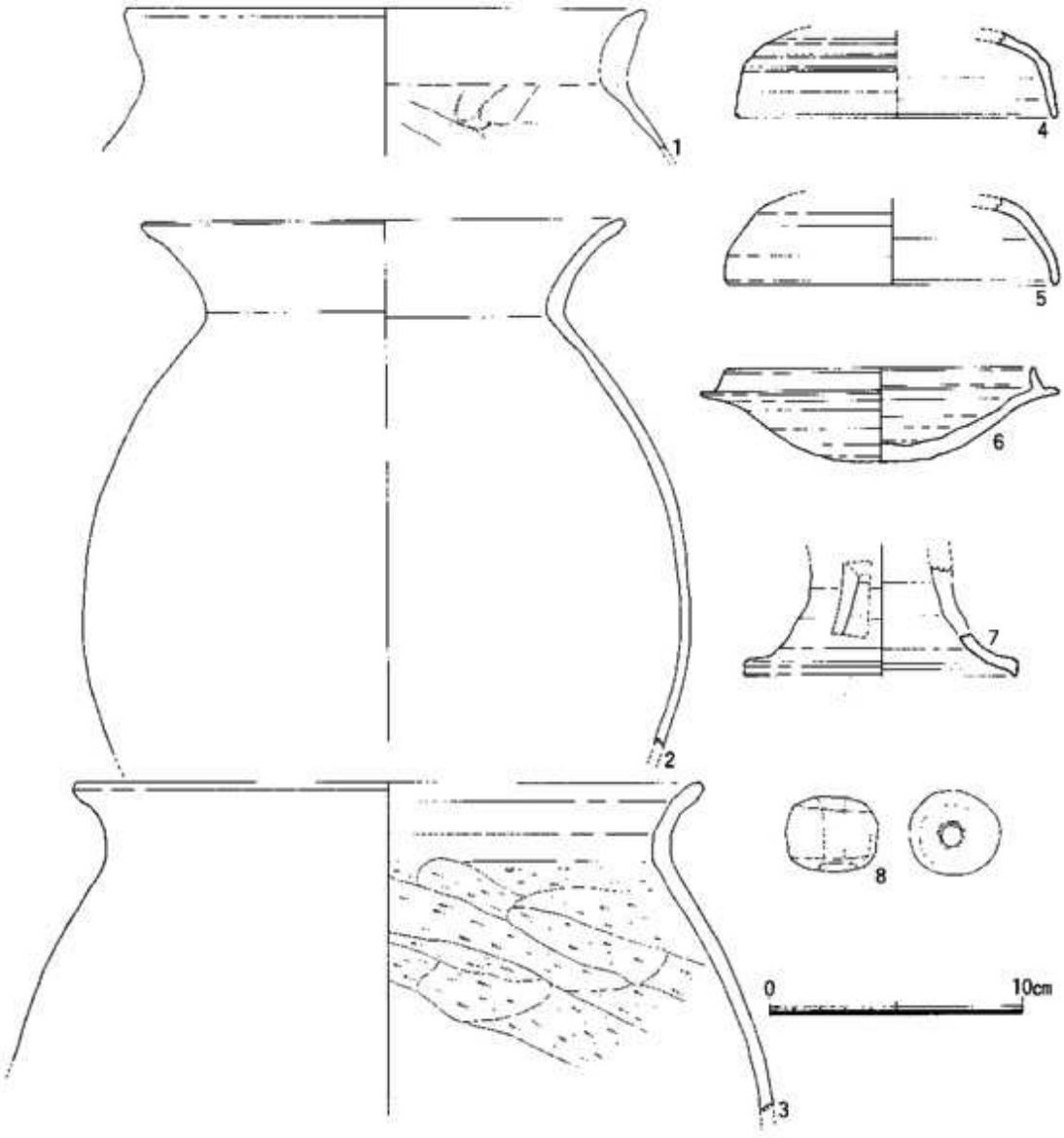
SK01（第17図）

9はSK01上面から出土した甕で，口径10.0cm・器高14.1cm・胴部最大径9.5cmをはかる。頸部・口縁部ともに無文で頸部から口縁部に移る部分の稜も退化し丸みを帯びている。口縁部は一部を残し打ち欠かれていた。

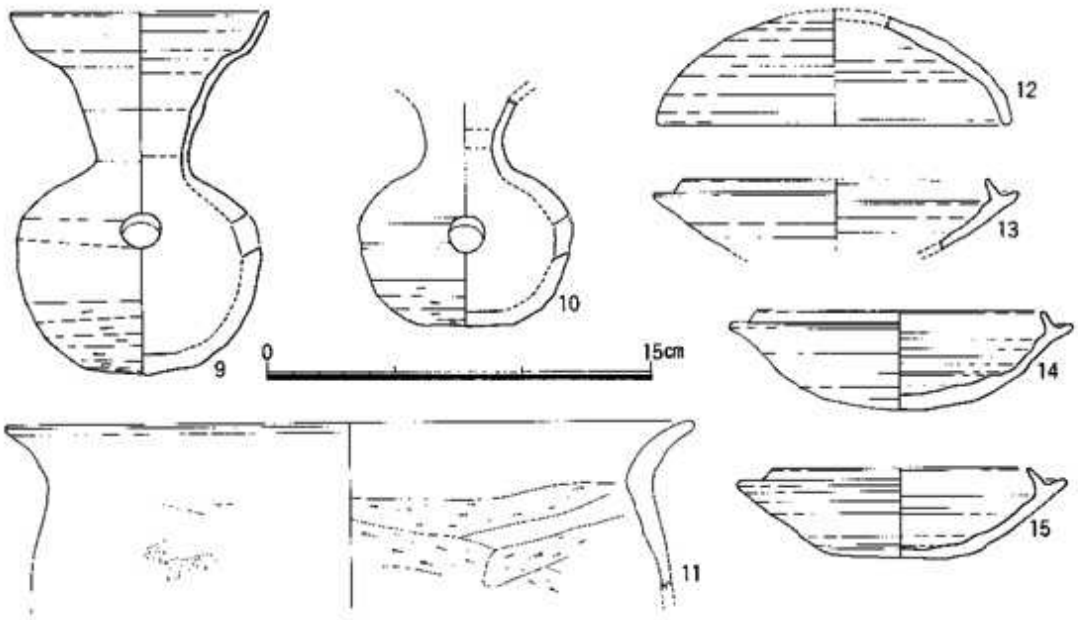
10は9と並んでSK01上面から出土した甕で，口縁部は打ち欠かれていた。9よりひとまわり小型で胴部最大径は8.4cmであるが，9と同様に文様や稜が退化したタイプになると考えられる。

包含層出土遺物（第17図）

11は土師器甕で口径26.6cmをはかる大型品である。12は須恵器杯蓋で口径13.5cm・推器高4.5cmで稜の痕跡を残さないものである。13～15は須恵器杯身で口径は13が12.0cm，14が11.1cm，15が10.0cmと多少差があるが製作技法・形態などは類似しており，ほぼ同時期のものと考えられる。



第16図　竪穴住居跡ＳＩ０１出土土器（Ｓ＝1/3）



第17図　Ⅰ－1区ＳＫ０１・包含層出土土器（Ｓ＝1/3）

Ⅰ－２区出土遺物

SK02（第18図）

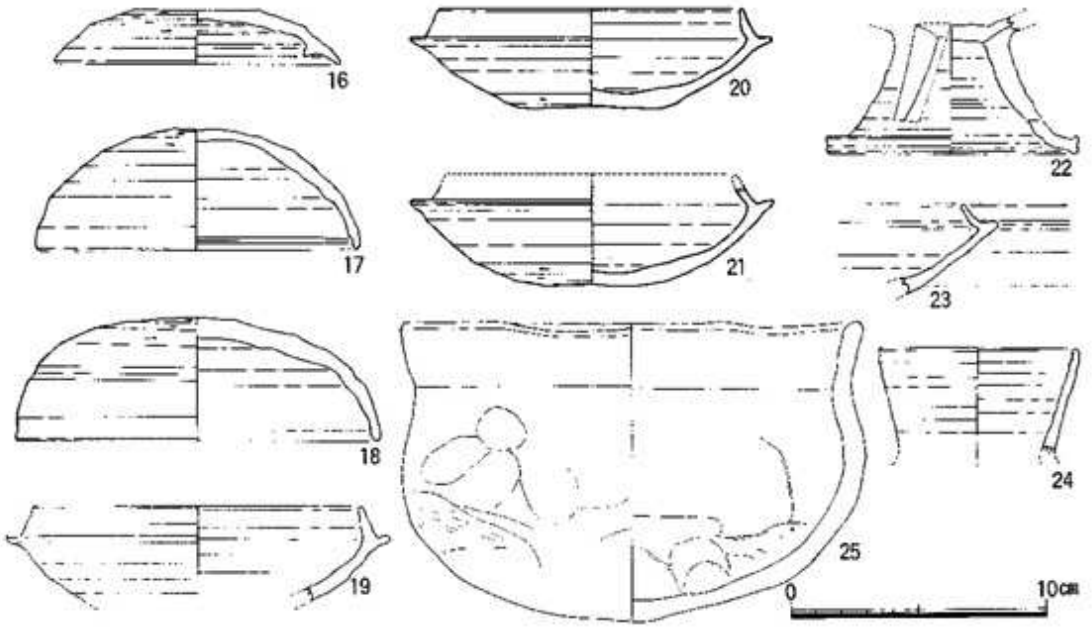
25は土師質の鍋形土器で口径17.5cm・器高11.6cm・最大径18.0cmをはかり，体部外面上半には煤が付着し，下半部は火を受けて暗赤褐色を呈している。調整痕は明確ではないが，口縁部内外面は微細な条痕を残すヨコナデ，体部下半部も微細な条痕を残すナデ・ユビ押さえ調整である。体部内面もユビ押さえ・ユビナデ調整だが部分的にケズリ状に砂粒の動いた痕跡も見られる。

SB01・焼土付近（第18図）

17・18・20・21がSB01付近地山面及び焼土直上遺物であるが，17の杯蓋は比較的器高が高く天井が丸いもので，口縁端部内面には段が退化した沈線がめぐっている。口径は12.3cmである。18の杯蓋は稜を沈線を施すことによって表現しており，口径は13.8cmである。20は口径11.8cmの杯身で器高は3.9cmである。21は口縁端部を欠損しているが最大径14.2cmをはかる杯身である。

Ⅰ－２区包含層（第18図）

16は杯蓋として図化したが中央部は欠損していたためつまみの有無は不明である。口径10.9cmをはかる。19は口径12.6cmの杯身である。立ち上がり内面基部には深い沈線を持たずに緩やかに立ち上がるものである。22は高杯脚部で３方向に透かし孔を持ち，底径9.6cmをはかる。24は須恵器直



第18図　Ⅰ－Ⅱ区ＳＫ０２・ＳＢ０１・包含層出土土器（Ｓ＝1/3）

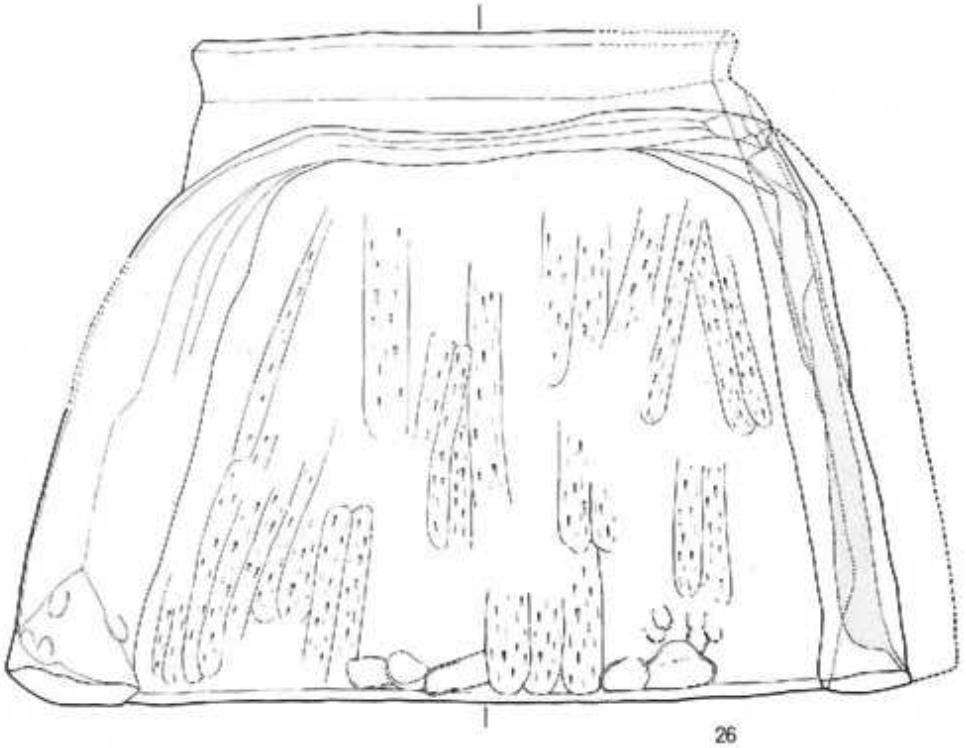
口壺の口縁部で復原口径7.6cmをはかる。

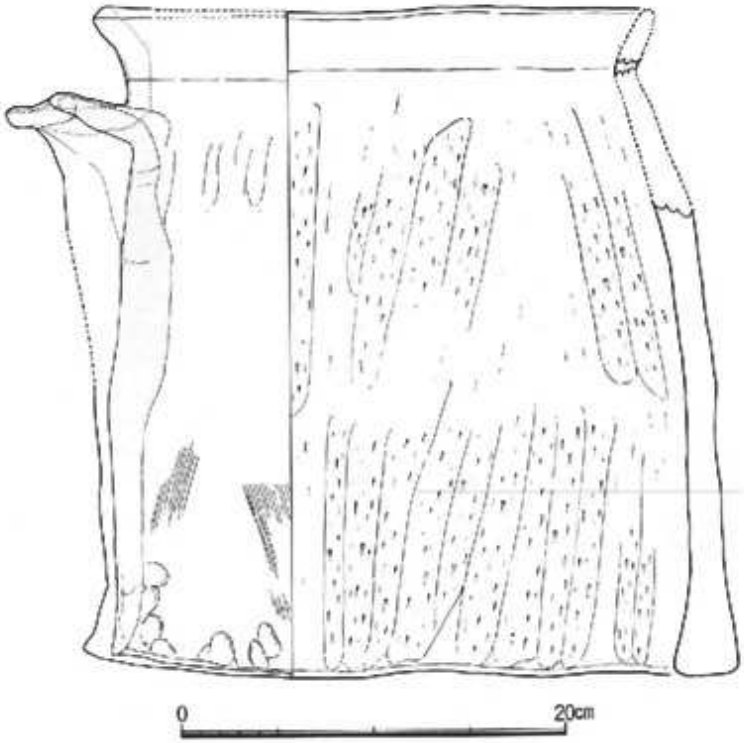
Ⅰ－３区出土遺物

土器溜（第19・20・21図）

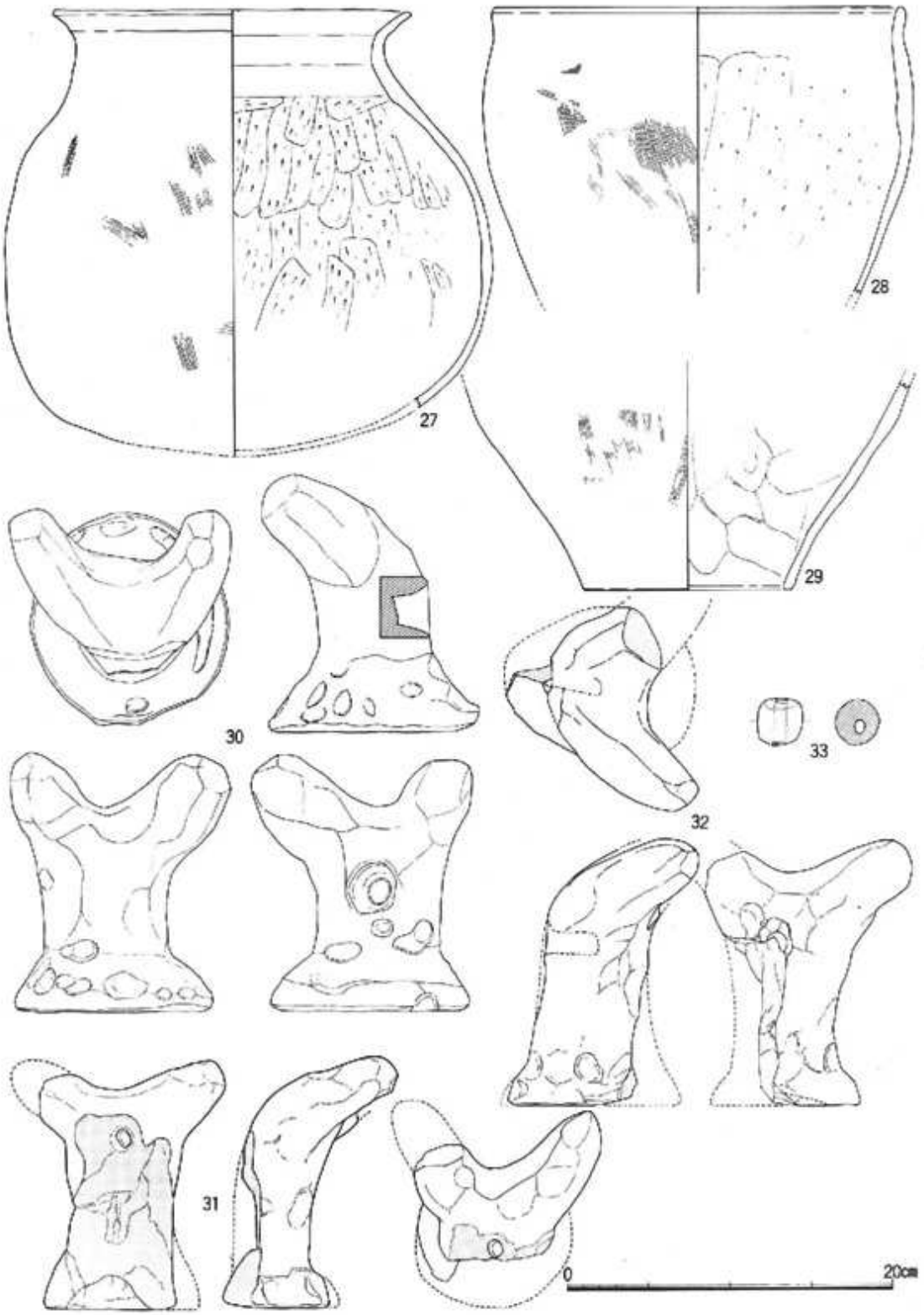
26は置竈（移動式竈）で破片化していたものの８割以上復元できた残存状況の良いもので，高さ34.6cm・釜穴径27.2cm・焚口の高さ27.7cm・焚口の幅25.0～35.2cm・器壁の厚さ2.0cmをはかる。内面は若干，火を受けているらしく淡赤褐色化しているが，色調の変化は僅かであり，あまり使用しなうちに破却されたものであろう。外面には15cm程度の幅で帯状に黒斑がめぐっている。焚口の底は体部の完成後に帯状の粘土板を貼り付ける付け底であり，右側面の底は全て剥離し，天井部の底は形成時の粘土の重量により中央部がややたわんだように下がっている。調整は内面が下から上へ向けてのヘラケズリで外面は縦方向のハケメ調整で，焚口と口縁部はユビナデ・ヨコナデ調整である。

27は土師器甕で口径21.7cm・胴部最大径30.0cm・頸部径18.9cm・器壁の厚さ４㎜をはかり，底部は欠落するが重心が器高の1/2よりやや下った位置にあり，安定した丸底になると考えらる。口縁部内外面はヨコナデで，頸部以下の胴部内面は下から上方向へのヘラケズリを施し，外面は剥落や煤の付着により不明な点も多いが，縦方向のハケメ調整をほどこしている。外面は全体的に煤が付





第19図　Ⅰ－3区土器溜出土土器1（S＝1/4）



第20図　Ⅰ－3区土器溜出土土器2（S＝1/4）

着しており，底部は熱で暗灰褐色に変色している。

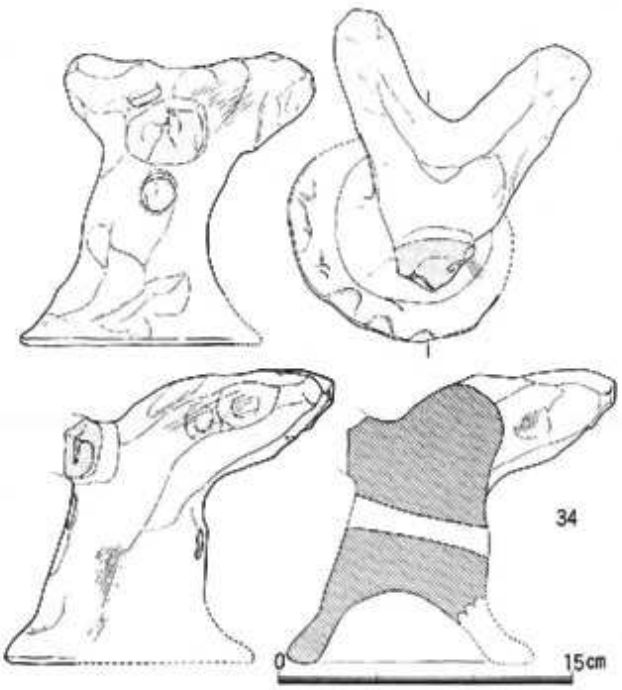
28・29はともに甑形土器であり，図上では別個体として掲載しているが出土地点が近接し，色調・胎土なども類似しているため同一個体の可能性も考えられる。28の口径は25.1cm。29の底径は12.6cmで内面は下から上へのヘラケズリで外面は縦，斜め方向のハケメ調整で口縁部・底縁部はともにヨコナデである。底部は筒抜けのタイプであるが，桟を渡すための穿孔の有無は不明である。

30～32・34は土製支脚である。背面の穿孔が途中で止まる30～32のタイプと穿孔が正面まで貫通し，背面につまみを持つ34のタイプがある。30は高さ15.9cm・底径10.5cmで底部に粘土が充塡され平底である。全体の整形はユビナデ・ユビ押さえによる。31は高さ15.3cmをはかり，底部は8mmほどの凹面を持っている。32は高さ15.3cmをはかり底部に高さ2.1cmの凹面を持っている。34は高さ14.9cm・底径11.3cmをはかるもので，底部は高さ3.6cmの凹面を持っている。調整はユビナデ・ユビ押さえの後，部分的にハケメ調整を行っている。いずれの土製支脚も直接火を受ける正面は二次焼成により淡橙褐色～明橙褐色に変色している。

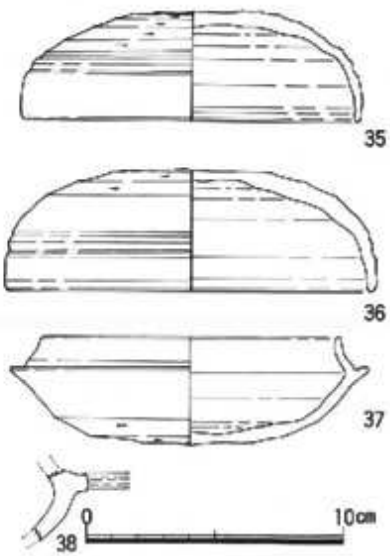
33は土錘で一部欠損しているが，全長2.9cm・幅2.7cm・現状での重さ18.4gをはかる。

SD01（第22図）

35は須恵器杯蓋で口径13.1cm・器高4.3cmをはかり，稜は2条の凹線を施すことにより突出する中央の降帯をそれに見立てている。口縁端部内面には段の退化した幅2mmほどの沈線がめぐってい

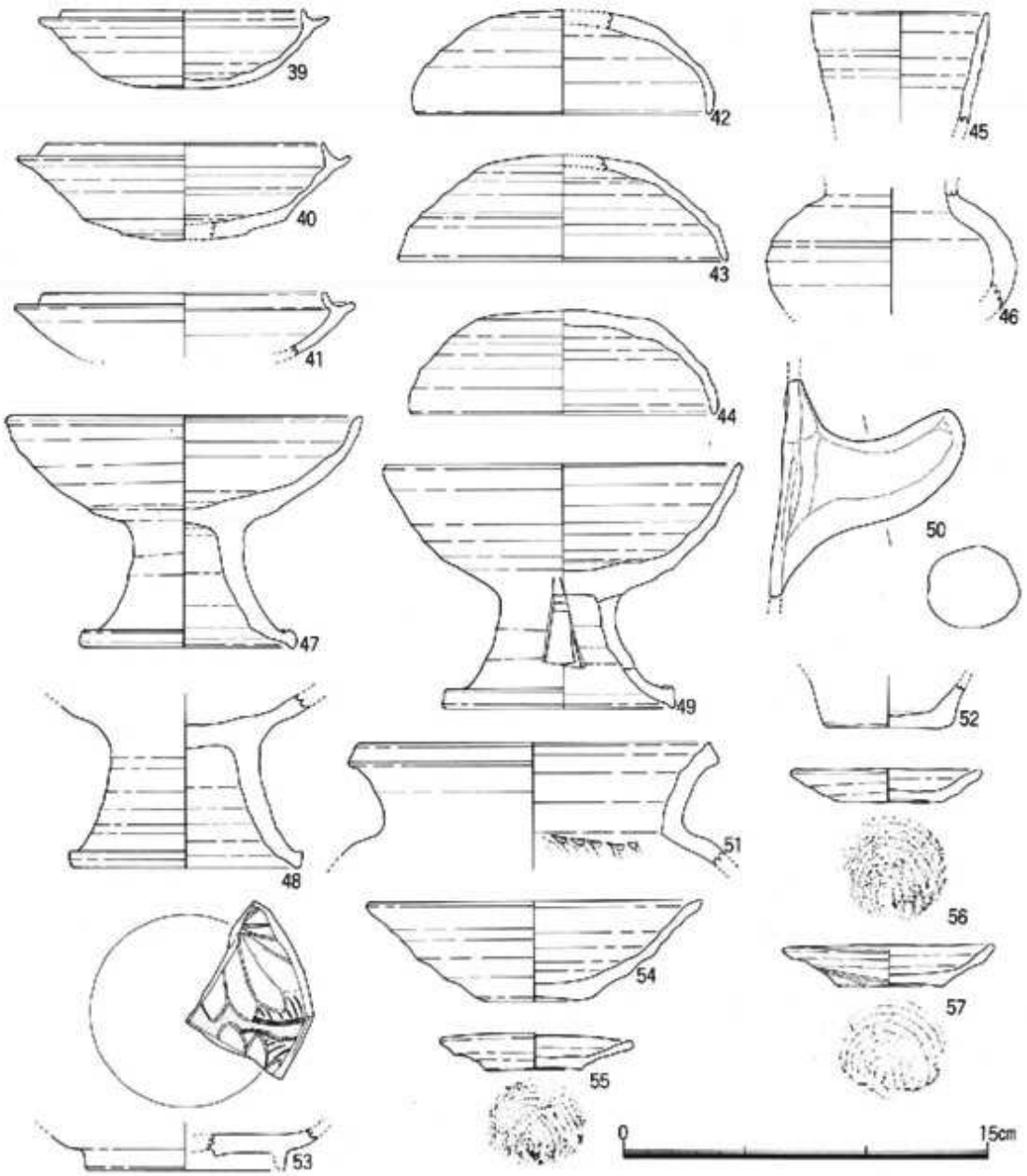


第21図　Ⅰ－3区土器溜出土土器3（S＝1/4）

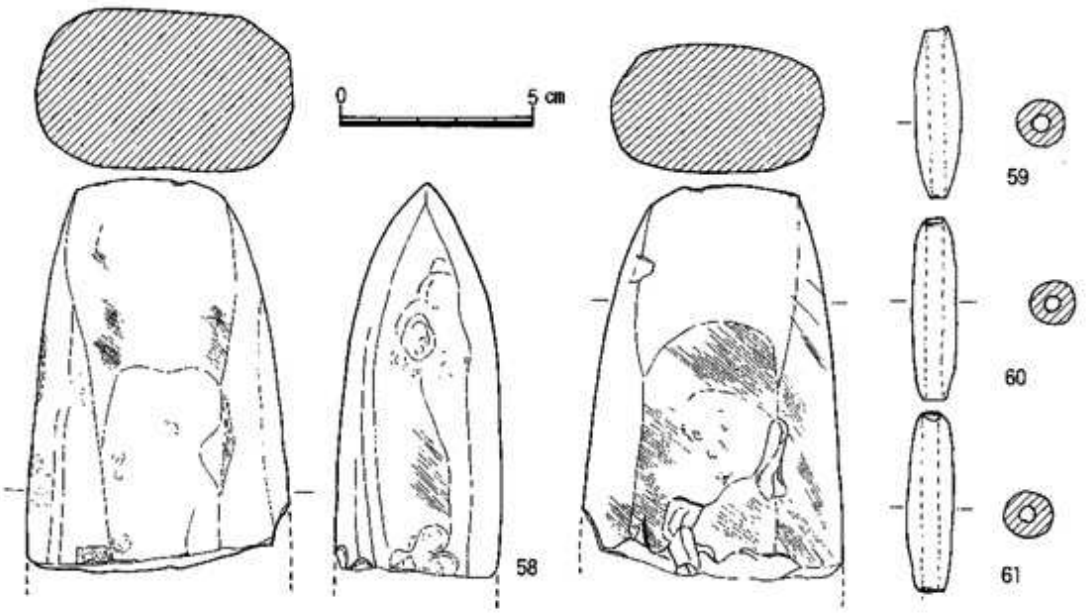


第22図　Ⅰ－3区SD01出土土器（S＝1/3）

る。36も杯蓋で口径14.1cm・器高4.7cmでほぼ35と類似した形態であるが，口縁端部内面の沈線は消失している。37は杯身で口径11.5cm・器高4.2cmで立ち上がりは内傾して延びながら途中でやや外反して終わっている。38はSD01埋土から出土した弥生土器で壺の胴部と考えられる。幅6㎜長さ8㎜の貼り付け凸帯を持ち，その側面には2条の凹線を施している。



第23図　Ⅰ－3区包含層出土土器（S＝1/3）



第24図　Ⅰ－3区包含層出土石器・土製品（S＝1/2）

Ⅰ－3区包含層（第23・24図）

39～41は須恵器杯身である。口径は11.3～11.9cm・器高は3.2～4.0cmである。口縁部の形態など一律ではないがいずれの個体も回転ヘラケズリを行わず，回転ヘラ切り調整のみである。

42～44は杯蓋で口径12.1～13.5cm・器高4.3～4.4cmでいずれも稜が強い回転ナデ調整による緩やかな起伏によって僅かにつけられる程度に退化したもので，天井部は高く丸みを持っている。

47～49は高杯で口径14.4～14.6cm・底径8.6～9.5cm・器高9.5～10.1cmである。47・48は脚部に透かし孔をもたないが，49は2方向に透かし孔を持つものである。

45は直口壺の口縁部で口径7.1cmである。46は破片資料であるが，形態・大きさから甑になると思われる。50は土師器甑の把手で牛角状の形状を呈する。51は壺の口縁部で口径は14.5cmをはかり，口縁部はヨコナデで頸部直下の内面はヘラ状工具で刺突して接合部分を補強している。52は弥生土器の底部で，底径4.7cmをはかる。

53は伊万里焼の皿で図柄は花弁文様で，底径は8.0cmである。54～57は土師皿で54が口径13.8cm・器高4.1cmをはかるが，その外の3個体は口径7.7～8.6cm・器高1.4～1.7cmの小型品で，底部はすべて回転糸切り痕を残している。

58は弥生時代の太型蛤刃石斧で基部は欠落しているが長さ10.1cmが残存している。刃部の長さは3.8cmで一部に刃こぼれがあるが，顕著な使用痕は認められない。体部には部分的に斜め方向の擦

痕が認められるが，使用痕か形成段階の研磨痕かは現状では不明である。材質は泥岩質の堆積岩で，現状での重量は466ｇである。

59～61は土錘で全長4.4～4.7cm・幅1.2cm・重量4.8～6.5ｇで胎土はほとんど砂礫を含まない精製されたもので，規格性の高いものである。

Ⅱ・Ⅲ区出土遺物

SR01・SX01（第25・26・27図）

62～66は須恵器杯身で立ち上がりの長い63・65・66と立ち上がりが短く内傾する62・64に分類できる。立ち上がりの長いタイプは口径10.9～12.6cm・器高4.1～5.0cmで底部の回転ヘラケズリも1/2付近まで達している。立ち上がりの短いタイプは口径9.9～11.2cm・器高3.9cmである。

67～71・78・79は杯蓋で69・70などはやや鋭さを失いながらも突出する稜を持ち口縁端部に段が残存するなど比較的古相を残している。71はSX01出土で口径12.0cm・器高3.7cmの完形品であるが稜は痕跡を留めるだけで天井部も丸味を帯び，回転ヘラ切りの後，回転ナデを施している。

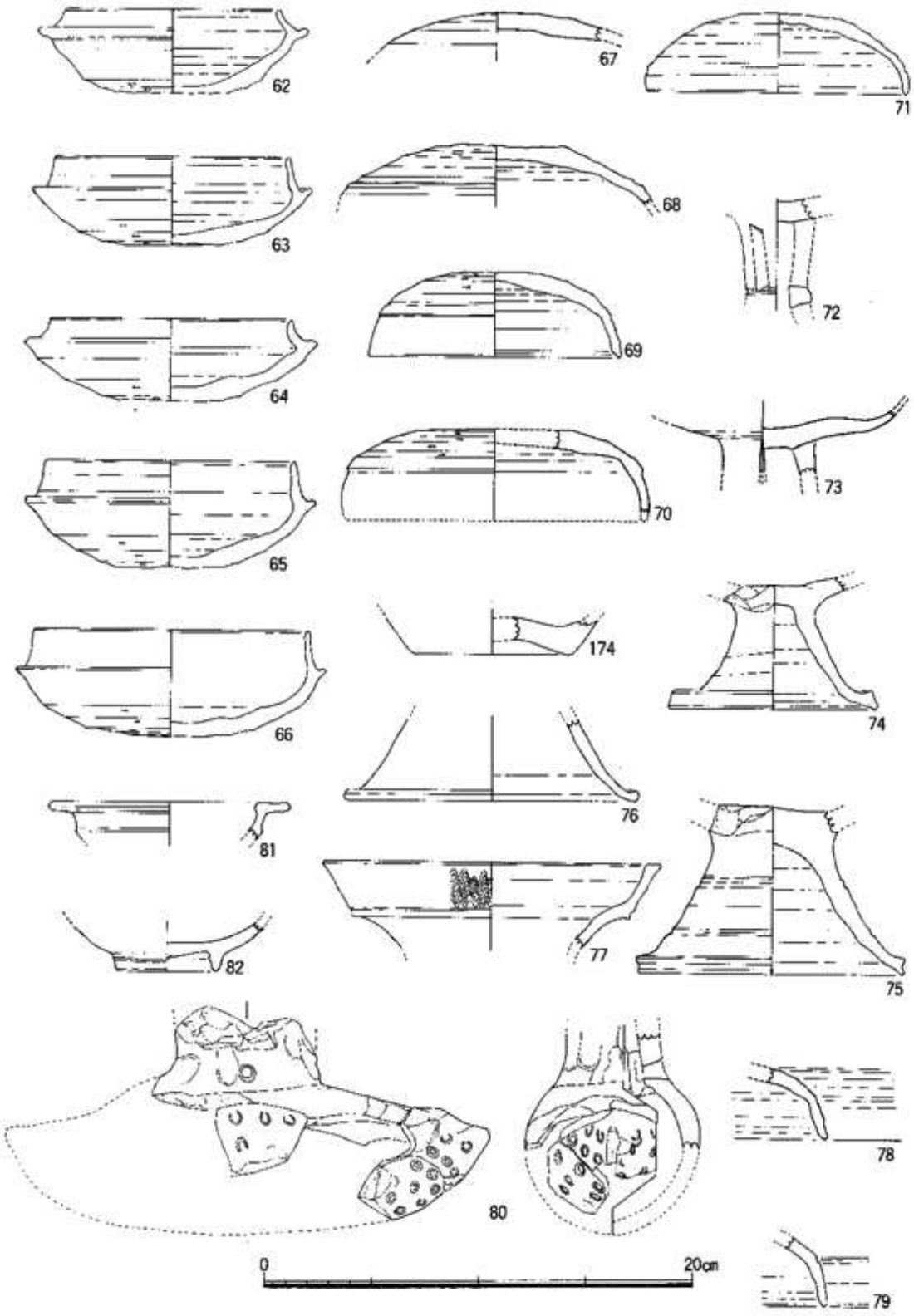
72～76は高杯であるが，72が長脚２段透かし孔（３方向）を，73が２方向の透かし孔を持つ以外は透かし孔を持たないものである。74はやや小型で底径9.5cm，75・76はそれぞれ底径12.3・13.4cmである。

77は甕の口縁部になるものと思われ，口縁部外面に８～９条の櫛状工具による波状文をめぐらせている。口径は15.6cmで，頸部から口縁部に移る稜はシャープに斜め下方に突出する。

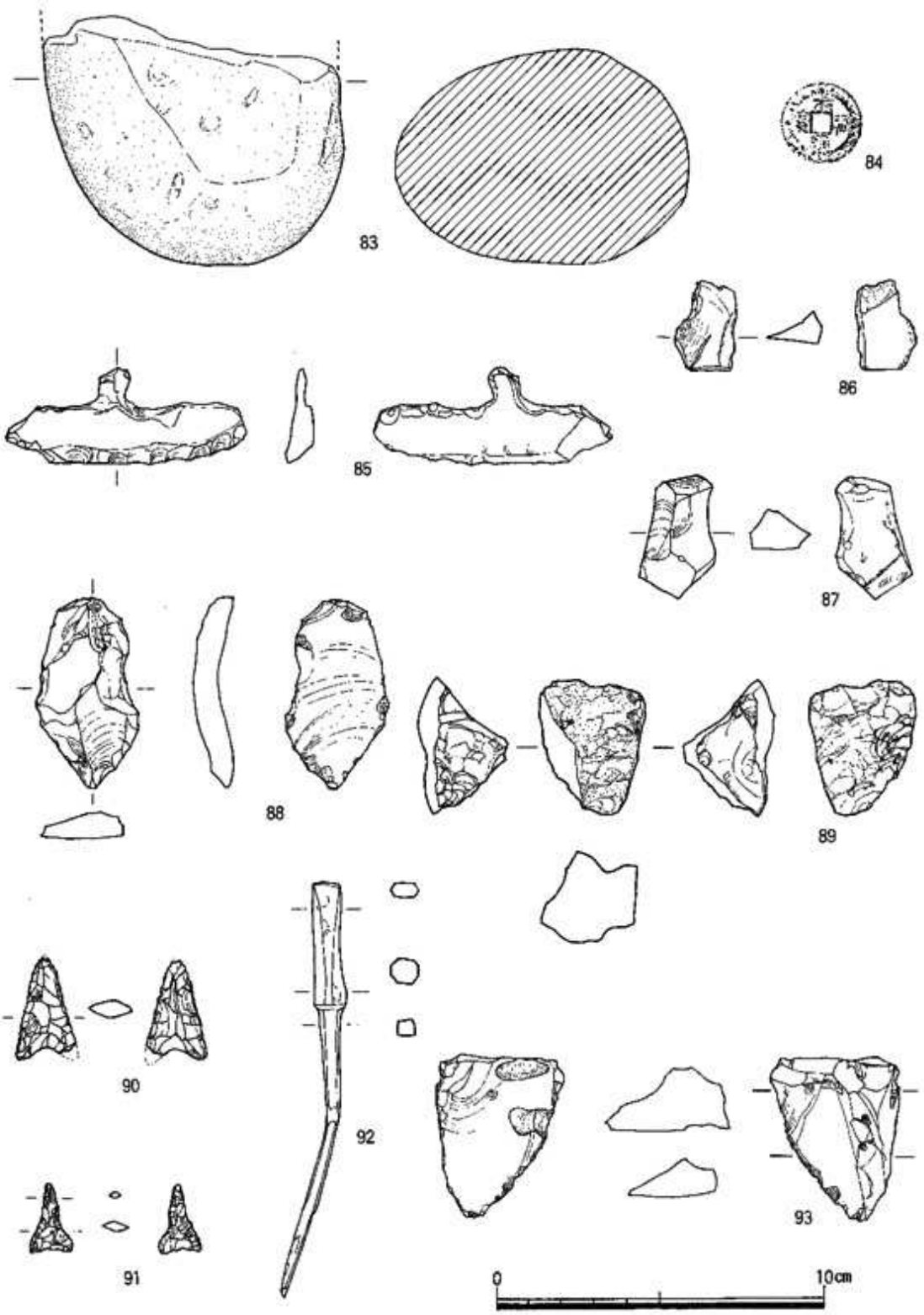
80は皮袋形瓶で全体の残存状況は良くないが，全体像は想像を交えて図上復原した。通常の皮袋形瓶は体部の側面観が台形もしくは扇形になるが，本例では半月状を呈し，鳥形瓶とも思える形状である。胴部上半は無文で，下半部は規則的に直径６～７mmの竹管文を配列しているが，縫合線を表す隆帯は表現されない。頸部中程には両側から穿孔されているが，片側しか貫通していない。全長は22.5cm程度・器高は11cm以上になると考えられるが口縁部が欠損しているため詳細は不明である。胴部下半中央で袋を閉じるように粘土を接合し，外面にはみ出した粘土を鋭利な工具で削り取っている。同種の土器としては粗雑な作りで，口縁部内面には頸部接合時にはみ出した粘土塊が厚く付着するなど鈍重な印象を与えるものである。島根県では松江市・山代二子塚古墳，岩屋後古墳例に続き３例目である。(註2)

81・82は混入した中近世土器である。81は暗緑色の釉薬のかかった燭台と考えられる。口径は10.9cmである。82は伊万里焼の碗で底径4.5cmで高台側面に幅１mmの条線を描いている。174は弥生土器の底部で，やや上げ底になっており底径は7.2cmである。

83は磨石で幅9.0cm・厚さ6.5cmをはかるが途中で欠損しているため全長は不明である。石材は凝



第25図　Ⅱ・Ⅲ区自然河道ＳＲ０１出土土器（Ｓ＝1/3）



第26図　Ⅱ・Ⅲ区自然河道ＳＲ０１出土石器・鉄製品（Ｓ＝1/2）

灰岩質の柔らかいものである。84は北宋銭「元祐通宝」（初鋳1086年）で，字体は篆書体であり，径2.45cm・現重量2.33ｇをはかる。

85は安山岩製の石匙であり，全長7.4cm・高さ3.0cm・厚さ6.5mm・重量13.7ｇで，表面は風化しているが下部全面に刃部を作り出している。摘みは幅９mm・長さ1.3cmである。

86・87は黒曜石の剥片であるが，図示したもの以外に十数点の剥片が出土した。88・93は黒曜石のスクレイパーで，88は全長5.8cm・幅3.0cmをはかり底面は湾曲して滑らかである。93は全長5.0cm・幅3.9cm・厚さ2.1cm・重量29.63ｇである。89は碧玉の剥片で玉の形割工程途中のものと思われ，暗緑色硬質の良質石材である。調査区からは他に４点ほど碧玉が出土している。

90・91は凹基式の石鏃で，90は安山岩製で全長3.3cm・幅1.9cm・重量2.19ｇである。91は黒曜石製で全長2.2cm・幅1.3cm・重量0.51ｇをはかる。92は中世の鉄鏃と思われ全長12.7cm・刃部の幅８mm・重量17.49ｇをはかる。

94～123は全て土錘である。94～115は細長いタイプのものだが，その中でも全長３cm前後のものと，４cmを越えるものに分類することができるが，最も重いものでも6.5ｇを越えるものは無く，ほとんどのものは１～３ｇの間におさまり，胎土は暗橙褐色で砂粒をほとんど含まず，規格性の強いものである。

116・118はそれぞれ全長4.3cm・4.7cm，重量13.8ｇ・42.1ｇをはかる厚長型のもので，胎土中に若干砂粒を含むが焼成は良いものである。

116・117・119～123は丸型のもので全長より全幅が広いもので，重量は15.9ｇ～36.5ｇをはかるが，胎土中に砂粒を多く含み比較的焼成の甘いものである。

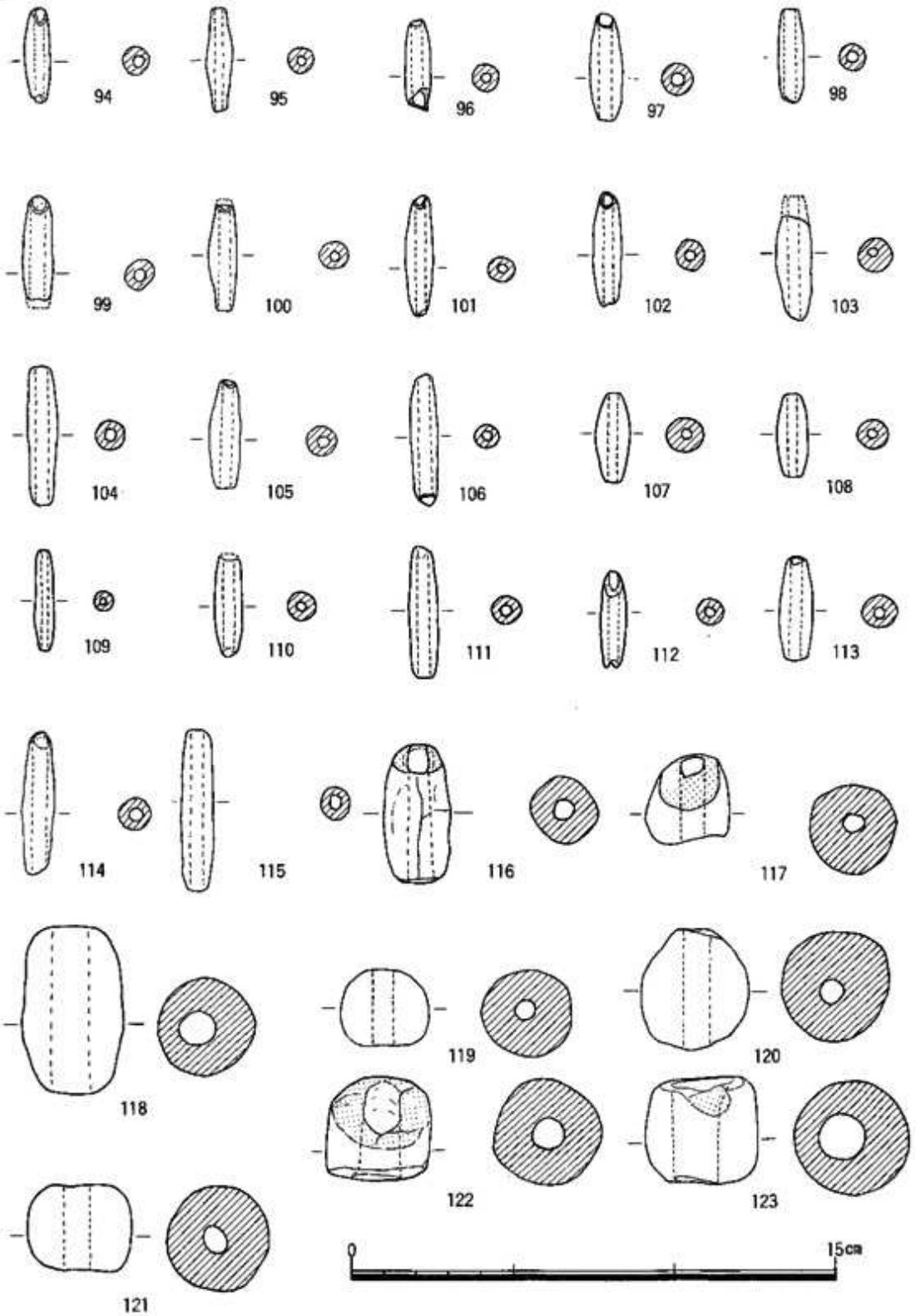
Ⅱ・Ⅲ区包含層（第28・29図）

包含層中からは，弥生時代後期から古墳時代初頭，古墳時代後期，鎌倉～江戸時代の遺物が出土している。弥生土器・古式土師器は数量的には少なく磨滅したものが多いが，古墳時代後期の土器は数量も多く，磨滅の少ないものでカンボウ遺跡や石田遺跡Ⅰ区と関連が深いものと考えられる。

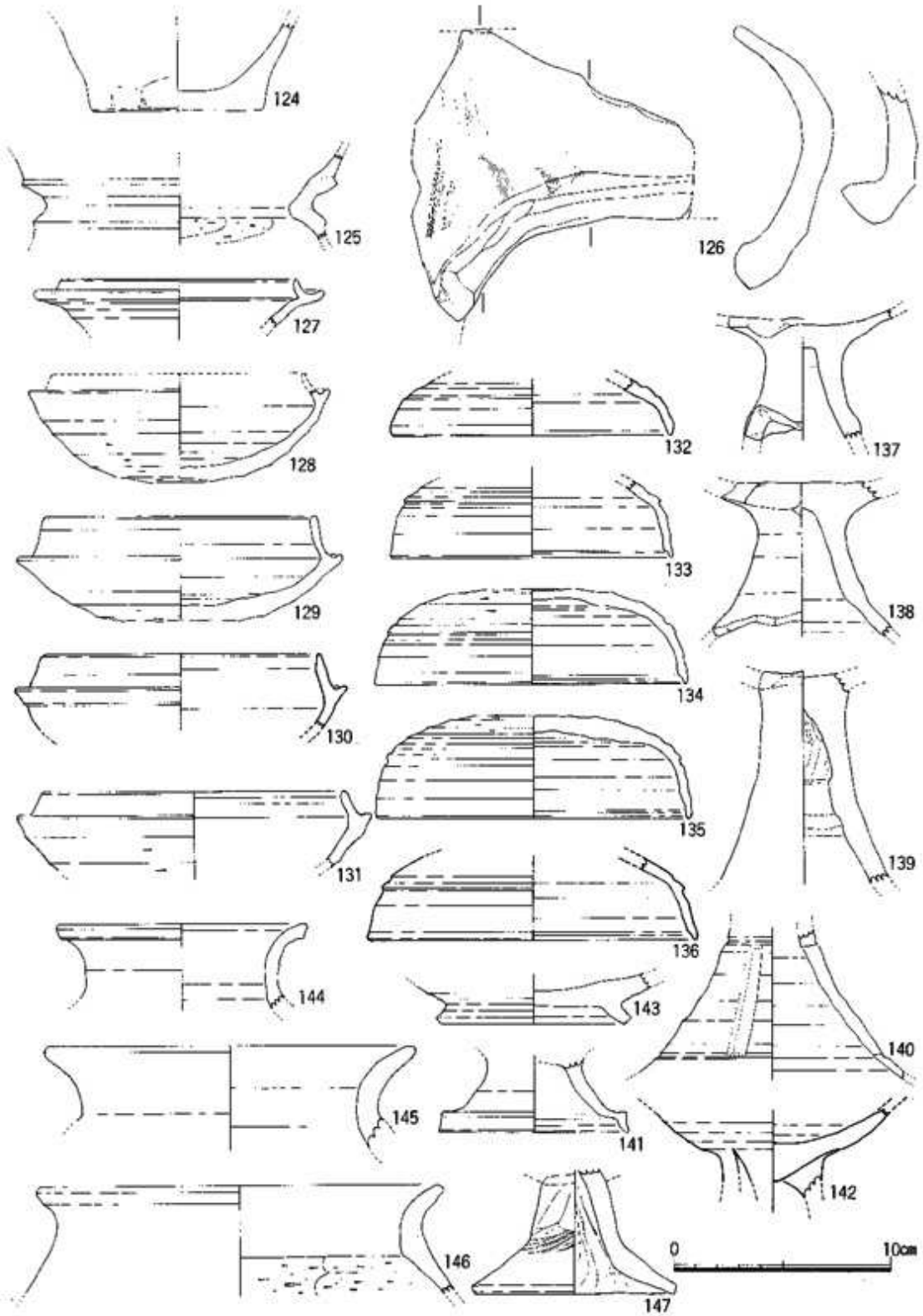
鎌倉～江戸時代に至る間の遺構は確認できなかったが，青磁・白磁・青白磁・青花・伊万里・唐津・天目・備前・土師質土器・北宋銭・寛永通宝・鉄鏃など数量は少ないが多様な遺物が出土している。以下，その概要について述べてみる。

124は弥生土器の底部で底径7.7cmをはかり，安定した平底である。125は古式土師器の鼓形器台で筒部しか残存していないが，脚台部内面は横方向のヘラケズリを施すもので，外面の部分は磨滅のため調整不明である。上部穿径は14.6cm，下部穿径は13.5cmで小谷式に属するものである。

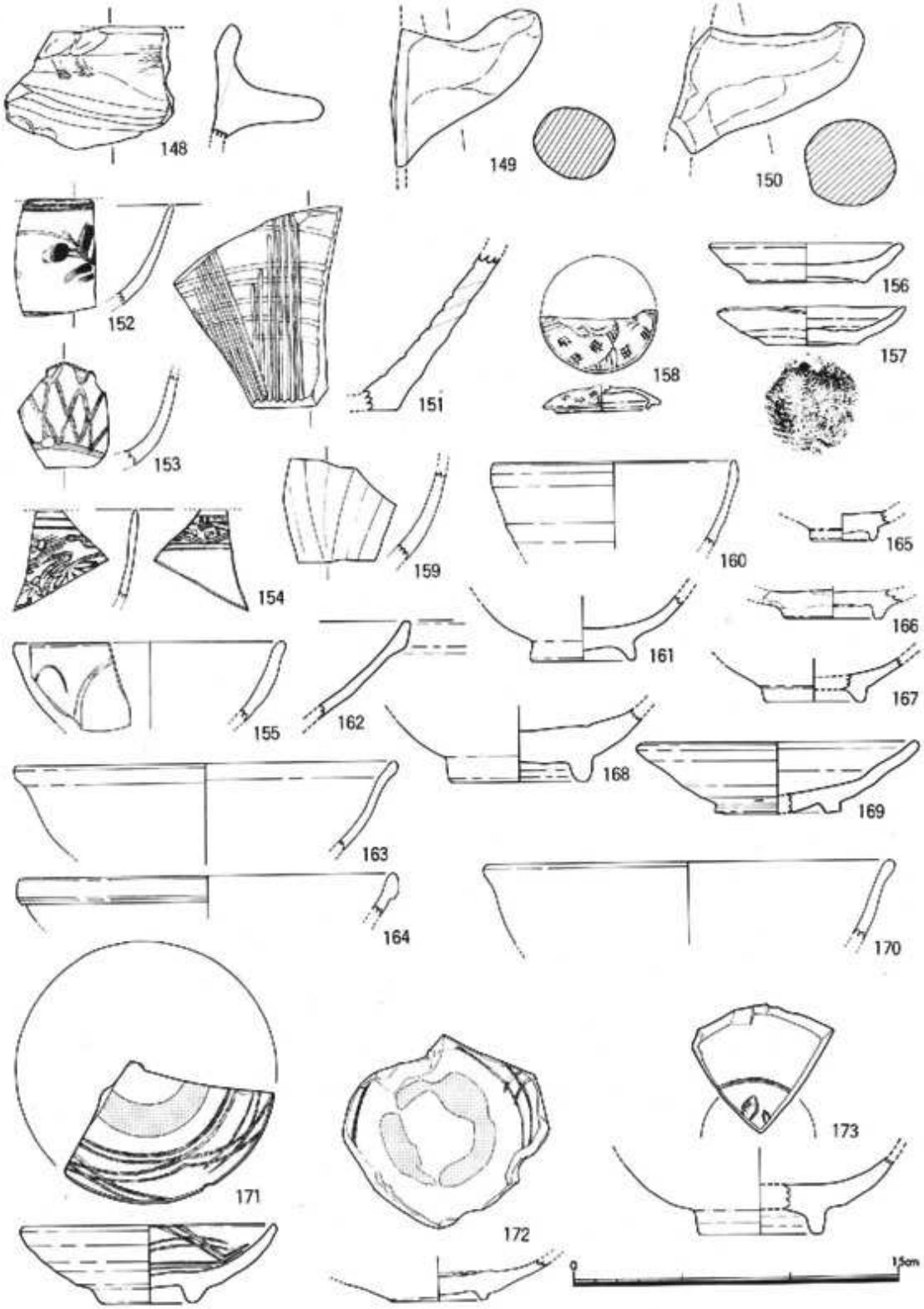
126は貯蔵の焚口左側上部の破片で，庇は壁体から1.5cm程度突出するタガ状の付け庇である。Ⅱ・Ⅲ調査区内でも竈の破片は数点あり，１区など丘陵部からの転落・投棄が考えられる。



第27図　Ⅱ・Ⅲ区自然河道ＳＲ０１・包含層出土土製品（Ｓ＝1/2）



第28図　Ⅱ・Ⅲ区包含層出土土器1（S＝1/3）



第29図　Ⅱ・Ⅲ区包含層出土土器・陶磁器２（S＝1/3）

127～131は須恵器杯身で127は口径10.7cmの小型品で，立ち上がりも短く内傾するものだが，128～131は口径12.4～13.7cmをはかる大型品で，特に129は立ち上がりが長く延び，先端に平坦面を持つ古相のものである。

132～136は須恵器杯蓋で133・136のように口縁端部内面に段を持ち，比較的シャープな稜を残すものから，134のように口縁端部内面に段を残しながら，稜がシャープさを失い2条の凹線の間にできる隆帯によってかろうじて表現されるまで退化したものや，さらに口縁端部内面の段が沈線に退化した148，稜が退化し天井部が丸くなった132まで存在し，杯身とともにTK10～TK209段階の須恵器が確認できる。

137・138・140～142は須恵器高杯である。残存率が悪いが137・138は透かし孔をもたないもので，142は3方向に縦長三角形の透かし孔を持つものである。140は長脚二段透かし孔高杯で長方形の透かし孔を上下各段に3つずつ配していると考えられる。141は小型高杯の脚部で底径8.7cm・現状の高さ3.4cmの透かし孔の無いものである。

139・141は土師器高杯で139は筒部しか残存していないものの，内面は接合痕が顕著に残り，杯部に近いところではヘラ状工具で余った粘土を削り出した痕跡が確認できるが，外面は摩滅が激しく調整は不明である。141は小型高杯の脚部で外面傾斜変更点付近には，反時計回りの絞り痕が見られ，裾部はヨコナデである。内面には形成時の放射状の絞り痕が顕著に残存している。

144は須恵器壺の口縁部で口径11.4cmをはかり口縁端部外面には緩やかな凹面を持ち，頸部は内外面ともヨコナデ調整で無文である。143は須恵器高台付椀で底径8.5cmで外に踏張った高台を貼り付けている。

145・146は土師器甕で口径はそれぞれ16.8cm・18.3cmをはかり，いずれも口縁部の器壁は1cmあまりで比較的厚手のものである。

148～150は土師器把手で甑あるいは甕の部分と考えられる。148は口縁部の下3cmのところに幅7.5cm・長さ4cm・厚さ1.5cmの偏平な把手がつくものである。149・150は通常の牛角状把手である。

151は備前焼の擂り鉢であるが底部近くの一部しか残存していなかった。約1cm間隔に横線を施した後，櫛状工具による七条の擂り目がやや間隔を開けてほどこされる。

152・153・158・165・171・172は伊万里焼で158以外は碗・皿である。158は小型の蓋で4分割できる幾何学文様を配するもので18世紀前半の作である。171・172は内面に網手文を施し，見込みに蛇ノ目釉ハギを持つ皿で，171は口径11.7cm・底径4.0cm・器高3.6cmをはかり，172は底部のみ残存するが底径4.2cmをはかるものであり，ともに18世紀前半の製品と考えられる。

154は中国青花の碗で縁取りのある草木文様が外面に施されており，16世紀後半の製品と考えられる。160は青白磁で，口径11.1cmをはかる無文の碗である。

156・157は土師皿でそれぞれ口径8.8cm・8.7cm，器高は共に1.8cm・底径は5.3cm・4.2cmで底部は回転糸切り痕を残している。

162・164は玉縁を持つ白磁碗で，大宰府分類Ⅳ類(注3)にあたり12世紀前半の製品と考えられる。166・167は白磁碗の高台部で，166は高台底部を除く全面に灰白色の釉薬が施されている。

155・159・163・168・170・173・174は青磁で，163・170は大宰府分類Ⅰ－1類の碗になると考えられるもので，緩やかに外反する口縁を持ち，外面は暗緑色の釉薬が施されている。

173は内面底に木ノ葉状のスタンプ文を施す大宰府分類龍泉窯系Ⅰ－5c類の碗である。155は外面に大型で鎬のない蓮弁をめぐらすもので，外面に鎬を持つ蓮弁がめぐる159とともに大宰府分類龍泉窯系Ⅰ－5a・b類に相当し，13世紀前半のものと思われる。168は底部しか残存していないが，底径6.2cmで底部の器壁の厚さが1.5cmをはかる大型品で，底面は内外とも無釉である。

169は唐津焼であり，口径12.5cm・底径4.6cm・器高3.3cmをはかり，高台部外面にはヘラケズリがなされ，内面と外面上半は淡褐灰色の釉薬が施されている。

第3節　小　　結

石田遺跡の調査の結果，古墳時代後期の遺構と縄文時代から江戸時代に至る多様な遺物が検出され，吉佐の小平野をめぐる歴史の一端が明らかになったが，以下いくつかの問題点について述べてみる。

古墳時代集落

Ⅰ－1区で検出した竪穴住居SI01は床面から良好な土器資料が出土していないが，埋土中と住居の周辺の包含層・SK01出土土器はTK43新相～TK209に併行するものであり，おおよそ西暦600年前後のものと考えられる。なお，SI01の存在する丘陵はカンボウ遺跡の所在する丘陵と連接しており，同遺跡1区の3棟の竪穴住居などと相前後して建築され，集落を形成していたものと考えられる。遺跡の眼前には中海が広がり，生業の一部に漁撈活動があったことは土錘の出土などからも伺うことができる。

煮沸形態3類

石田遺跡では6世紀末～7世紀初頭の煮沸形態として，住居内の作り付け竈・置竈（移動式竈）・土製支脚という3つの形態が確認できた。その内，土製支脚は破片資料も含めると10数点出土しており，ほとんどの個体は直接火を受ける正面が，明橙褐色に変色しており，日常的な炊飯に使用されたものと思われる。

住居内の作り付け竈は島根県内で4箇所（瑞穂町・今佐屋山遺跡，同・長尾原遺跡，大和村・郷

上遺跡，頓原町・森遺跡[註4]の検出例があるが，いずれも山間部のもので，鳥取県を含んだ山陰地域平野部では当遺跡SI01新段階で検出したものが初例である。同じSI01でも古段階期の住居には竈の設置はなく，カンボウ遺跡の同時期の住居では中央部に炉跡と見られる焼土が存在するなどこの竈は極めて異質な存在である。この竈の底部は明橙褐色に焼き締まっており，日常的に使用されていたものと考えられるが，在地的な煮沸形態が主流を占める中で外来色の強い作り付け竈を設置し使用したこの住居の主は何らかの形で，畿内・吉備などの地域と関係を持っていたものと考えられる。

置竈は山陰地域でも類例が知られ，年々その数も増加しているが，土製支脚による煮沸形態が主流の当地域では傍流の煮沸具といえる。当遺跡出土の竈（26）も２次焼成の痕跡・変色はそれほど顕著でなく，日常の炊飯で繰り返し使用されたものではない。

また，山陰地域の置竈の特徴として，かって稲田孝司氏が提唱[註5]したように把手を持たないことが挙げられる。ミニチュアを含めた置竈は全国的な分布をみると，比較的偏在しており，東日本では普遍的なものではなく，九州・四国でもその割合は少なく，畿内・近江・北部瀬戸内に分布の中心があるといえるが，それらの地域の置竈は把手を持つものが持たないものを凌駕している。把手は当然持ち運びの利便のために竈本体に付加されるものであるが，山陰地方の置竈がそれを省略し移動という行為を否定することの意味として，既に頻繁に移動すること無く，数回の使用で廃棄するという前提があるためではなかろうか。当地方では日常の煮炊きには土製支脚を用いて，祭祀など別火を用いる炊爨行為にのみ置竈を用いて，神前奉納・神人共食のための食事を調理したと考えられる。全国的な視野では反論・慎重論[註6]も多いが，少なくとも山陰地域では，土製支脚の根強い伝統と置竈が把手・把持孔などの実用的要素を脱落させて受容されていることから，日用の道具としての竈ではなく，祭りの道具[註7・8・9・10]として竈を受容したのであろう。

中近世土器について

遺構には伴わないが，13世紀の青磁・白磁や16世紀後半の青花・天目・備前，18世紀の伊万里・唐津などが出土している。関連が予想される遺跡として，カンボウ遺跡の北側に所在する六ノ坪遺跡内に「総泉寺」と称される寺院が存在したことが知られている。総泉寺は隣国，伯耆米子城主が西の防衛に当てるため，慶長６年から12年までの間に，出雲から伯耆陰田に移転している。16世紀後半に中国青花や天目茶椀など通常の農村では所有したとは思えない陶磁器が出土したことから，石田遺跡の包含層中から出土した中近世土器もこの寺院に関連するものと考えられる。（岩橋）

註

（１） 杉井健「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第１号　考古学研究会　1993

（２） 島谷芳雄・丹羽野裕「風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅷ－山代二子塚古墳－」島根県教育委員会　1992

（3） 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について－形式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館　1978年
（4） 埋蔵文化財研究会「古墳時代の竈を考える」第32回埋蔵文化財研究集会　1992
（5） 稲田孝司「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻1号　考古学研究会　1978
（6） 註1に同じ
（7） 水野正好「竈形－日本古代竈神の周辺」『古代研究』24　（財）元興寺文化財研究所　1982
（8） 近野正幸「古墳出土の炊飯具形土器について」『神奈川考古』第26号　神奈川考古同人会　1990
（9） 四柳嘉章「古墳時代の沙庭と祭具」『北陸の考古学』石川県考古学研究会々誌　第26号　1983
（10） 註5に同じ

第4章　カンボウ遺跡

第1節　調査の概要と経過

カンボウ遺跡は，島根県安来市古佐町字カンボウに存し，鳥取県境の岡吉山から西にのびる低丘陵に位置する。山頂から急激に，島根県側に向かって下った斜面は，標高25m前後あたりから緩やかとなり，やがて広い谷に向かって舌状にのびる比較的低平な地形となる。カンボウ遺跡はまさにこの緩やかな斜面から舌状の丘陵に広がっており，調査前の地形観察からは集落等の最適地と考えられた。また丘陵の先端部には横穴式石室を持つ神代塚古墳，上方には同様に横穴式石室を持つ神宝1号墳が存在，谷を隔てた丘陵には家形石棺を持つ穴神横穴群なども存在し，地形的にみても周辺の遺跡の状況からしても注目される立地といえる。

現地調査は平成5年4月12日に開始し，12月26日に終了した。調査はまず遺跡の状況を把握するために，要所にトレンチを設定して確認調査を行い，その結果に基づいて調査区設定を行った。調査区はまず便宜的に，ほぼ東西方向にはいる比較的深い谷を境にその南西側をⅠ区，北東側をⅡ区と定めた。さらにⅠ区は谷を境に調査区を東西に，Ⅱ区は尾根を境に南北に区分して調査を行った。

調査の結果，Ⅰ区は近世以降の開墾による削平が著しく，特に尾根上はほとんど遺構を検出することはできなかったものの，古墳時代後期の古墳残欠が2基，古墳時代後期の住居跡3棟，古代～中世の建物跡群などが検出され，他に弥生土器や須恵器等が出土した。また神代塚古墳の周囲の調査も行ったが，後世の改変が著しく，古墳の規模や形態等を明らかにすることはできなかった。

Ⅱ区もⅠ区と同様に尾根上は削平されていたが，斜面から谷底にかけてかなりの遺構や遺物を検出することができた。南調査区では，5世紀後半の竪穴住居跡が3棟並んで検出され，また10世紀前後の土器がまとまって出土した土壙も検出された。北調査区では7世紀前後の竪穴住居跡が3棟，時期不明の建物跡や溝状遺構，土壙等が検出された。また谷底には大量の土砂が堆積し，層を分かって弥生時代後期の土器と古墳時代後

調　査　風　景

期以降の土器が大量に出土した。以下，Ⅰ区，Ⅱ区の順に検出した遺構，遺物について記していきたい。

第2節　Ⅰ区の調査

カンボウ遺跡Ⅰ区は，谷に開けた平野方向に舌状に延びる緩やかな丘陵状に立地する。調査は便宜的に谷を境に東調査区，西調査区に分け，また西調査区の北端には神代塚古墳が存在することから，その東西に古墳の規模等を確認するための調査区を設定した。

調査の結果，西調査区の西側斜面から古墳時代後期の竪穴住居跡が3棟，東調査区の南側斜面に古代～中世の建物跡，尾根上に古墳時代後期の古墳残欠2基等が検出された。以下それぞれの遺構，遺物について記していきたい。

SI01

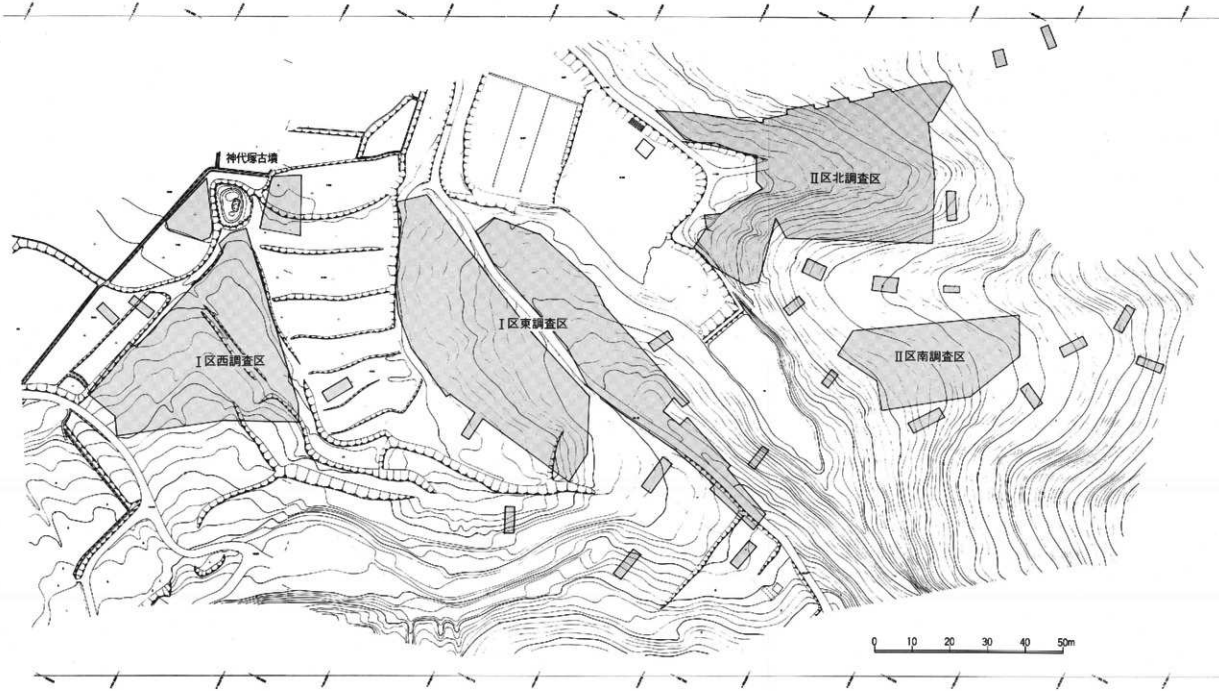
西調査区西側斜面の現水田面より若干高い位置で検出された竪穴住居跡である。西側は流出により失われているが，斜面上方側の残存状況から一辺4m（床面）の方形の住居跡と考えられる。掘り方の上端からの深さは，上方でおよそ70cmを測り，床面壁際には浅い溝がめぐる。コーナー部分はわずかながら丸みを持っている。柱穴は東西2m，南北2.3mの間隔で長方形に規則的に4穴検出されており，柱穴は径18～26cm，深さ40～48cmを測る。床面中央やや南寄りには径45cm内外の焼土が検出された。

遺物はほぼ床面から須恵器，土師器が出土した。うち図化できたのは3点である（第35図1～3）。1は杯身で，かえりはやや短くなり先端に向かって薄くなる断面三角形状を呈している。底部にはヘラケズリがみられる。2はその口縁部であろうか。3は高坏で，脚部の対向する位置に三角形スカシと線状のキザミが施されている。杯身の特徴から六世紀末頃の遺構と考えられる。

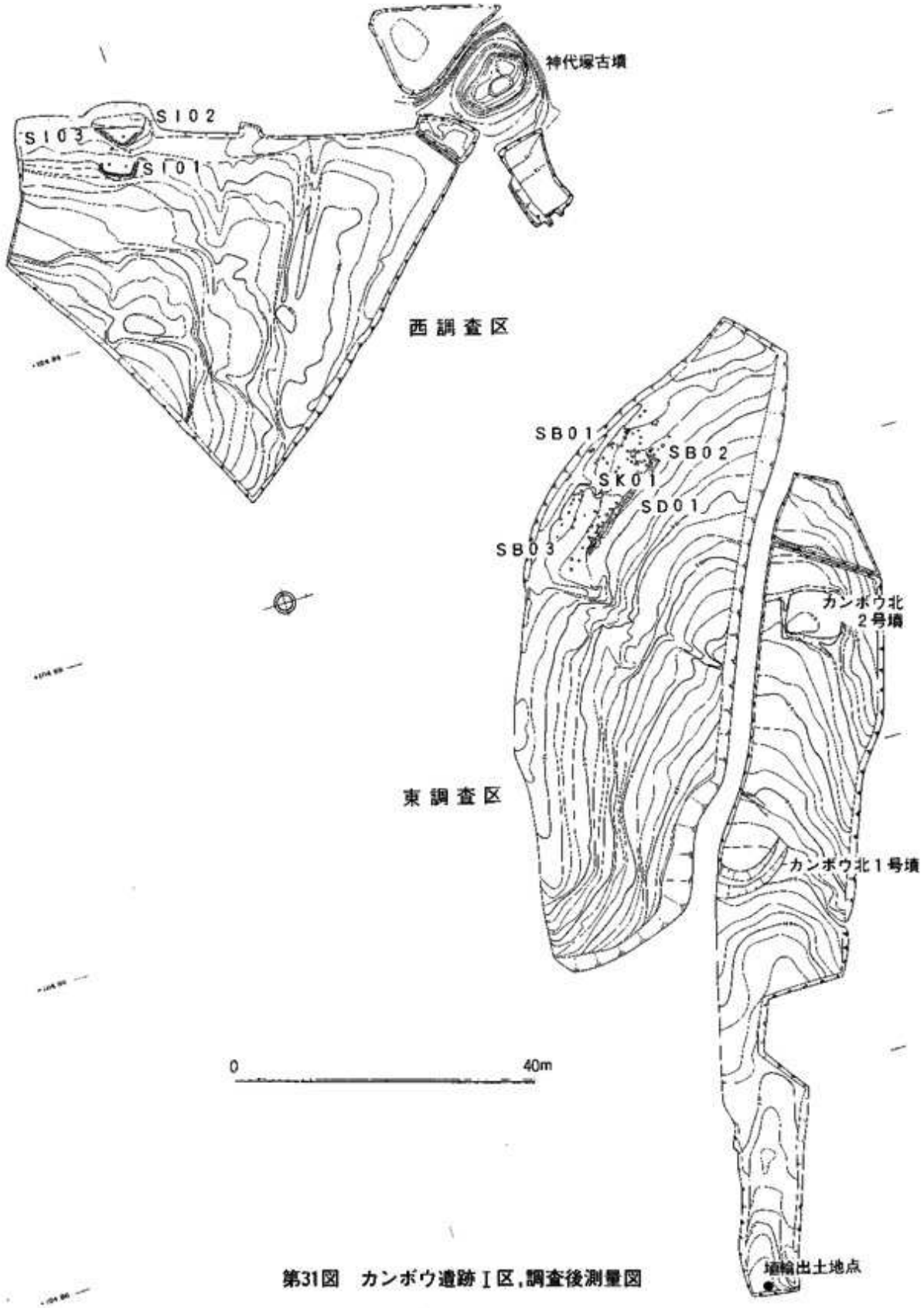
SI02

SI01の西南下方に隣接して検出された竪穴住居跡である。両者は重なり合っているが，土層等で直接的に前後関係を確認することはできなかった。角に若干の丸みを持つ方形を呈し，SI01とはおよそ30°ほど角度を違えている。東側の過半が後世の耕作により削り取られているため，規模は不明であるが，床面で4m以上の長さは確認できる。壁際には溝がめぐり，床面には貼り床らしき粘土層が認められる。柱穴は1穴確認されており，貼り床上面で直径20cm，深さ52cmを測る円形のピット上のものが認められたが，，地山面には同じ位置に直径32cmの掘り方が認められ，柱穴に柱を立てたのちに貼り床を行ったのかもしれない。

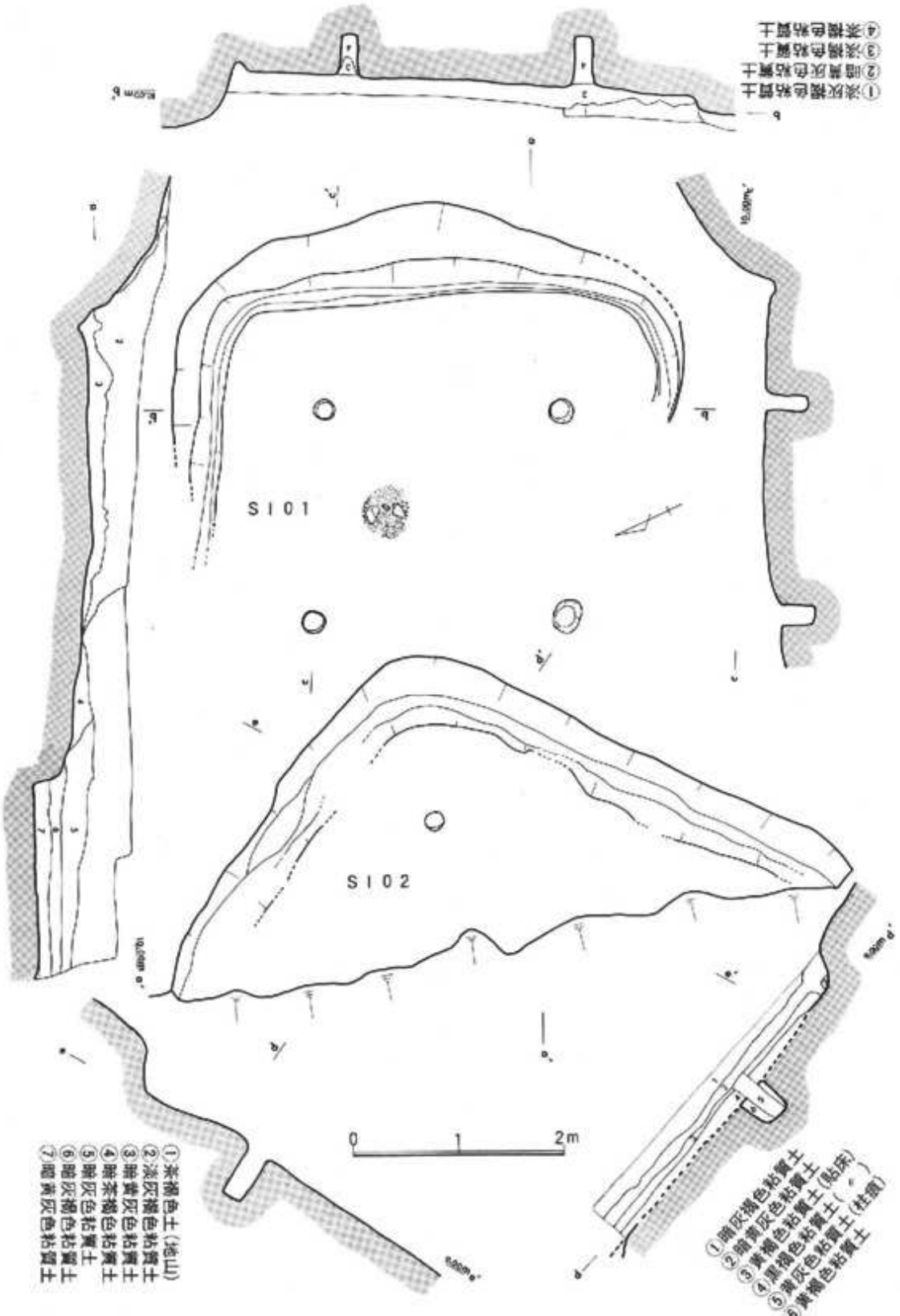
遺物は貼り床面上から須恵器，土師器，砥石が出土している（第35図4～12，14）。4は蓋であ



第30図　カンボウ遺跡調査前測量図，調査区配置図

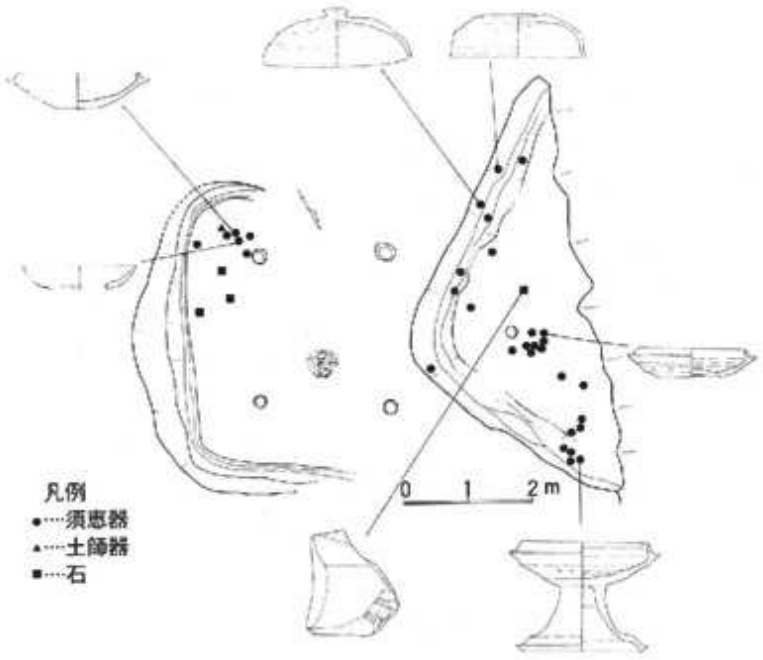


第31図　カンボウ遺跡Ⅰ区，調査後測量図

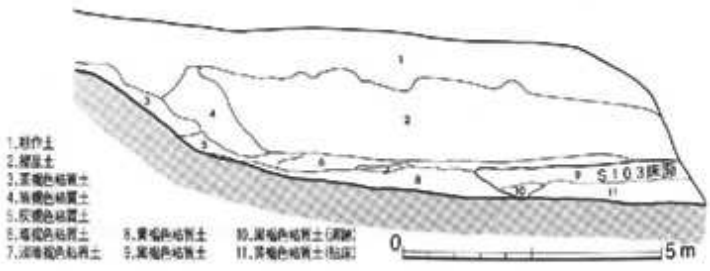


第32図　カンボウ遺跡Ⅰ区S I 01,02実測図

る。天井部と口縁部の境には痕跡的に段が残り，天井部には回転ヘラケズリを施す。口縁部はわずかに外方に開きながら下り，端部は若干外につまみ出すようにして納めている。5，6は天井部につまみの付く蓋で，有蓋高坏に組み合わさるものであろう。ともに天井部には回転ヘラケズリを施すが，天井部と口縁部との境に6は段を持つが5は既に失われている。また6の口縁部外面には非常に浅い線状の文様が施されている。7～9は杯身である。いずれもやや内傾しながら立ち上がる比較的長いかえりを持ち，底部には回転ヘラケズリを施す。10，11は高坏である。10は7～9の杯身とほぼ同形の坏に脚が付いたものである。脚は外方に開いて下り，裾部近くで一度屈曲して平坦な面を作った後再び下りて上下につまみ出した端部にいたる。スカシは認められない。11は脚部が裾付近で外方に開き，下方につまみ出した端部にいたる。スカシは認められない。12は須恵器壺である。14は砂岩製の砥石である。石のほぼ全面が砥面として利用されてツルツルしている。またわずかに残された礫面には2条の筋状の砥面が認められる。以上の須恵器の特徴から，この住居跡は6世紀後半頃のものと考えられ，遺物でみる限りSI01よりも古い住居跡となる。



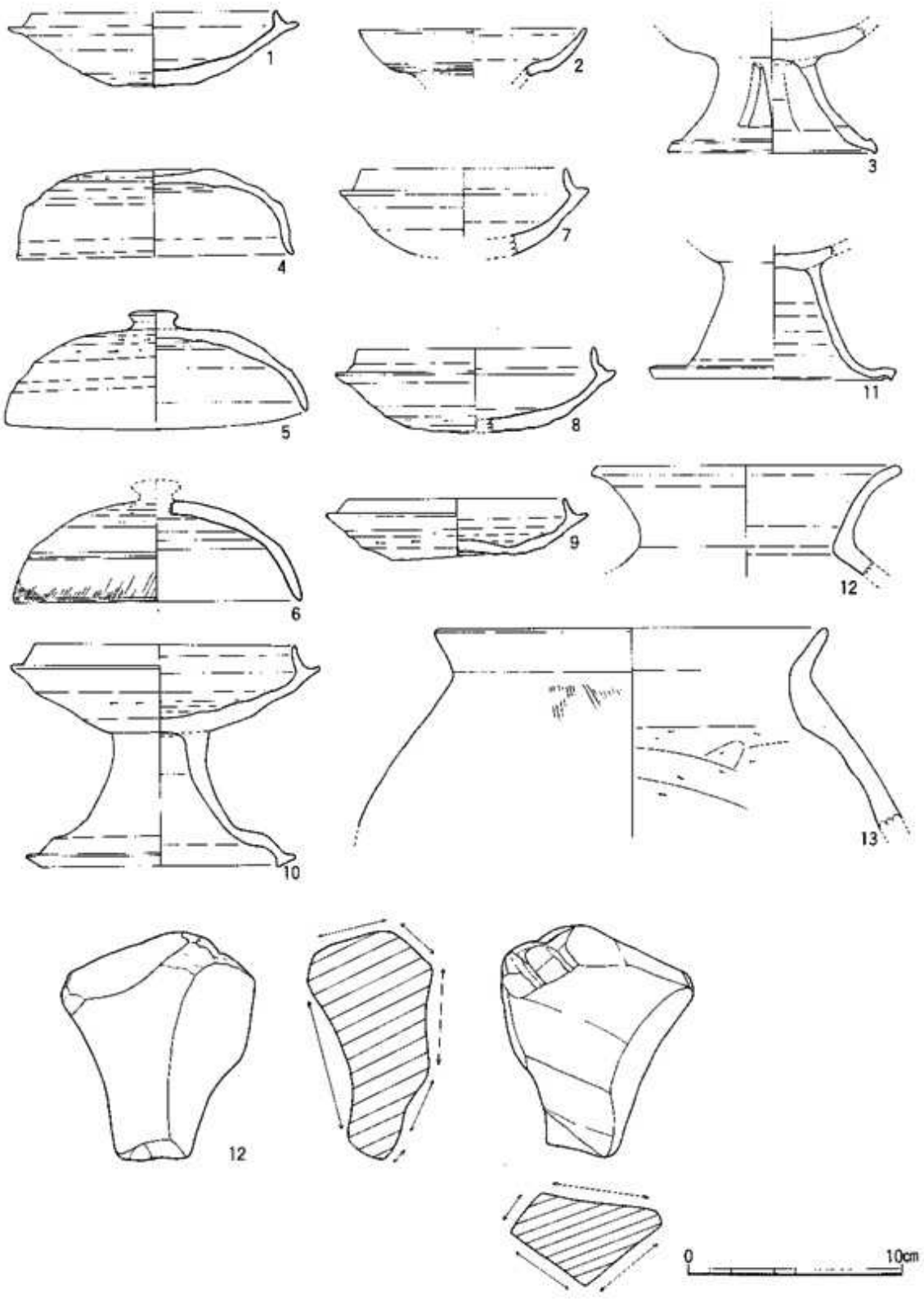
第33図　カンボウ遺跡Ⅰ区ＳＩ０１，０２遺物出土状況



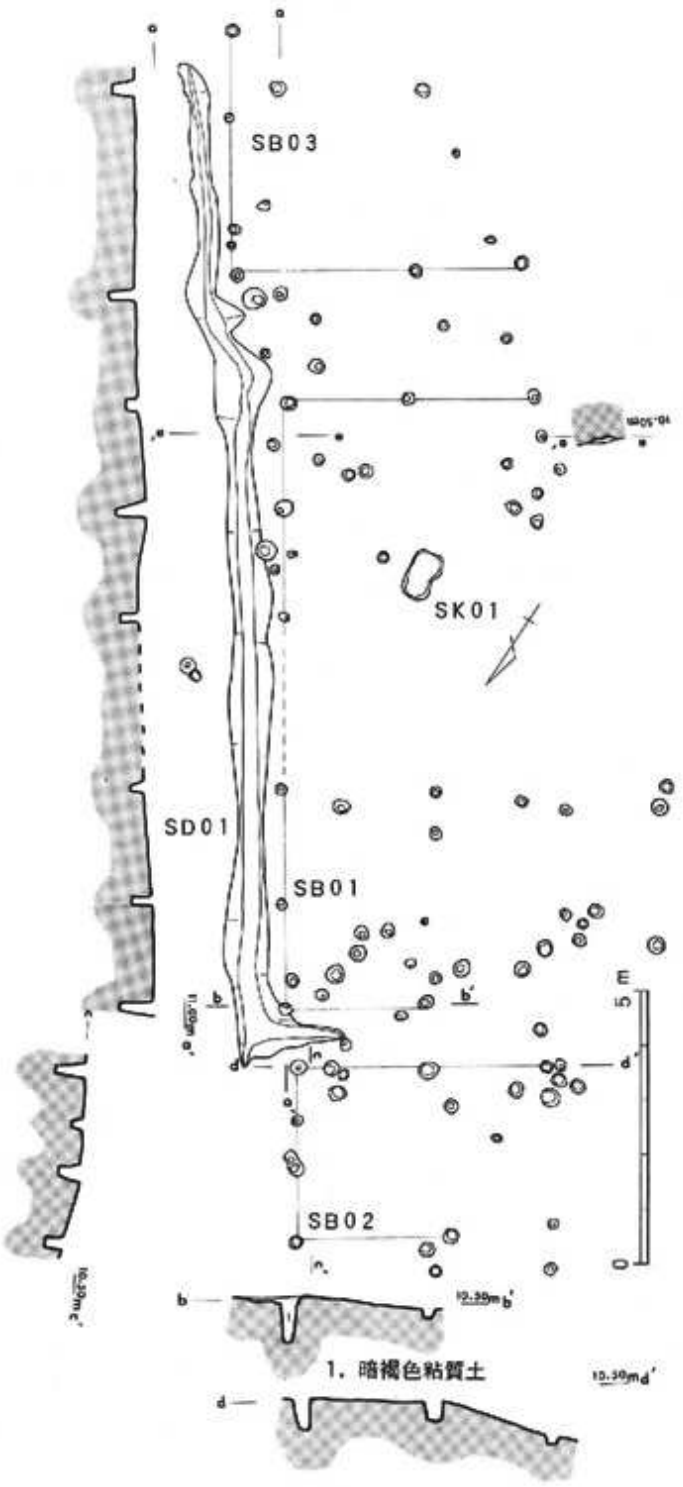
第34図　カンボウ遺跡Ⅰ区ＳＩ０３付近土層断面図

SI03

SI01，SI02の南側，西調査区の南端で検出



第35図　S I 0 1, 0 2, 0 3 出土遺物実測図
（1～3……S I 0 1，4～12, 14……S I 0 2　13……S I 0 3）



第36図　カンボウ遺跡Ⅰ区ＳＤ０１，ＳＢ０１，０２実測図

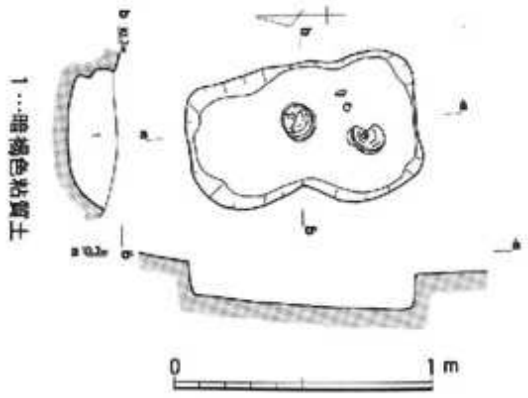
された竪穴住居跡である。耕作による攪乱が著しく，最終的に土層断面によって確認されたのみで，形態，規模等は不明である。土層断面図で９層下面が床面と考えられ，壁際には溝らしき落ち込みも見られる。６層より上はすべて後世の盛り土である。床面と考えられる面から土師器甕が出土した（第35図13）。短く外方に開いた口縁から比較的張った胴部を持ち，外面ハケメ，内面はヘラケズリが施されている。土師器甕の編年が不明確で時期は不明だが，古墳時代後期で大過ないものと考えられる。

東調査区西斜面建物群

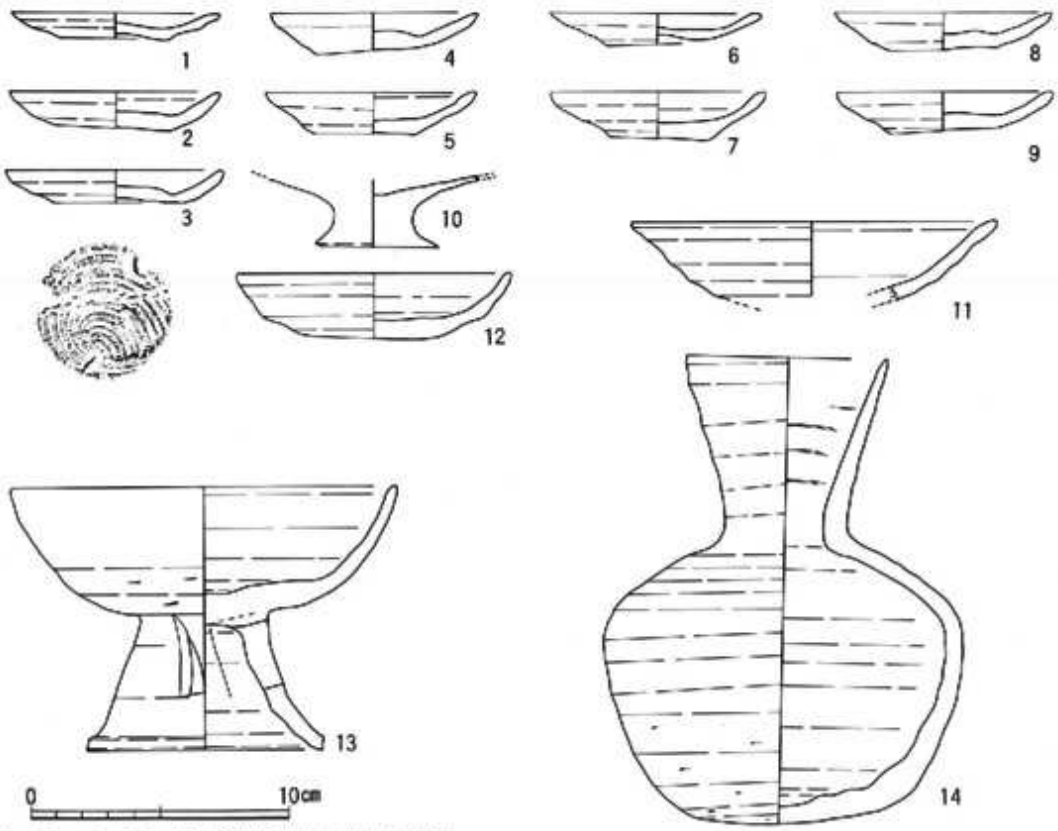
東調査区の西斜面下方，谷に広がる水田面から若干上がった部分で検出された，溝（SD01）と100穴近い柱穴群からなる遺構である。SD01は斜面にほぼ平行して検出された幅約40～70cm，深さ10cm内外の浅い溝状遺構で，長さは18m以上，北端では西に折れて下方に向かい，北端から約13m南の

地点でやや東にずれてさらに南側へ続いている。この溝は一度東にずれる地点で下方に折れ曲がる気配もうかがえ，２本の溝が重なって検出されたものの可能性もある。

柱穴は非常に多く建物を復元するのは難しいが，溝の単位に合わせて３棟を復元してみた。SB01はSD01の北端から方向が変わる部分までに対応し，桁行き５もしくは６間で11m，梁間が２間以上4.5m以上となる。かなり大規模な建物となるが，柱穴は20から30cmと小さく頑丈な建物ではなかったであろう。SB02はSB01の北に隣接し，２間×２間以上（3.1m×4.6m以上）の建物である。SB03は東にずれた溝に対応し，



第37図　ＳＫ０１遺物出土状況



1～11　SD01　13　遺構にともなわない土器
14　SK01

第38図　ＳＤ０１・ＳＫ０１等出土土器

4.5×5.2m以上の規模に復元される。

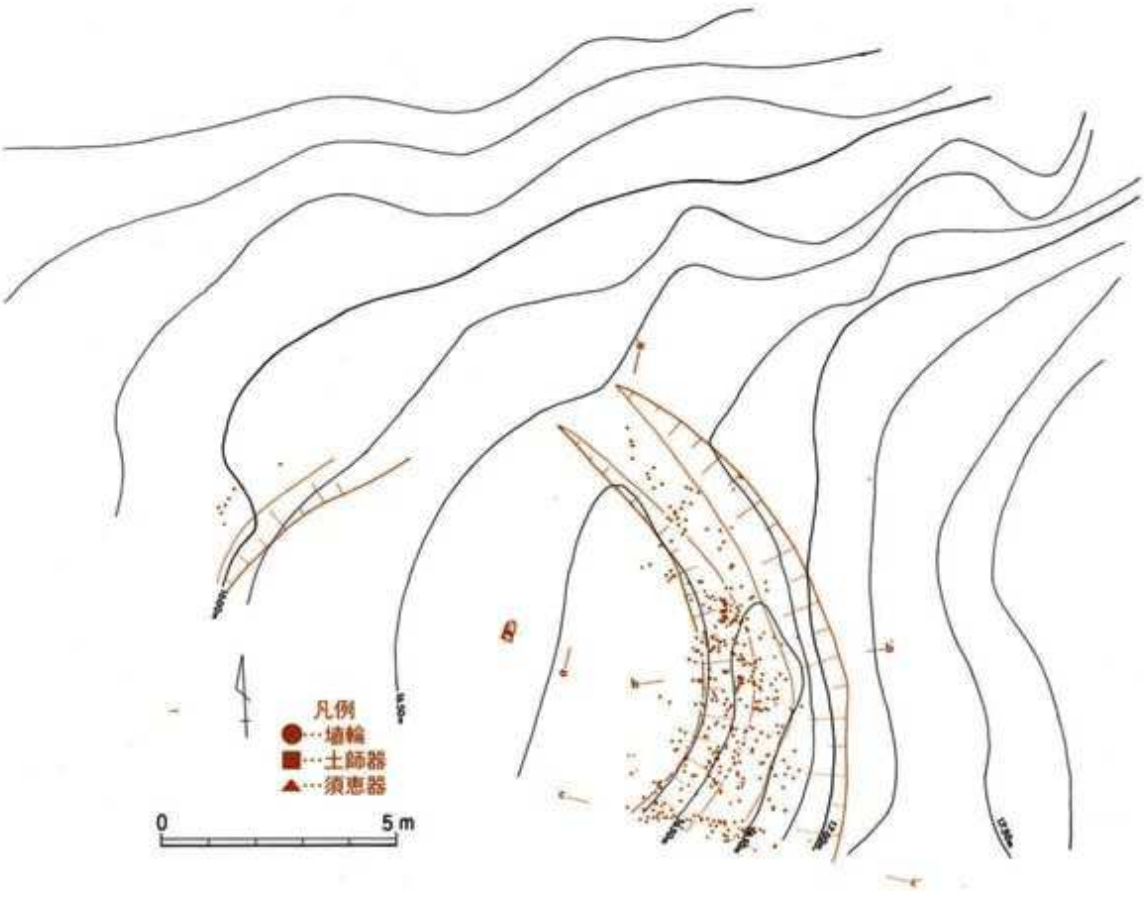
遺物はSD01近辺で土師質土器の皿が出土している（第38図1～12）。1～9は口径が8cm前後の小形品で，底部には回転糸切り痕が残る。10は底部平底で回転糸切りが残り，上げ底状になった皿である。これらの時期特定は難しいが，およそ古代末から中世初頭の時期であろうか。

SK01

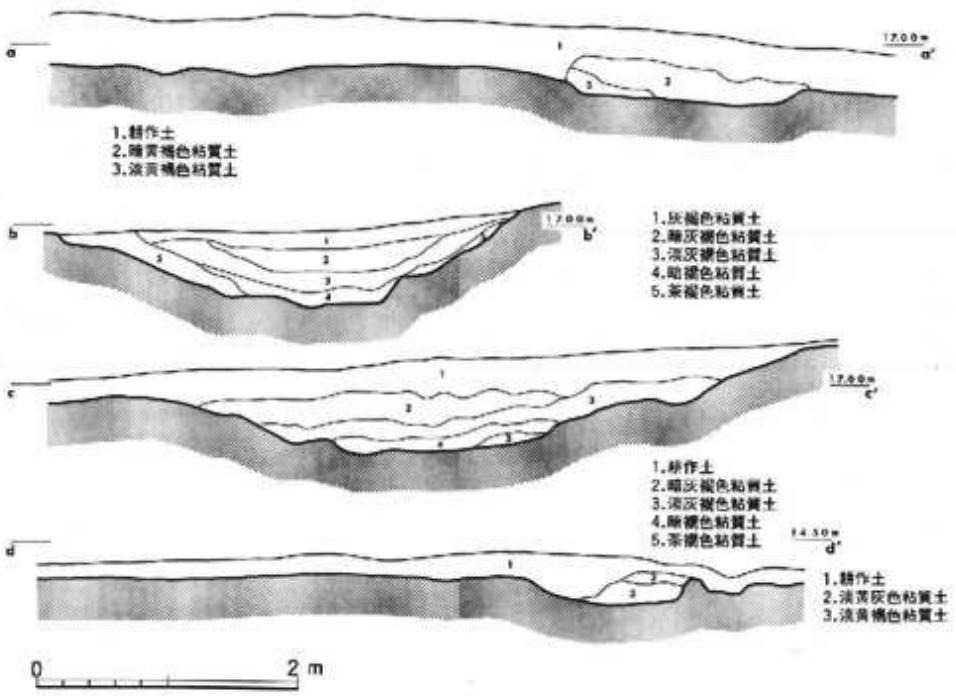
SD01のやや西側で検出された長さ90cm，幅50cm前後の不正な長方形土壙である。内部には軟質の暗褐色土が堆積し，直口壺が胴部で2つに割れた状態で出土した。この壺（第38図14）は口頸部がやや開いて立ち上がり，胴部下半にはヘラケズリがみられる。　　（丹羽野　裕）

カンボウ北古墳群の概要

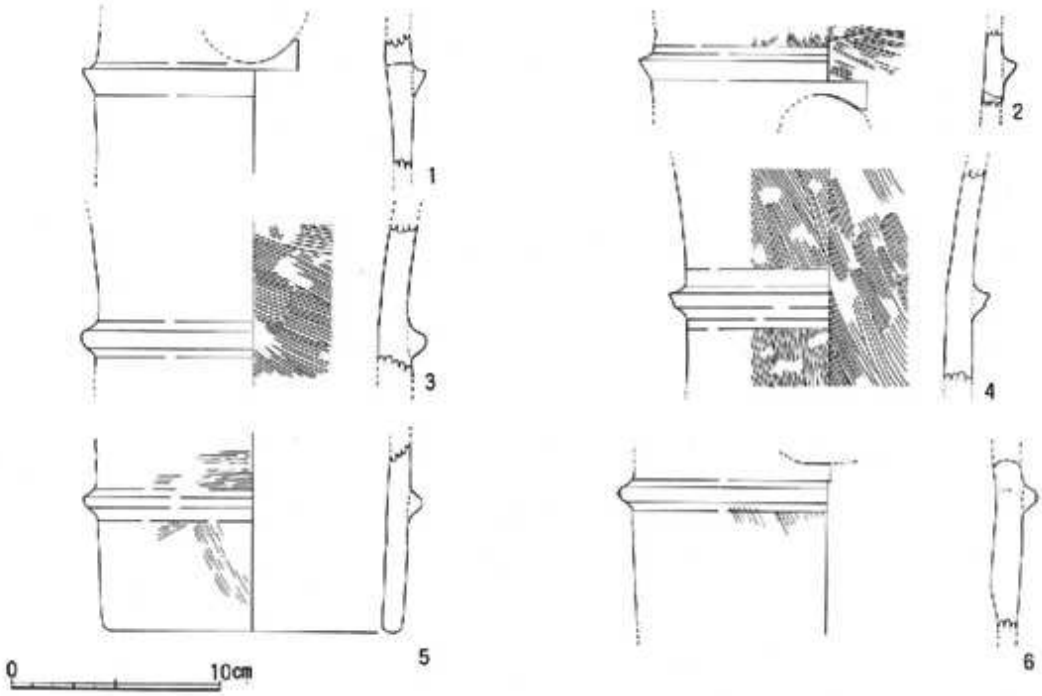
カンボウ北古墳群は，I区東調査区中央に2基ほど検出された。古墳は国吉山から北西に伸びるなだらかな尾根上に立地し，上方を1号墳，下方を2号墳とした。1号墳，2号墳ともに墳丘は後



第39図　カンボウ北1号墳調査後測量図遺物出土状況図



第40図　カンボウ北１，２号墳土層断面図



第41図　カンボウ北１号墳出土埴輪実測図

世の開墾により削平され原形をとどめていないが，現存する周溝の輪郭や埴輪の出土分布状況から，1号墳は円墳，2号墳は方墳と推定される。2号墳は1号墳と約16mの間をあけてつくられている。また，1号墳より尾根上に約30m上方からも埴輪片が数点検出されており，他の古墳の存在も推定されるが，畑の開墾等で現在のところ不明である。

カンボウ北1号墳

1号墳（第39図）は尾根上に立地し，標高は約16.5mを測る。古墳の形態は，墳丘上部が後世の開墾により削平されており，南側も山道により大きく改変しているため明確でないが，周溝が古墳の北部から東部にかけて確認でき，その輪郭が円状を呈していることから円墳と判断した。

墳丘の大きさは，東側の周溝が一部残っていたことから東側周溝を古墳中央部を中心として折り返し復元すると，直径約9～10mとなる。

調査の結果，主体部は検出できず，わずかに古墳中央付近の地山上に石棺の根石と思われる25cmほどの石材が存在するのみである。土層（第40図）も表土下は茶褐色土や黄褐色土の地山であり，盛土なども検出できなかった。

周溝は東側で検出された。幅約2～4m，深さ約60cm，溝底幅約80cmで，断面は緩やかな逆台形を呈している。周溝からはほぼ土層全面から多数の埴輪片などが検出された。

出土遺物（第41図）は東側周溝内より埴輪片，土師器片，須恵器片が検出されたが，いずれも風化が激しく，小片となっており，実測可能なものは6点であった。1～6すべて円筒埴輪の破片であるが，4以外は風化が著しい。外面の1次調整はナナメ方向のハケメ，2次調整は胴部にヨコ方向のハケメであるが，2次調整が施されているのは5のみで，2・4・6は1次調整のみ，1・3は不明である。タガは上端を突出させた台形の断面を呈するが，1・2は三角形状である。5端部は生きているようであるが，接合面や口縁部である可能性も否定できない。

カンボウ北2号墳

2号墳（第42図）も1号墳と同様，尾根上に位置し，標高は14mである。墳丘の大きさは，墳裾が削られていることから明確にできないが，東側および南側に周溝がかすかに残っていたことから一辺約8～9mと推測される。墳形は，溝のラインが直線状をなすことから方墳と推定した。

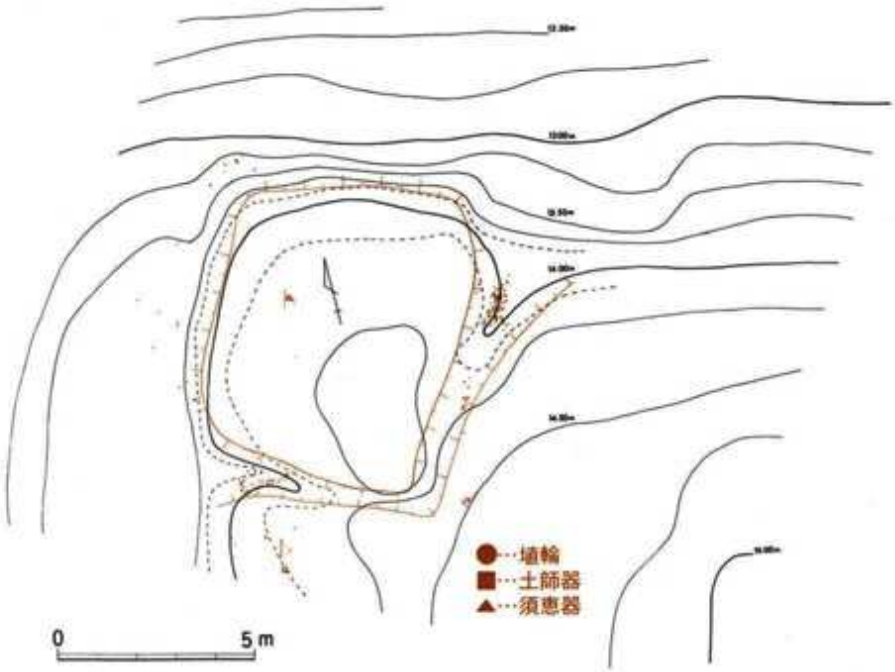
土層（第40図）は表土下約20cmで地盤であり，盛土も確認できず，わずかに南側の周溝に土層が堆積しているのみである。主体部も検出できなかった。

周溝は東側および南側に残り，東側はかすかなくぼみが確認できるのみで，南側はわずかな土層の堆積が確認できる。

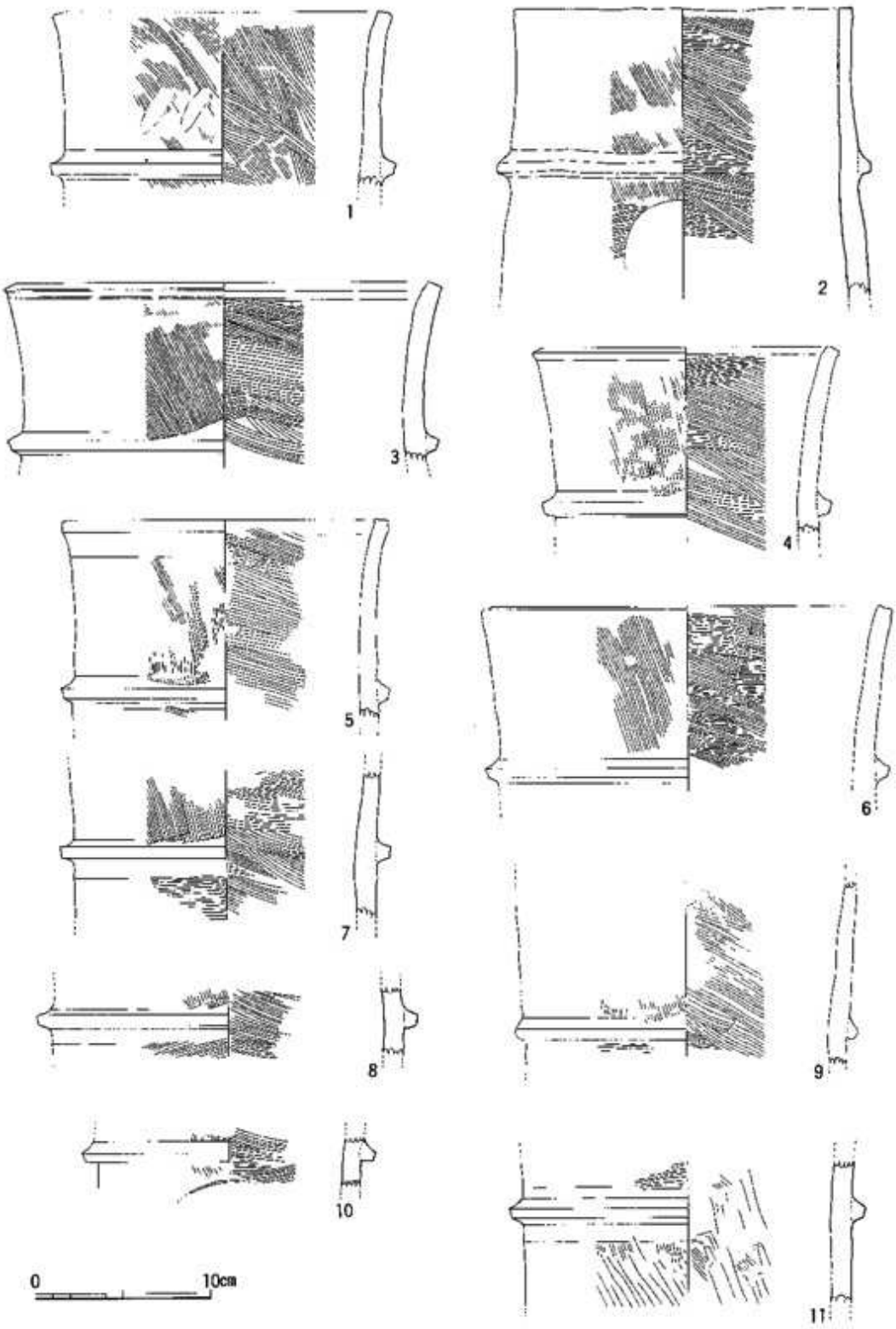
出土遺物（第43，44図）は，周溝内や古墳の周辺から多数の埴輪片や土師器片，須恵器片が検出された。いずれも完形品はなく，破片のみである。1～14は円筒埴輪であり，16は須恵器の坏蓋，

17は須恵器の高台付坏である。1～6は口縁部で，口径は14～18cmを測る。12・14は底部である。調整は，1次調整がナナメ方向のハケメで，2次調整は口縁部がナナメ方向のハケメ，胴部がヨコ方向のハケメである。底部については，11・14は内外面ともハケメの後，底部調整として刻みをつけた木製工具によるカキナデがナナメあるいはタテ方向に施されている。13についても同様のカキナデが内面に施されている。また13については，タガを指頭圧により押さえつけた痕跡がみうけられる。12は，外面はハケメ後，ヘラ状工具によるミガキかケズリを施し，内面はタテ方向に1次調整をナデ消すようなハケメを施し，底部を調整している。1は2次調整が確認できなかったが，外面に指頭圧痕が施されている。8・10については焼成が須恵質である。また，15については，前述した1号墳より尾根上に約30m上方から出土したものである。これらの埴輪片はいずれも古墳時代後期のものと思われる。16は蓋で，宝珠状つまみがつき，調整は天井部が回転糸切り後ヘラケズリが用いられる。17は高台付坏で，底部は回転糸切りが用いられている。これらは山陰須恵器編年Ⅳ期以降のものである。これらの須恵器については，いずれも東側周溝内より他の埴輪とともに出土しているが，時期的に埴輪が伴う古墳に共伴するものとは思われない。

以上のように，2号墳は明らかに新しい時期の遺物が溝内から出土するなど，古墳と判断するの



第42図　カンボウ北2号墳調査後測量図遺物出土状況図



第43図　カンボウ北２号墳出土埴輪実測図

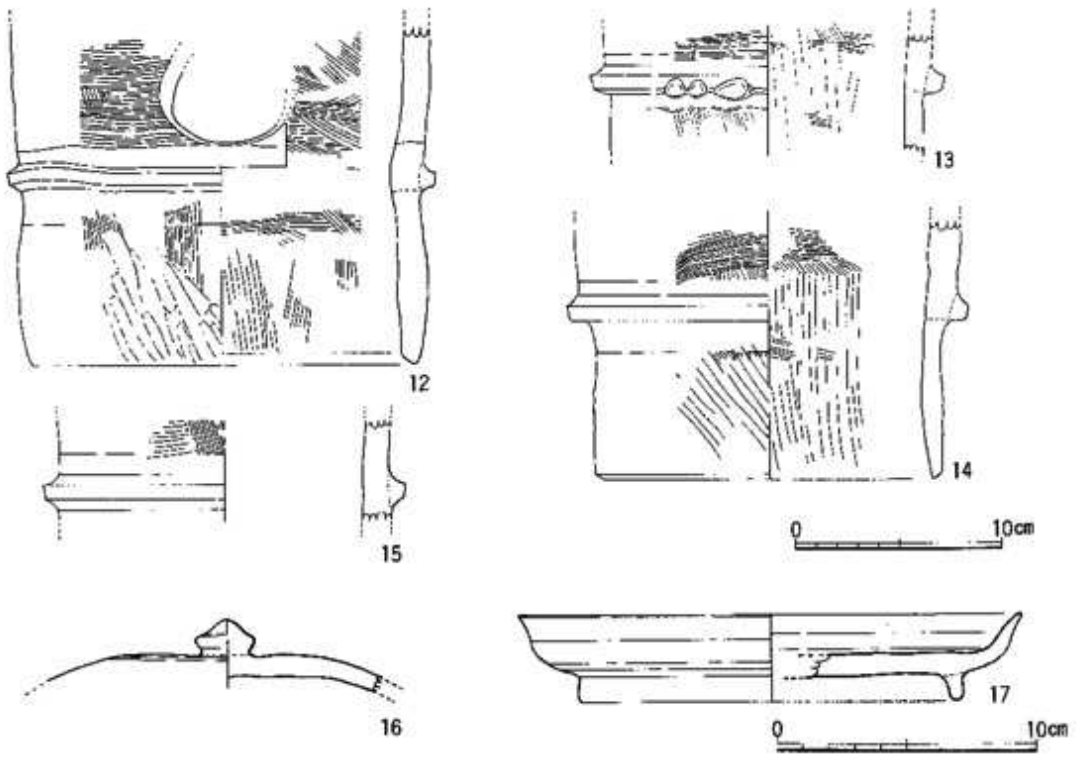
に否定的な面もあるが，墳丘状の高まりは人工的なものと考えられ，埴輪の分布状況からみても，古墳の可能性が高いと判断した。

神代塚古墳

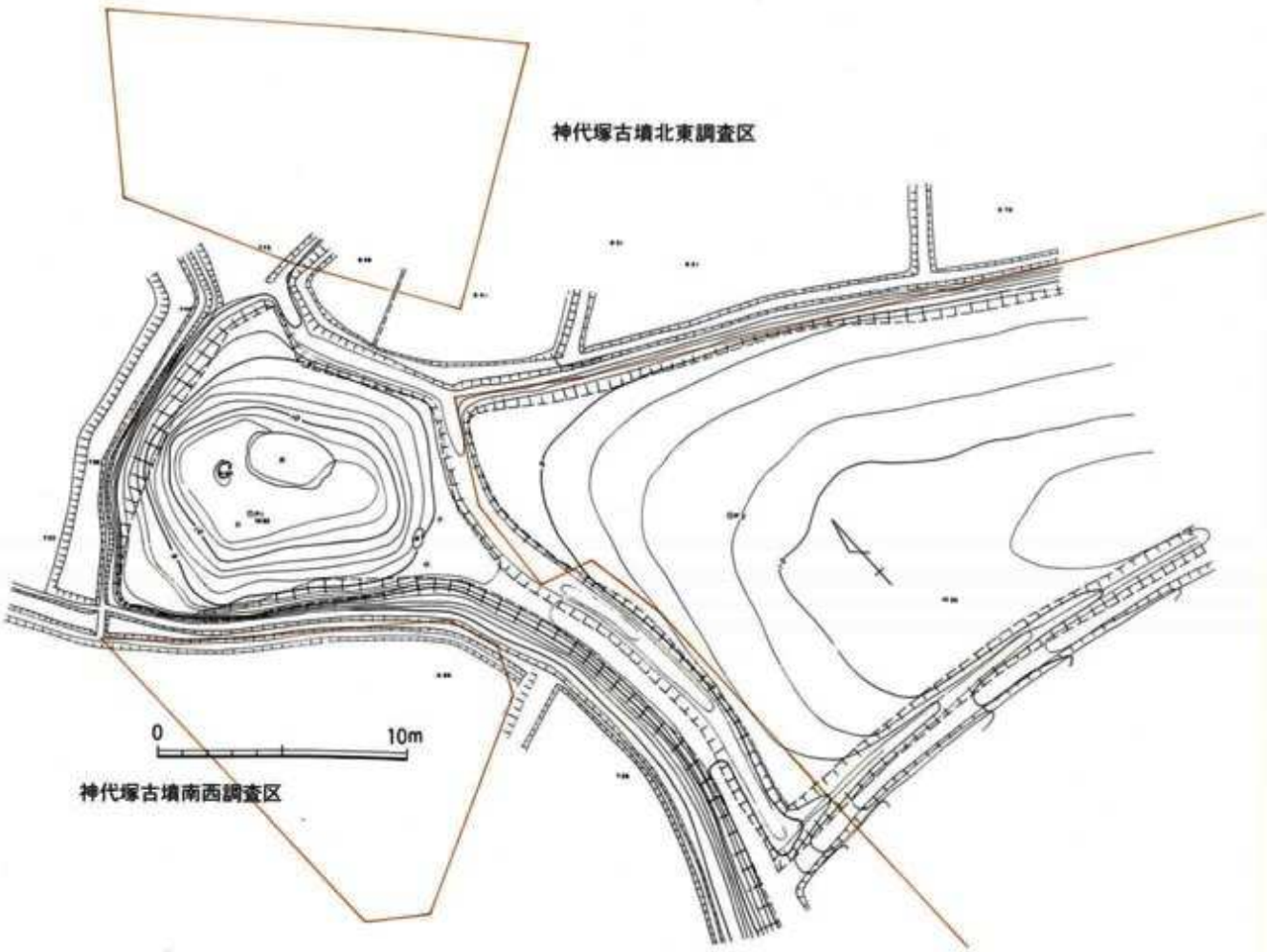
神代塚古墳（第45図）は，１区西調査区の尾根先端部に存在する。墳丘は，後世の開墾等で大きく改変されていると考えられる。現在の墳丘は南北13m，東西11m，水田面からの高さ3.5mで，楕円形状を呈している。古墳の主体部は横穴式石室である。南側が羨道部と考えられるが，現在は石室がほとんど埋まった状況であるため全容は明らかでない（安来市教育委員会1991）。石室からは須恵器片が４点（第46図）表採されているが，周辺に同様の時期の遺構があり，この古墳に伴うものと断定はできない。１～３は須恵器の坏身である。たちあがりが短く内傾し，底部はヘラケズリで調整している。４は壺の胴部で，外面はカキメ，内面はタタキで調整されている。これらの須恵器はいずれも山陰須恵器編年のⅢ期のものと思われる。

神代塚古墳周辺の調査

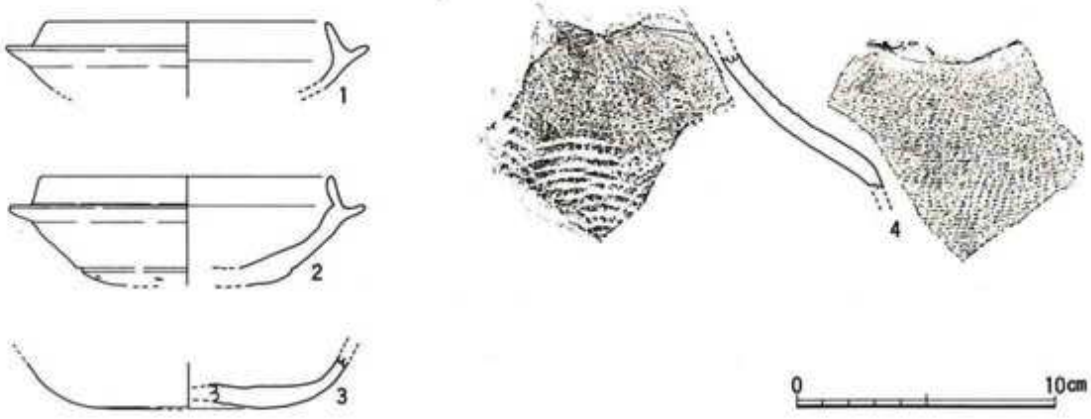
神代塚古墳については，保存のため調査区外であり調査を行っていない。古墳周辺の北東側と南



第44図　カンボウ北２号墳出土埴輪他実測図



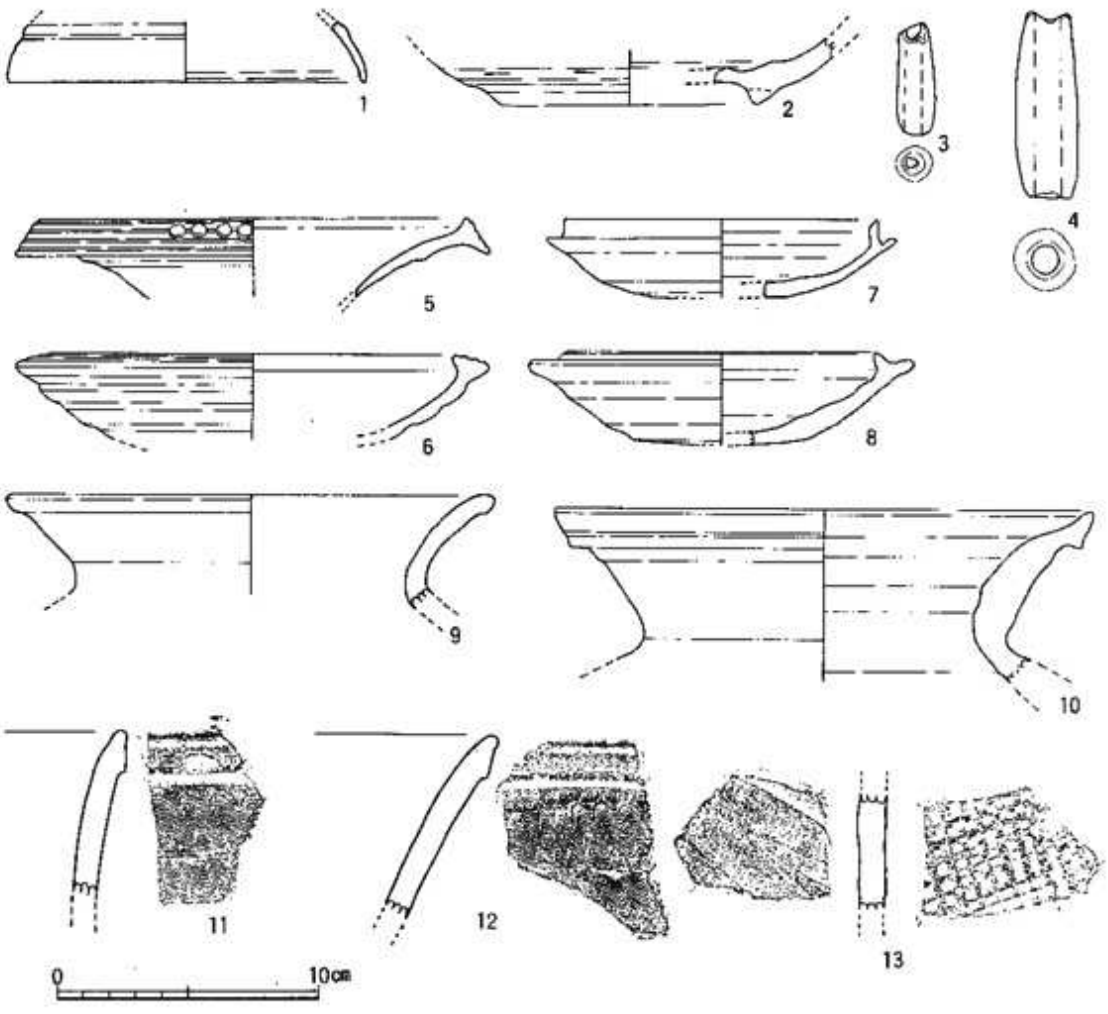
第45図　神代塚古墳と周辺地形測量図
（安来市教育委員会提供の測量図を一部改変）



第46図　神代塚石室内表採土器（大森隆雄氏提供）

西側については調査を行ったが，後世の水田開墾等で改変が激しく古墳の規模などを明らかにすることはできなかった。

遺物（第47図）は包含層中より検出された弥生土器や須恵器，土錘などである。いずれも破片で，図化可能な土器を掲載した。1～4は北東側，5～13は南西側から出土している。1は須恵器の坏蓋，2は高台付坏である。3・4は土錘である。5・6は弥生土器である。5は壺の口縁部で，端部に凹線と浮文が施されている。6は高坏で，口縁端部に凹線が施される。7～12は須恵器である。7・8は坏身，9・10は甕，11・12は壺の頸部のみで，波状文が施される。13は甕で，外面は格子タタキ，内面はハケメが施されている。いずれの遺物も神代塚古墳との関係は不明である。

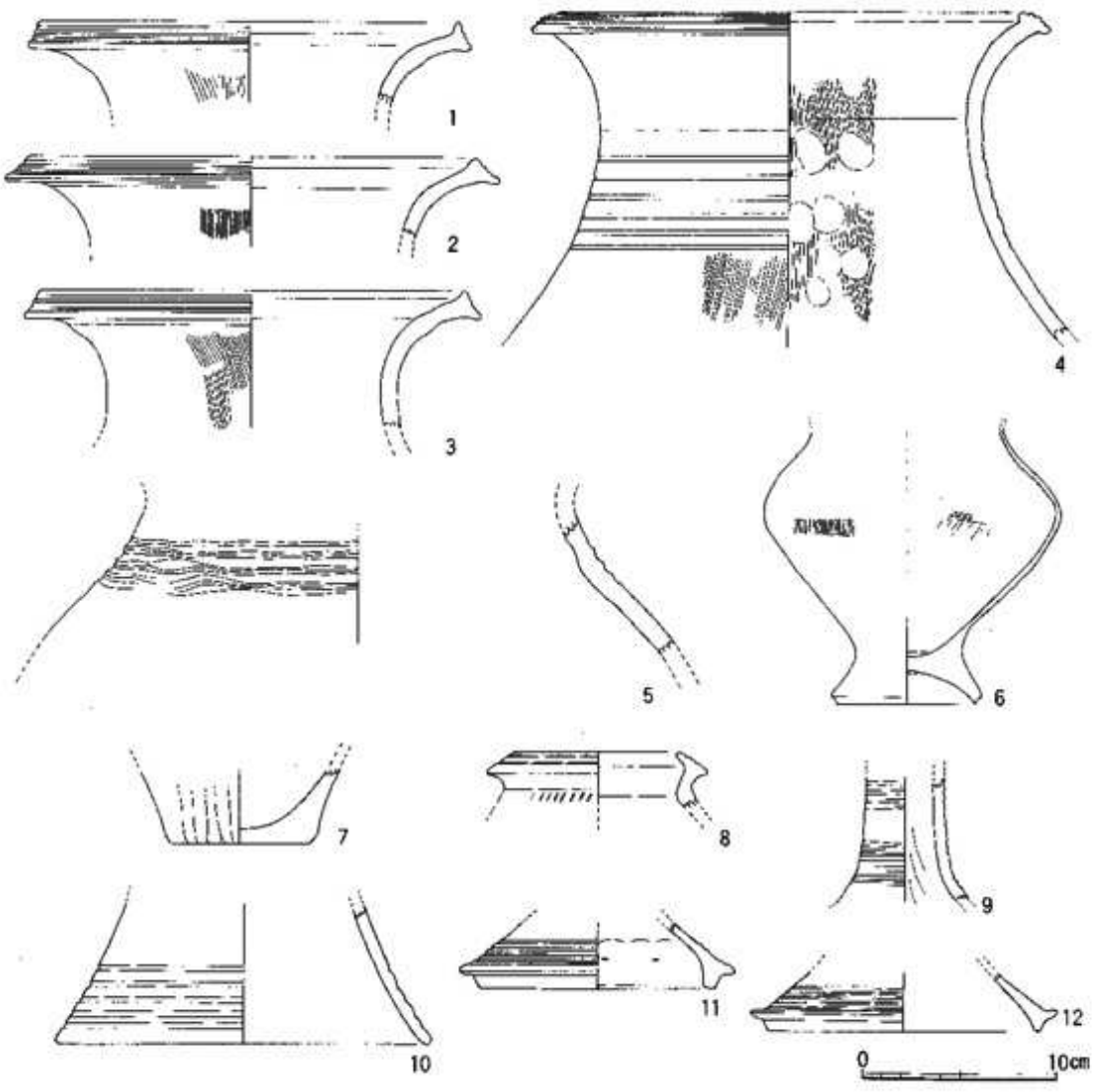


第47図　神代塚古墳周辺調査区出土遺物実測図

Ⅰ区東調査区包含層中出土遺物（第48図）

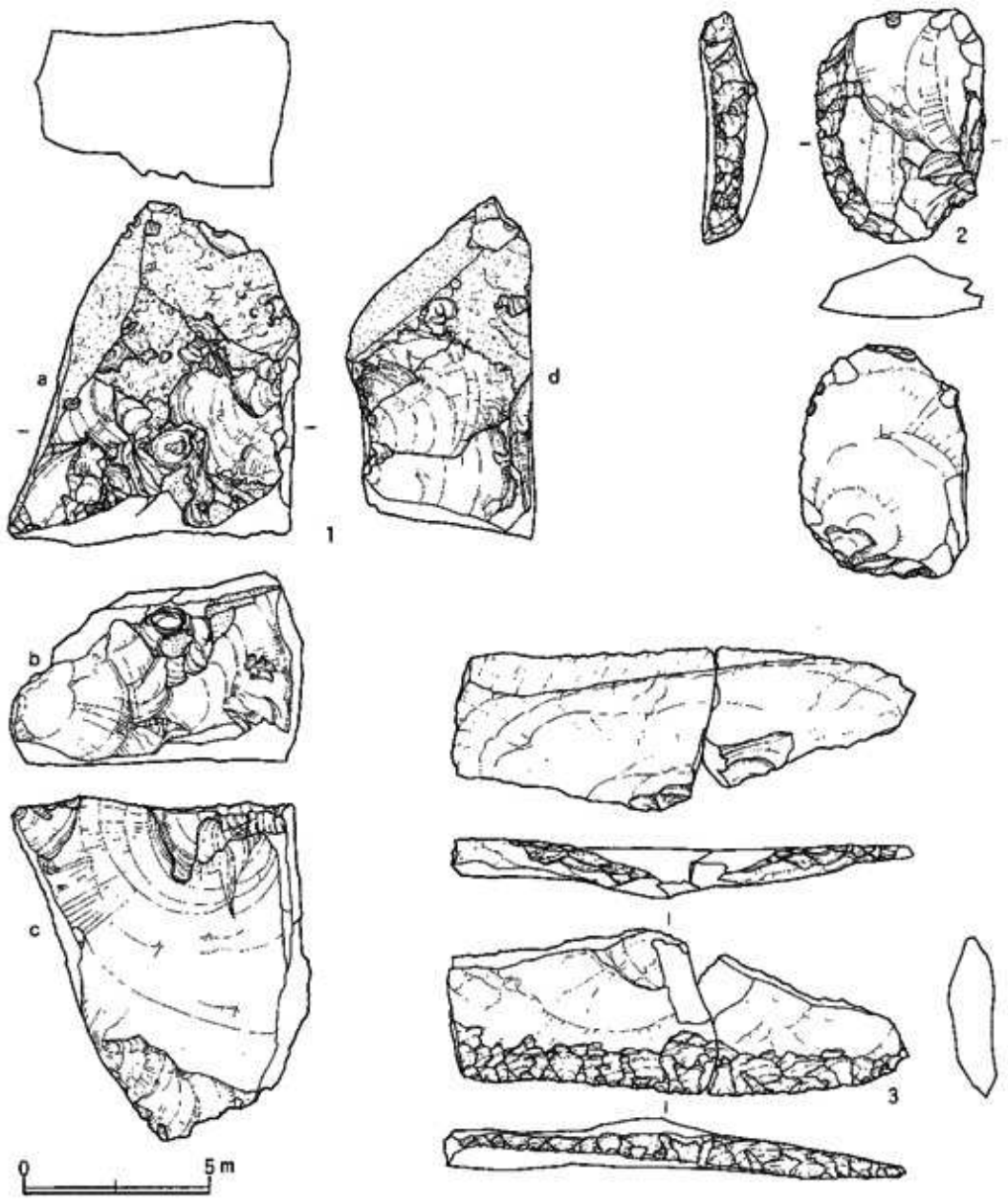
東調査区の尾根上東部付近に弥生土器の包含層が残っており，いくらかの土器片が検出された。また，遺構は確認できなかった。以下実測可能な土器を掲載した。

1～12はいずれも弥生土器である。1～4は壺で，口縁は外反し端部外面に擬凹線が施され，口径は21～24cmを測る。1～3は頸部以下ハケメ，4は頸部に沈線文が施される。5は肩部のみで，擬凹線が施される。6は台付壺である。胴部は薄手で，口縁部は外反するものと思われる。風化が著しく調整は不明だが，外面胴部と内面にハケメがかすかに確認できる。7は底部で外面はヘラミ



第48図　カンボウ遺跡Ⅰ区，東調査区出土弥生土器実測図

ガキ調整で，内面は不明である。8は短頸壺の口縁部で，口縁端部に擬凹線，肩部に刺突文が施される。また，風化しているため明らかでないが，刺突文の中に丹塗りの痕跡が残されている。9～12は高坏の脚部であり，外面に擬凹線が施される。9は筒部で，内面にしぼり痕が残る。また，外面には丹塗りが施されている。10は端部が緩やかだが，11，12は端部が広がり肥厚し，底径は12～



第49図　カンボウ遺跡Ⅰ区出土石器実測図

14cmを測る。また，12には丹塗りが残る。これらの遺物の時期は弥生時代後期前半と思われる。

（深田　浩）

第49図はⅠ区から出土した石器である。いずれも表土直下からの出土で，層位的に時期を限定することはできない。1は漆黒の黒曜石製の石核である。およそ9×7.5×5cmほどの直方体状で，a，b，d面に少ないながらも剥片を剥離した痕がみられ，a面には大きな敲打痕とそれにより生じた割れ円錐状の放射状剥離痕もみられる。a面，d面には大きく自然礫面が残り，c面の大きな剥離面はネガティブな面である。石核素材は角礫を分割したものと思われ，遺跡への搬入形態を示すものかも知れない。

2は漆黒の黒曜石製の掻器である。縦長剥片を素材に，その側縁に腹面側からおよそ70°と比較的鈍角に剥離を施して丸みを帯びた刃部を形成している。長さ6.4cm，幅5.0cm，厚さ1.6cmを測る。

3は安山岩製の横長剥片を素材とした削器である。調査時の破損で2つに割れ，打面付近には新しい剥離面がみられる。長さ12.4cm，幅4.3cm，厚さ1.2cmを測り，腹面刃縁部に背面側から丁寧な二次加工を施して，およそ直線状に刃部を形成している。さて素材の横長剥片であるが，腹面は打面のほぼ中央付近に打面のあるポジティブな剥離面一面を基本とし，背面は腹面と同一方向のネガティブな剥離面と石核素材の底面により構成されている。剥片の端部（図上の左端）はこの剥片剥離前の大きな剥離面で，石核を構成する大きな面であろう。打面は二面以上の大きな剥離面と背面側からの細かな剥離面で，緩やかな角度の山形に調整されており，背腹両面の剥離面の打点は新しい剥離で不明であるが，およそ山形の頂点付近にあるものと推測される。以上のような特徴から，この削器の素材は瀬戸内技法により取られたいわゆる翼状剥片である可能性が高いものと考えられる。

（丹羽野　裕）

第3節　Ⅱ区の調査

カンポウ遺跡Ⅱ区は，県境の国吉山から急激に下がる斜面が緩斜面に変わる部分に位置する。北調査区では南向きの斜面で6世紀後半～7世紀初頭の竪穴住居跡状の遺構3棟（SI04，05，09），溝状遺構4（SD01～SD04），北向き斜面に建物跡1棟（SB04），谷底に土壙4（SK04～SK07），溝状遺構1（SD05）が検出された。また南調査区では南向き斜面に3棟並んで5世紀後半の竪穴住居跡（SI06～SI08）及び10世紀前後と時期不明の土壙（SK07～SK08）が検出された。以下，遺構の種類ごとに説明していきたい。

SI04

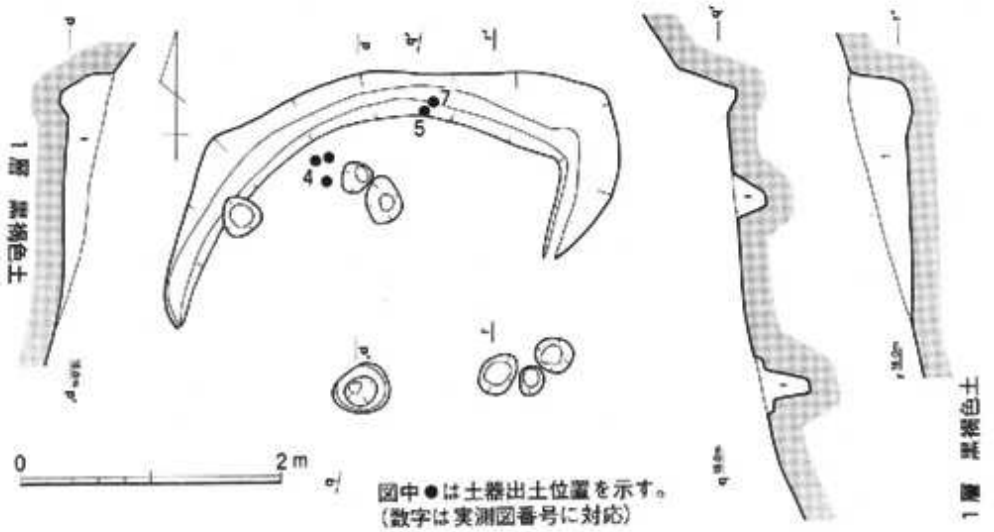
北調査区の谷底からおよそ5m上方の南向き斜面で検出された竪穴住居跡状遺構である。斜面の

上方を削って床面を作り出し，壁際には溝を掘っており，竪穴住居跡状を呈しているが，床面東側は屈曲していながら西側は円弧を描き，不定形を呈す。下方が大きく流出しているため規模は不確定だが，現状で長さはおよそ2.5mと非常に小形である。柱穴らしきピットは7穴検出されているが，配置は不規則である。

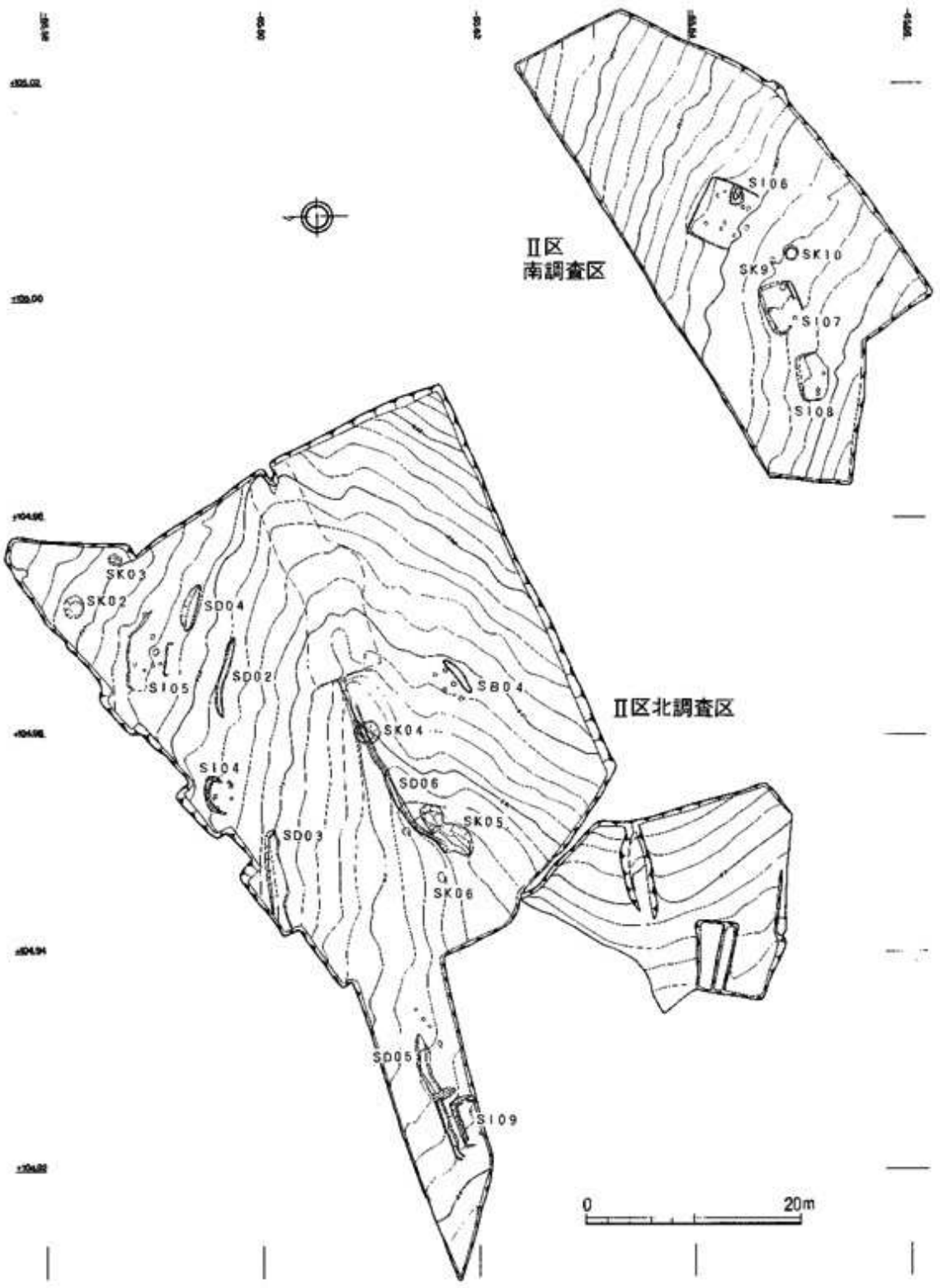
床面及び覆土からはかなりの遺物が出土している。第52図1，4，5，7は床面出土の土器である。1は土師器の鉢である。器壁は分厚く，内外面をヘラケズリにより整形しており，外面には丹塗りの痕もみられる。2は土師器甕である。口縁部は大きく外側に開き，胴部内面にはヘラケズリを施している。3は須恵器でボール状の坏部を持つ高坏である。4，5は須恵器蓋である。4は天井部と口縁部の境に沈線による段を持ち，天井部にはヘラケズリを施すが，5にはいずれの調整認められない6，7は須恵器坏である。6は口縁部のかえりが比較的長く，底部のヘラケズリも見られるが，7はかえりの長さが短くヘラケズリも見られない。蓋と坏を見ると新旧ふたつの時期のものが出土しているが，床面出土のものはいずれも新しい特徴を示し，実年代でいうなら7世紀はじめ頃の住居跡と考えられる。

SI05

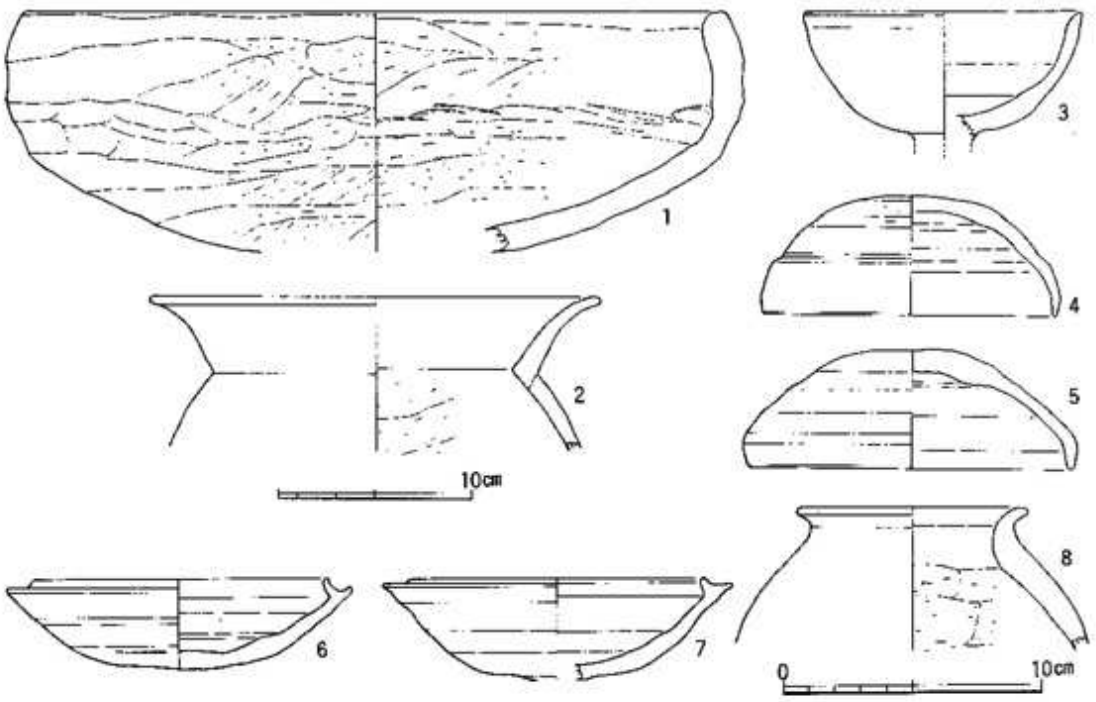
SI04の北東約12mの南向き斜面で検出された竪穴住居跡状の遺構である。斜面を削って平坦面を作り出しており，柱穴らしきピットも見られるが，形や配列は不規則である。この段の長さは現状で7.4mをはかり，段斜面は途中で「く」状に屈曲し，壁際の溝はみられない。壁際から3.4m下方には，長さ3.1mの小さな段が検出され，底から土師器甕が完形で出土した。何らかの建物が建っ



第50図　カンボウ遺跡Ⅰ区，ＳＩ０４実測図



第51図　カンボウ遺跡Ⅱ区，調査後測量図，遺構配置図



第52図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＩ０４出土遺物実測図

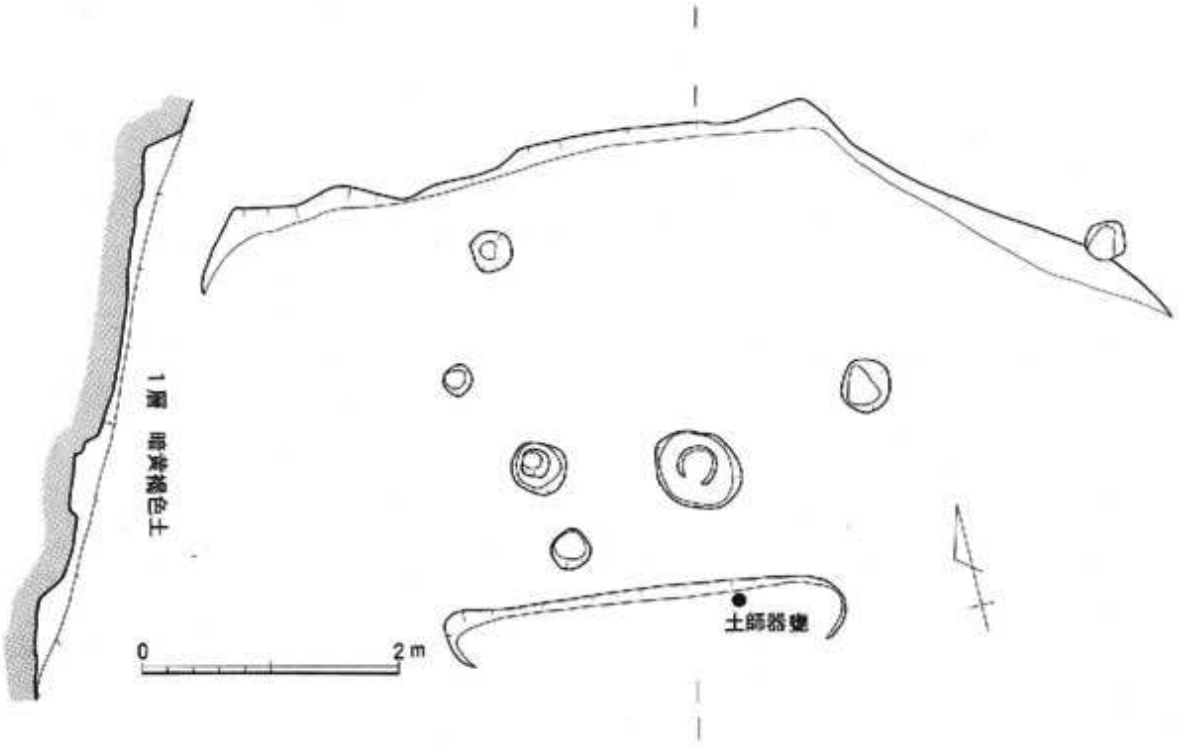
ていたものと思われるが，詳細は不明である。

第54図１が出土した小形の甕である。胴部はややいびつな円形で，口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。胴部外面にはハケメ，内面にはヘラケズリを施している。時期の詳細は不明だが，古墳時代後期のものであろうか。

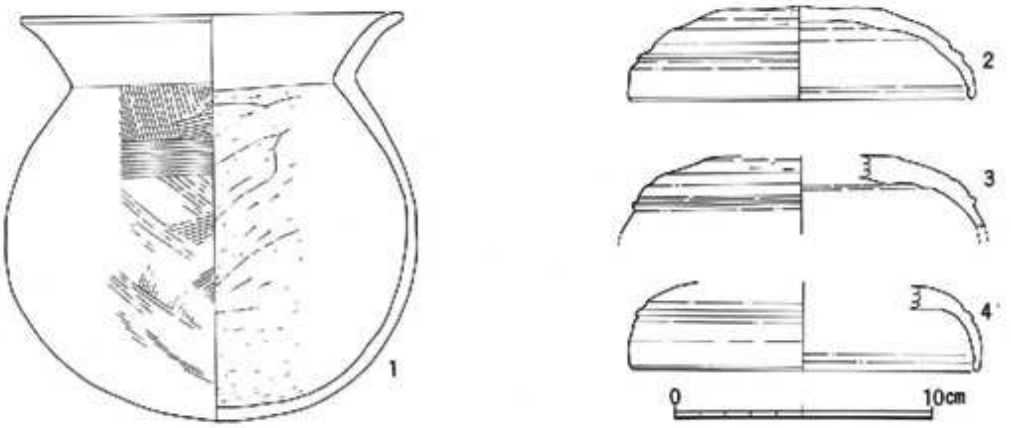
SI09

SI04の南東約40mの緩やかな南向き斜面に検出された竪穴住居跡である。南下方側は後世に削られて残っていないが，東西の辺が掘り方で4.6m，床面で3.5m程度の方形の住居跡と推定される。壁は比較的急角度で，現状で高さ50cm程度を測る。壁際には底の幅が12～20cmの溝がみられ，床面には２個の柱穴状ピットと焼土面が検出された。この住居跡の上方北側にはおよそ50cmの間をおいて，住居跡を囲むように「コ」字状の溝が検出された。この溝は上面で幅が70～80cm，長さが6.5mを測る。おそらく住居跡の上方からの水の浸入を防ぐための溝であろう。

遺物は須恵器，土師器が覆土から出土しているが，図示できたのは須恵器蓋３点である（第54図２～４）である。これらはいずれも天井部と口縁部の境に２本の沈線を引くことによって区分しており，天井外面にはヘラケズリ，口縁部内面には浅い沈線がみられる。山陰須恵器編年の典型的なⅢ期で，およそ６世紀後半頃のものと考えられる。　　（丹羽野　裕）



第53図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＩ０５実測図

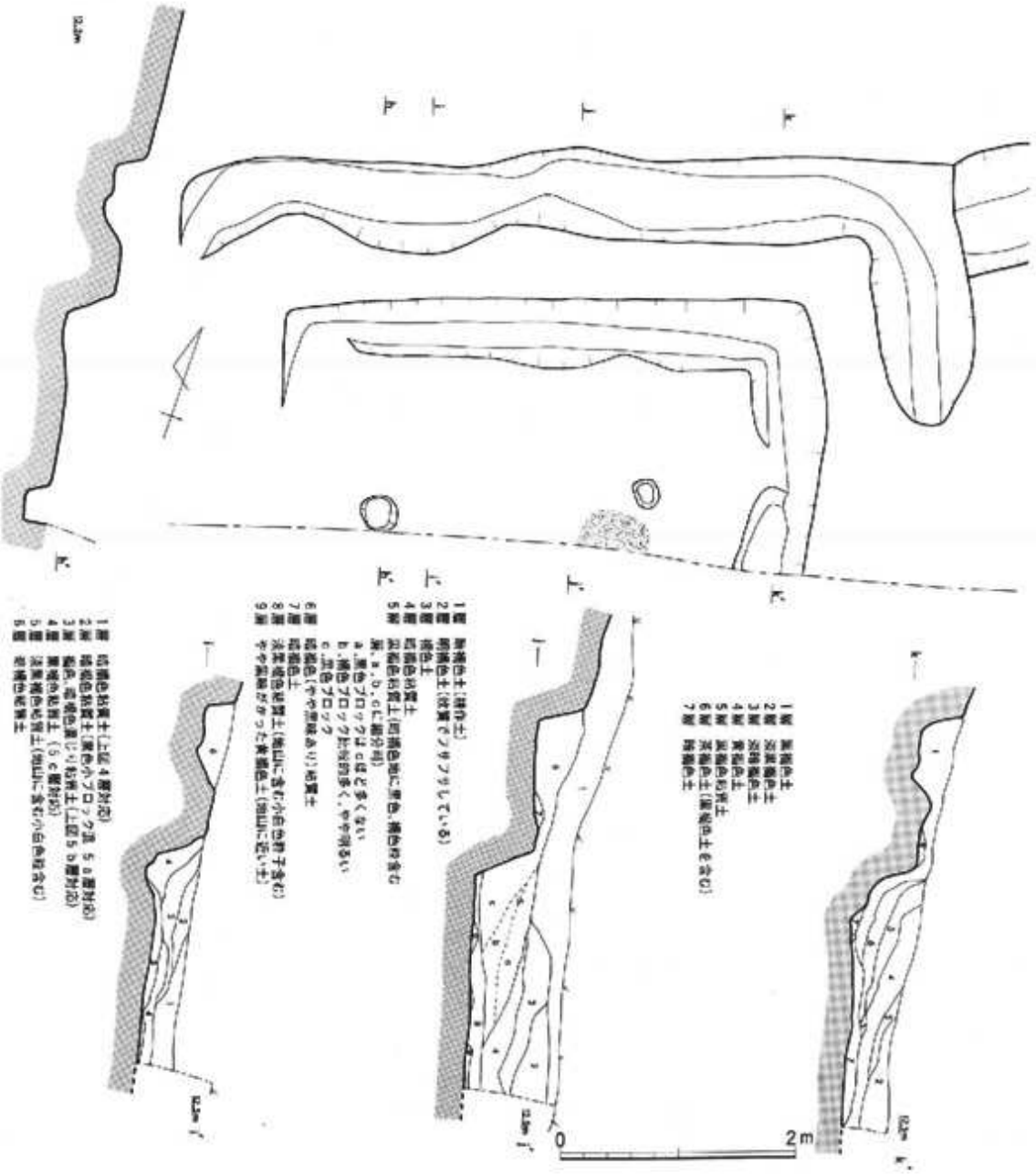


第54図　カンボウ遺跡Ⅱ区ＳＩ０５，０９出土遺物実測図
（1……ＳＩ０５，2～4……ＳＩ０９）

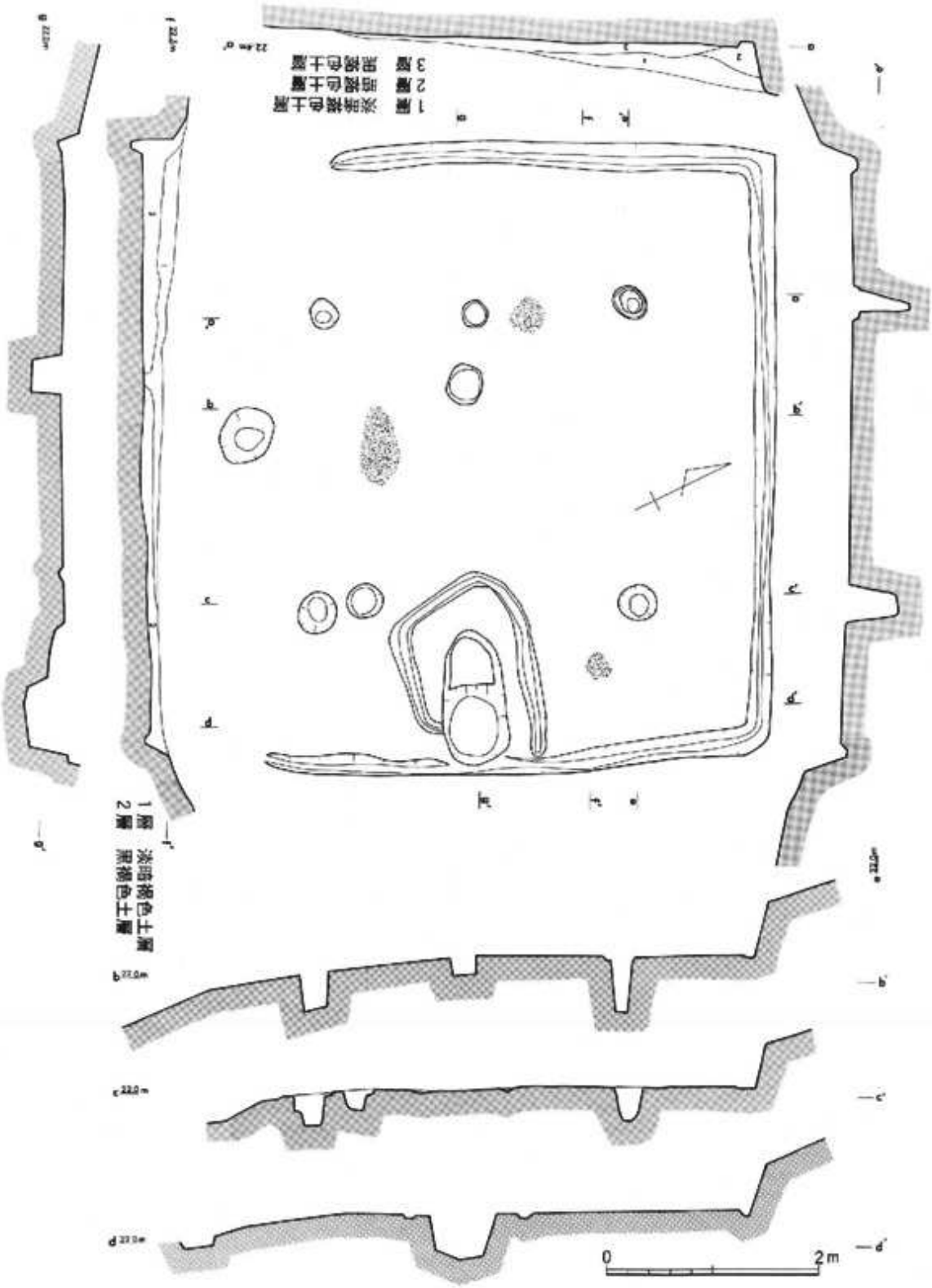
SI06

南側調査区で検出された３棟の竪穴住居跡のうち，北東最上方部に位置する。地山の赤褐色粘質土を掘り込んだ方形の竪穴住居跡である。主に北東側斜面を等高線に平行に深く掘り込んでいるが，南側は堆積土の流出により確認できなかった。住居跡は北東側の周壁の肩部で5.9m，床面は5.3mである。壁は北東の最も高いところで約50cmで，地山の一番低いところである南側は壁が確認でき

なかった。壁下には幅20cm，深さ10cmの溝が廻る。主柱穴は４個で堀方円形，直径約40cm，深さ30cm～40cmである。また，東壁際には２段になったピットが検出された。このピットは長軸130cm，短軸115cmで，深さは浅い部分が15cm，深い部分が40cmで楕円形である。このピットには幅20cm深さ５cmの浅い溝が巡っている。他にも４個のピットを検出している。床面は平坦で中央部の周辺３ヵ



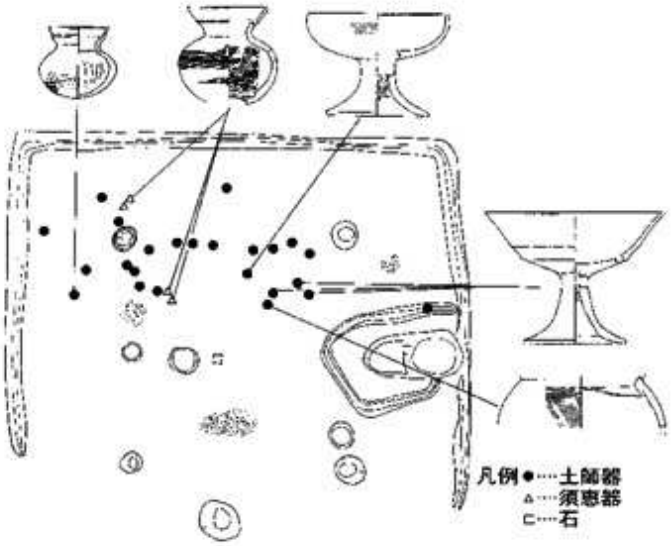
第55図　カンボウ遺跡Ⅱ区ＳＩ０９実測図



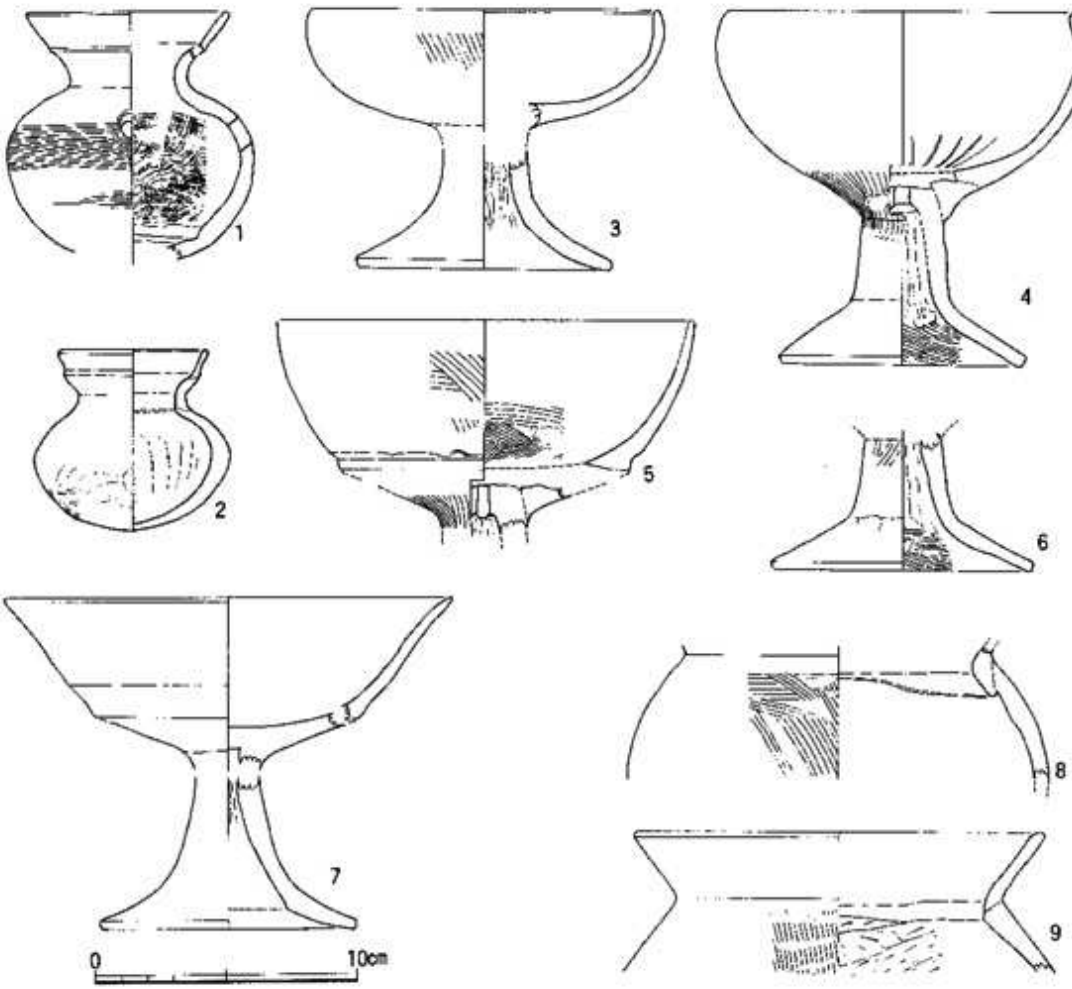
第56図　カンボウ遺跡Ⅱ区ＳＩ０６実測図

所から赤色で炭化物を含む焼土が確認された。

住居跡覆土の2層（黒褐色土）および床面直上から遺物が出土している（第58図1～9は全て床面直上出土遺物）。1は須恵器壺で円盤状の底部がみられ，内面には回転ナデの後櫛状工具で掻いたと思われるナデが施されている。2は器高約7cmの複



第57図　カンボウ遺跡Ⅱ区，S I 0 6遺物出土状況図

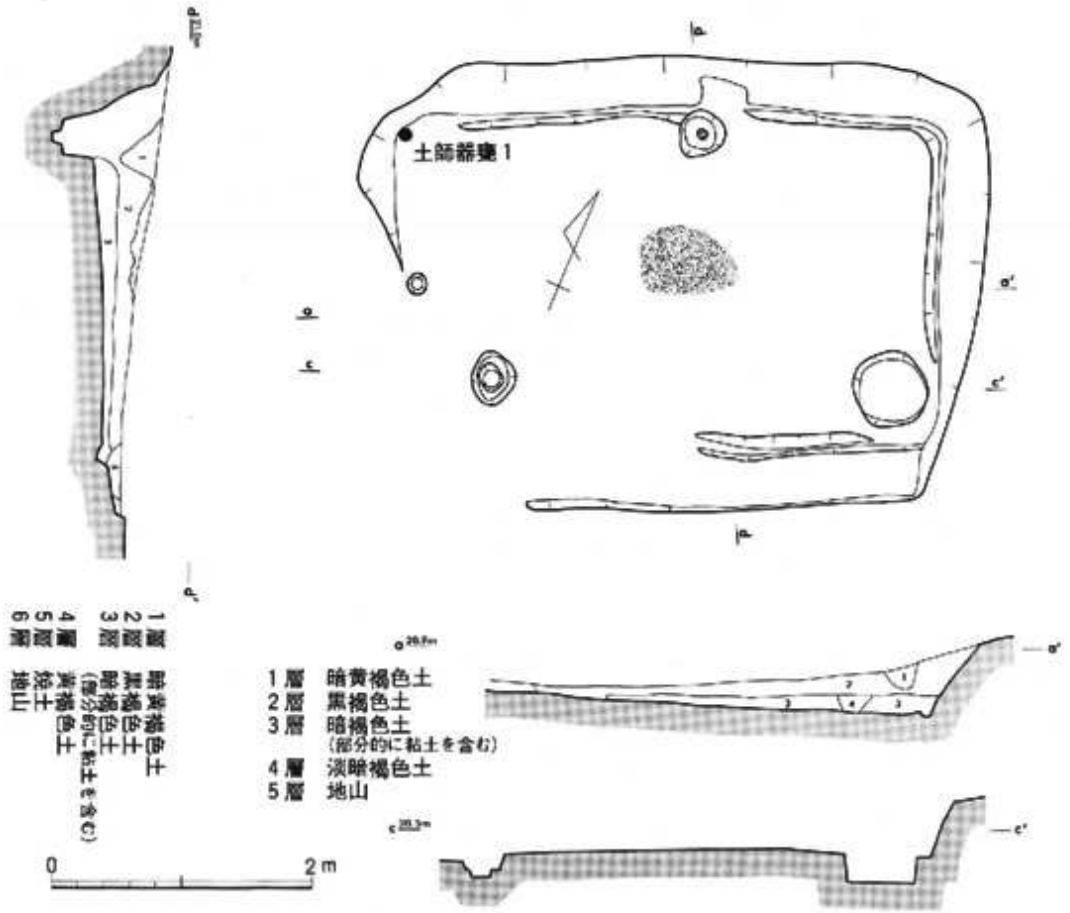


第58図　カンボウ遺跡Ⅱ区，S I 0 6出土遺物実測図

合口縁の土師器小型壺で外面底部は指頭痕跡の上をハケメが切ってあり，外面から頸部内面まで赤色顔料で塗布されている。3～7は土師器高坏で3・4の坏部分はボール状を呈している。4は脚部と坏部が個別に作られ脚部の軸受け部分には直径5㎜の穴が貫通している。また，脚部，坏部の接合部外面は粘土による補強が施され，内面には放射状の暗文が見られる。5・7は坏部に屈曲部があり5の脚部には軸受け部分に直径4㎜の穴が貫通している。9の土師器甕は胴部外面にはハケメ後に横ナデが，内面にはヘラケズリが施されている。これらの遺物の中から，I期の須恵器が出土しており，この住居跡は5世紀末のものと考えることができる。

SI07

SI06の南約6mの南向き斜面で検出された竪穴住居跡である。南下方が削平により残っていないが床面の長さが約4m，幅2.5mの長方形の住居跡と推定される。残存している壁の高さは約60cm程度を測ることができる。壁下には残存状況は不良であるが溝が廻る。また，壁際に不規則な配列



第59図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＩ０７実測図

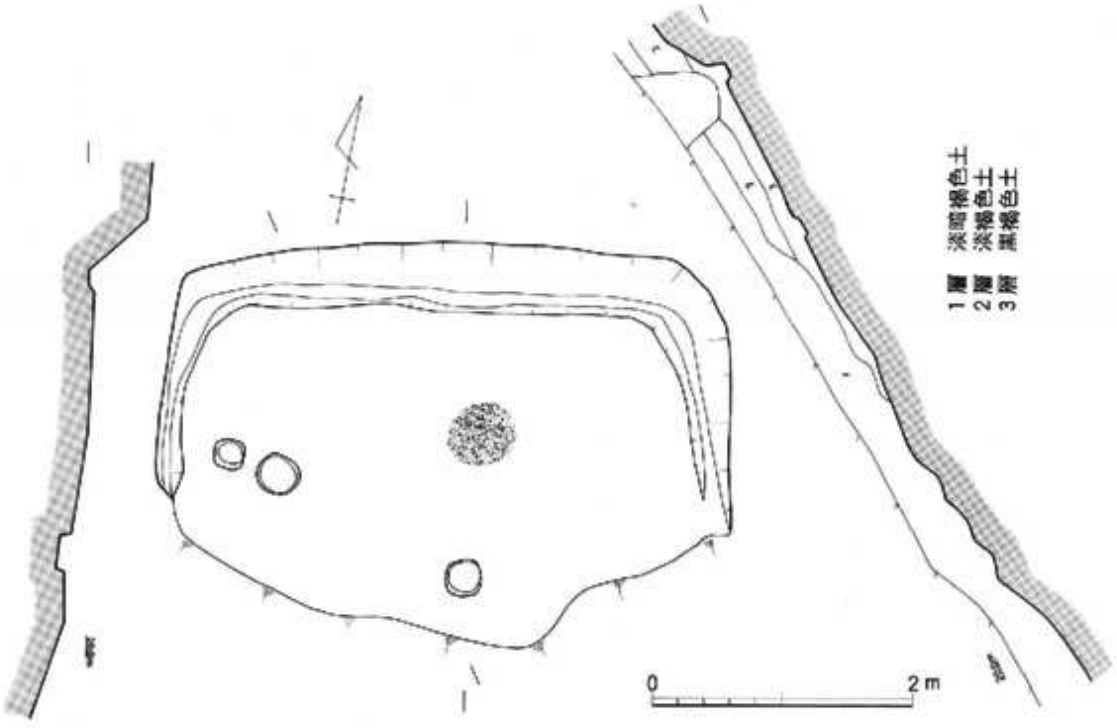
をした4個のピットを検出したが主柱穴は不明である。床面は平坦で中央には焼土が確認された。

北側と西側の壁のコーナーの床面から壁に接して土師器甕が出土している（第61図1）。口縁部は複合口縁で，やや内傾気味であるがほぼ垂直にたちあがり，端部は内側につまみだされている。胴部はほぼ球形で，外面の頸部下方に貝殻刺突による羽状文が施され，胴肩部には横方向の回転ハケメが，また，下半は斜め方向のハケメで調整されている。内面はヘラケズリのちに押圧するようなナデ調整が行われている。色調は淡褐色で外面には黒斑があり，焼成はやや軟である。口頸部の状態が古い特徴を残しているが，隣接する住居跡の出土遺物の特徴からみて，5世紀後半に下る可能性もあるものと思われる。

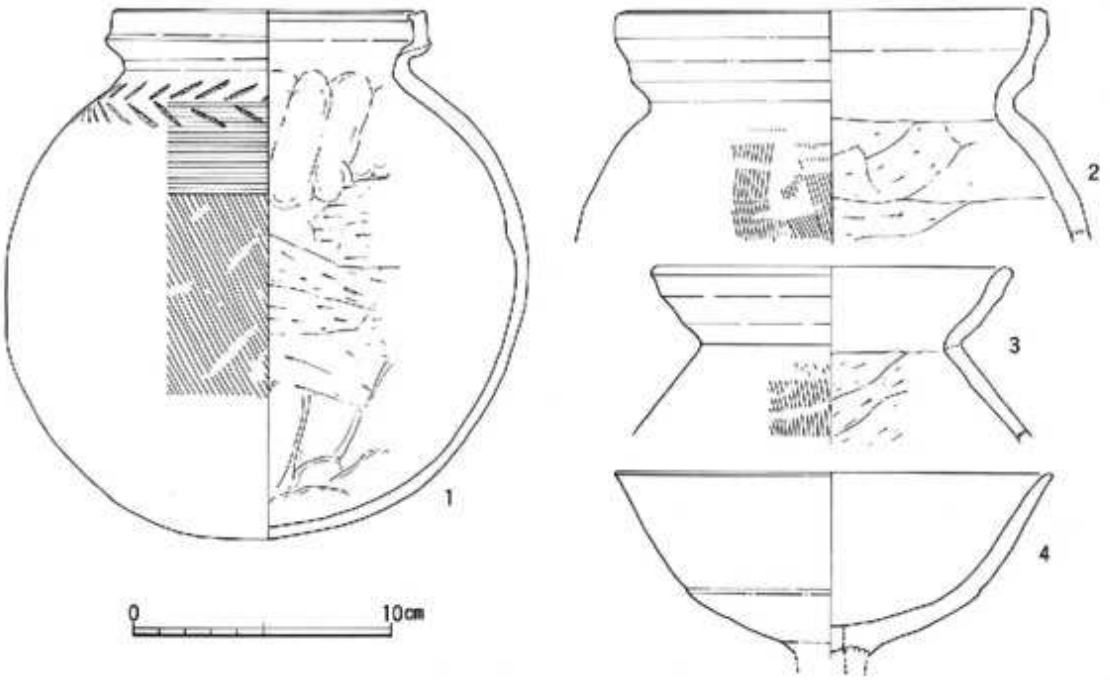
SI08

Ⅱ区南調査区で確認された3棟の竪穴住居跡のうち最下方で，SI06の南西約12mに位置する。SI06，07同様に斜面を削って平坦面を作り出しているが，南側半分が流出している。東西の辺が掘り方で4.4m，床面4m程度の方形もしくは長方形の住居跡と考えられ，周壁の下には溝が廻っている。床面のほぼ中央部には焼土が，また，不規則な配列をしたピットも3個検出された。

第61図2・3・4が出土遺物である。2，3の土師器甕は外面がハケメ，内面はヘラケズリで調整してある。両者ともに複合口縁の形態を呈しているが，3はその痕跡をわずかにとどめているにす



第60図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＩ０８実測図

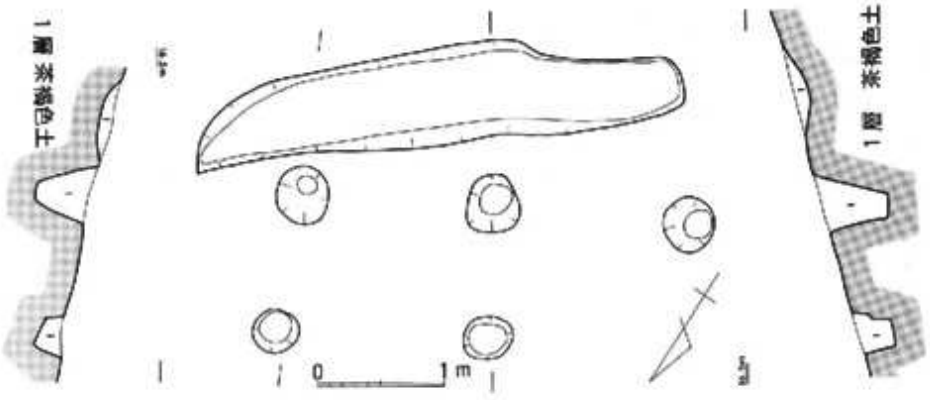


第61図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＩ０７，０８出土遺物実測図
（1……ＳＩ０７，2～4……ＳＩ０８）

ぎない。4は坏部にわずかな屈曲部を持つ土師器高坏である。これらの遺物よりこの住居跡は古墳時代中期のものと考えられる。（大本公良）

SB04

SI04の谷を挟んで南側の北向き斜面で検出された建物跡である。斜面の方向に一致して3穴の柱穴が並び，又北西側の2穴には下方にも対応する柱穴が検出されている。柱穴の上方には幅50～70cm，深さ10cm程度の浅い溝がみられるが，柱穴の並びの方向とはややずれている。小規模な掘立柱



第62図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＢ０４実測図

建物が建っていたものと考えられる。遺物は出土しておらず，時期等は不明である。

SD02

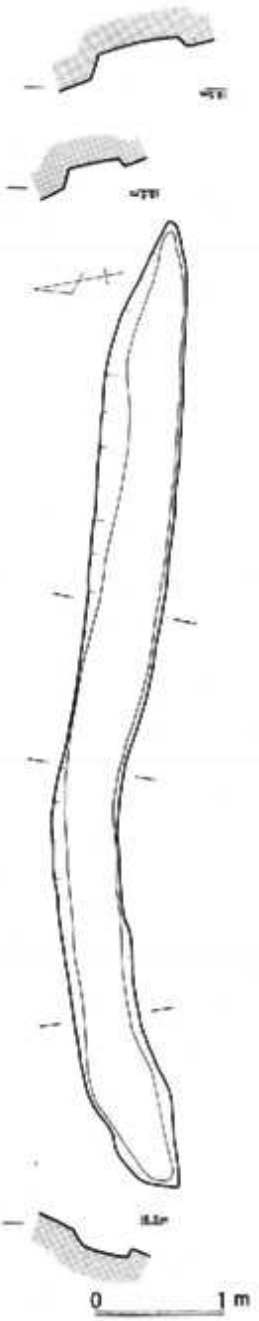
SI04の東約６ｍの斜面で検出された溝状遺構である。斜面の方向にほぼ平行して掘られており，長さ7.4m，幅およそ50～60cm，深さ現状で20cm前後の細長い溝である。遺物は出土しておらず，時期，性格とも不明である。

SD03

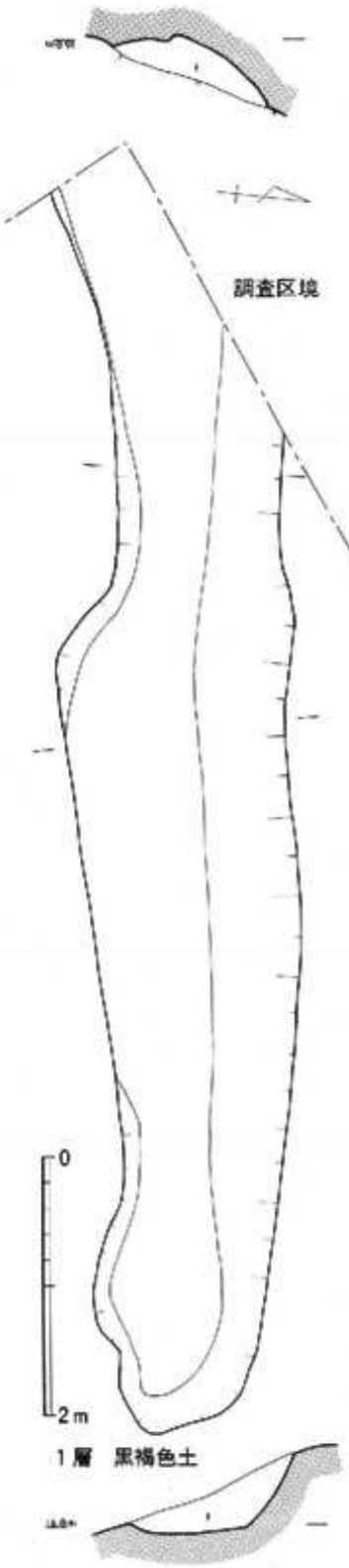
SI04の南西4ｍの調査区北壁付近で検出された溝状遺構である。斜面にほぼ平行して東西に延びており，遺構の東側は用地外にさらに延びていくため全容は不明であるが，検出部で長さ9.6m，上面幅が1.2～1.5m，深さ60cm前後を測る。覆土からは須恵器，土師器片が出土しているが，いずれも小片で明確に時期をうかがえる資料はない。古墳時代後期以降のものと考えられる。

SD04

SD02の北東上方約６ｍに検出された長さ4.5m，約1.3mを測る溝状の遺構である。斜面の方向とほぼ平行して作られており，上端からの深さは40cm前後で，底面はやや傾斜している。溝の形状を示しているが，長さが短く底も傾斜しているので，本来的な溝としての機能を果たしていたとは考えにくく，性格は不明である。遺物も出土し



第63図　ＳＤ０２実測図

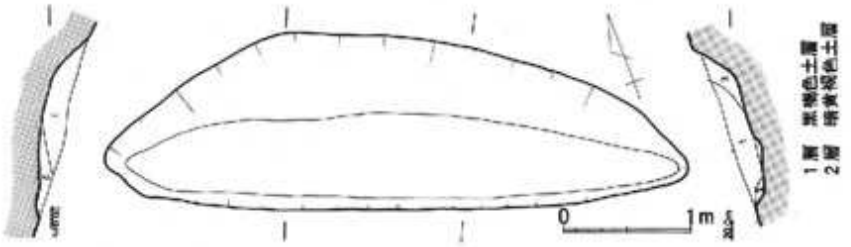


第64図　ＳＤ０３実測図

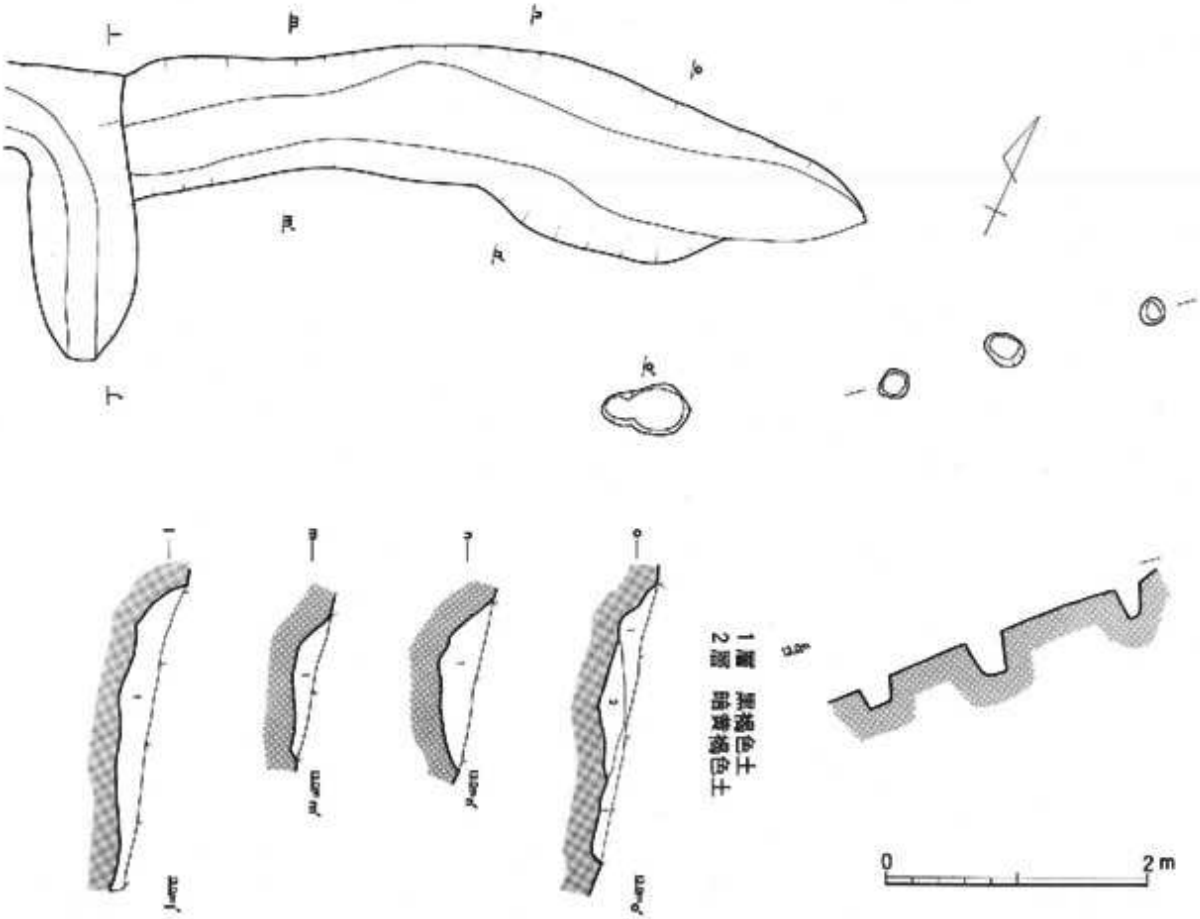
ていない。

SD05

北調査区の西端付近，SI09の東に隣接して検出された溝状遺構である。長さ6.2m，上端幅が85cm～136cm，下端幅が36cm～64cmを測り，わずかに湾曲している。深さは25cm～40cmで，底面は基本的に水平である。この溝の東側付近には，柱穴様のピットが4穴検出されている。このうち東側の3穴は径20cm～30cm，深さ20cm～28cmを測り，直線状に並んでいるが柱間は不揃いである。



第65図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＤ０４実測図



第66図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＤ０５実測図

溝と柱穴の関係は不明だが，方向が一致しておらず互いに無関係である可能性が高い。

SK02（第69図）

北調査区のほぼ北端で検出された不正円形の土壙である。長径が5.5m，短径が1.8mを測り，深さは上方の上端から88cm，下方の上端から28cmを測り，底面はほぼ水平である。土壙内には一括して暗黄褐色土が堆積しており，遺物は出土していない。時期，性格ともに不明である。

SK03（第69図）

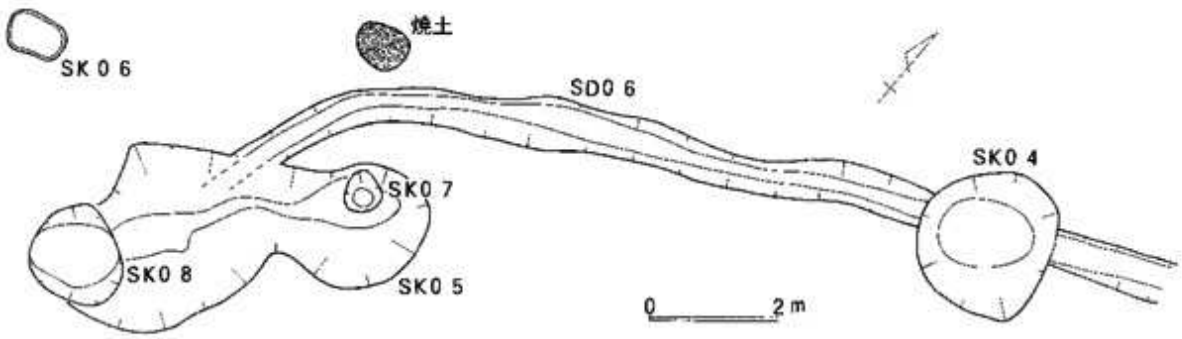
SK02の南東約５m下方に検出された不正楕円形の土壙である。長径1.2m，短径1.1mを測り，底面は傾斜している。覆土内から土師器片が出土しているが，小片で図示できるものではない。時期，性格ともに不明である。

北調査区谷底部の遺構（第67図）

北調査区の谷底部分には，遺物を含む大量の土砂が堆積し，その上にいくらかの遺構が検出された。谷底のほぼ最低レベル部分を縫うように，幅が狭くて深い溝（SD06）が調査区外からのび，不正形で細長い土壙（SK05）につながる。このSD06とSK05は第１黒色帯の下面から切り込んでいる（第70，75図参照）。SD06を切ってSK04が，SK05を切ってSK07とSK08が検出されている。またSD06の北西側には焼土とSK06が検出されたが，これらはSD06の検出面より下面で検出されており，SD06よりも古い遺構と考えられる。

SD06（第70図）

調査区外から下方に向けて谷底最低レベル付近に検出された溝で，わずかにうねりながら下方に下り標高11.5m付近で南に屈曲してSK05に接続している。第１黒色帯の下面で検出され，埋土の上に第１黒色帯が続いている。幅は32～70cm，深さは１m前後と狭くて深い溝で，斜面の角度は90°に近い箱形に掘り込まれた溝である。底は弥生時代の包含層である第２黒色帯を掘り抜いてそ

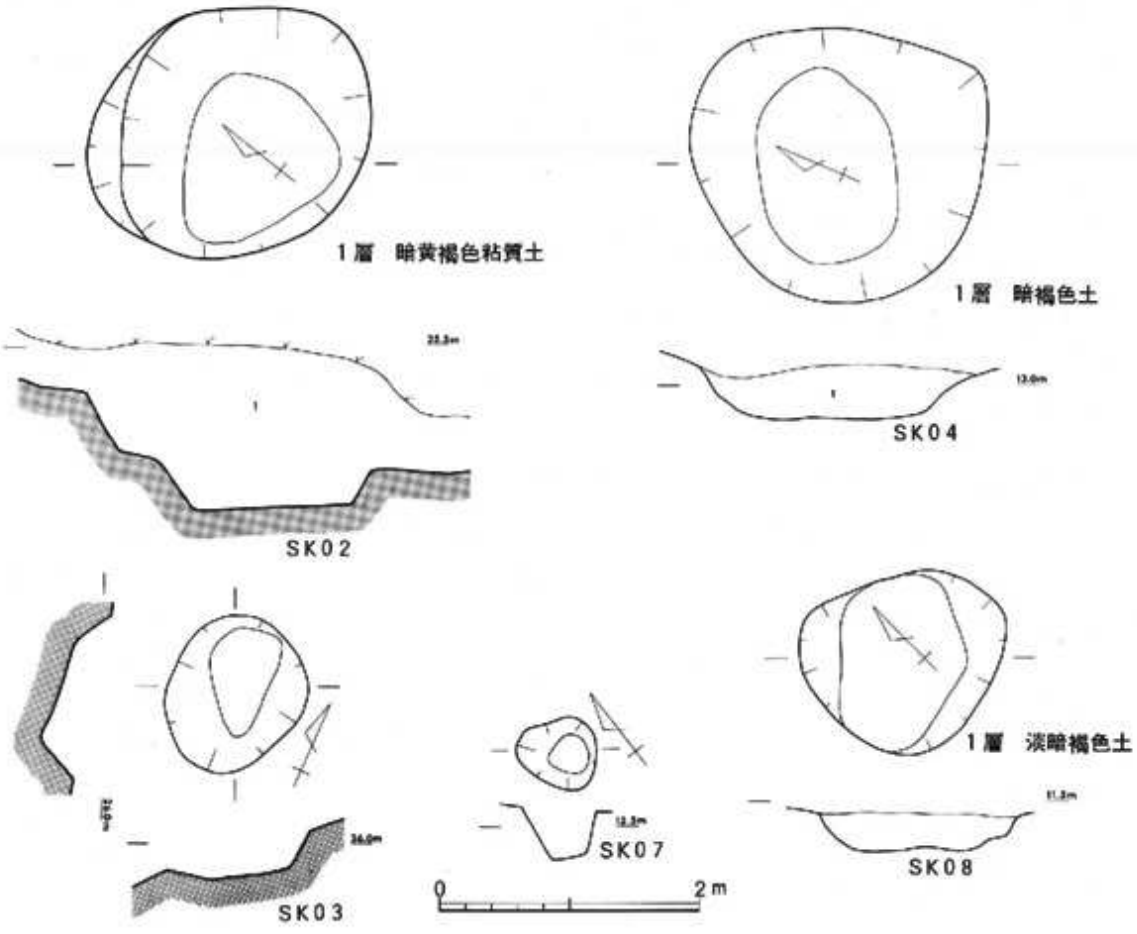


第67図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＤ０６とＳＫ０４～０８各遺構配置図

の下の層に達している。溝の中には，SK05接続部分を除いて，基本的に黒混じりの暗褐色土が一括して詰まっており，あるいは一度に埋められたものかも知れない。遺構の性格については，SK05に接続することから，SK05に導水するような機能を想定しているが，直接的に水がたまったような土層状況等はみられず，明言はできない。

埋土内からは須恵器，土師器等が出土している（第71図）。1，2はかえりのある杯身，3，4は底部に回転糸切り痕の残る杯身で3には高台が付いている。4，5は高坏で，2方向に3角形スカシがみられる。さまざまな遺物がみられ

第68図　カンボウ遺跡Ⅱ区
ＳＫ０６実測図



第69図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＫ０２，０３，０４，０７，０８実測図

るが，最新の遺物から考えて８世紀以降の遺構と考えられる。

SK04（第69図）

第１黒色帯の下面で，SD06に重なって検出された土壙で，SD06が埋まって後に作られた遺構である。長径2.2m，短径2.1mの不正円形の土壙で，深さは約40cmを測る。埋土内から須恵器坏が出土している（第71図７）。底部には回転糸切り痕がわずかに観察できる。須恵器の特徴及びSD06との前後関係から８世紀以降の遺構と考えられる。

SK05（第70図）

谷底部の西下方でSD06に連続して検出された土壙である。上端で長さが6.2m，幅が1.4m～2.8mの細長くて不正形を呈し，底面の幅は16～75cmと非常にせまい。南側は地山の斜面を削り込み，北側は谷底堆積物を掘り込んでいる。内部には粘質の土が堆積しており，水が溜まっていた状況も考えられるが，明言はできない。

内部からは多くの遺物が出土している（第71図８～18）。８は小形の壺の蓋であろうか。天井部には回転ヘラケズリが施されている。９は輪状つまみが付く蓋である。10はかえりを持つ杯身，11，12は平底で体部が外に開き，底には回転糸切りが残る坏で11は須恵質，12は土師質，13は高台の付く坏である。14，15は高坏で，15は切れ目をいれただけのスカシの痕跡がみられる。16，17は土製支脚である。16は外面のほぼ全体をヘラケズリで調整を行っている。18は土師質の甑片であろう。

SD06と同様にさまざまな時期の遺物が出土しているが，最も新しいと考えられるのが11，12の坏であろう。これらは全形をうかがうことはできないが，およそ９～10世紀頃の遺物と考えられる。よって同時期と考えられるSD06共々，９世紀以降の遺構と考えられよう。

SK06（第68図）

SK05の北西約3.2mに検出された土壙で，SD06，SK05の検出面より下方で検出されているため，それらより古い遺構である。長辺が92cm，短辺が62cmの隅円長方形で，深さ18cmを測る。周壁は焼けて赤変し，土壙の底には炭が堆積していたことから，炉として使用されていたものと考えられる。

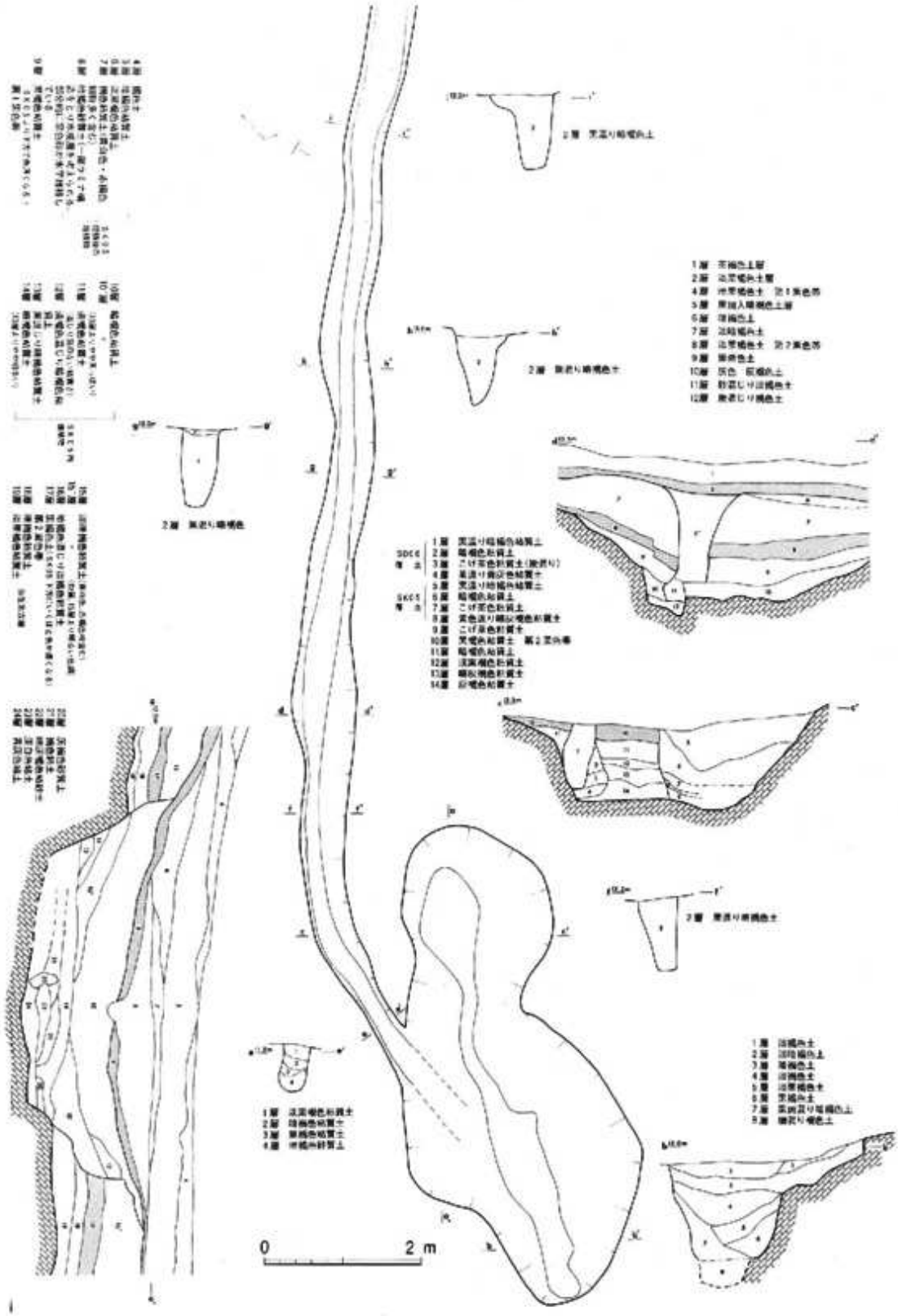
SK07（第69図）

SK05が埋まった後，その北端付近に作られた土壙である。長径60cm，短径55cmの不正円形小形土壙である。時期，性格ともに不明である。

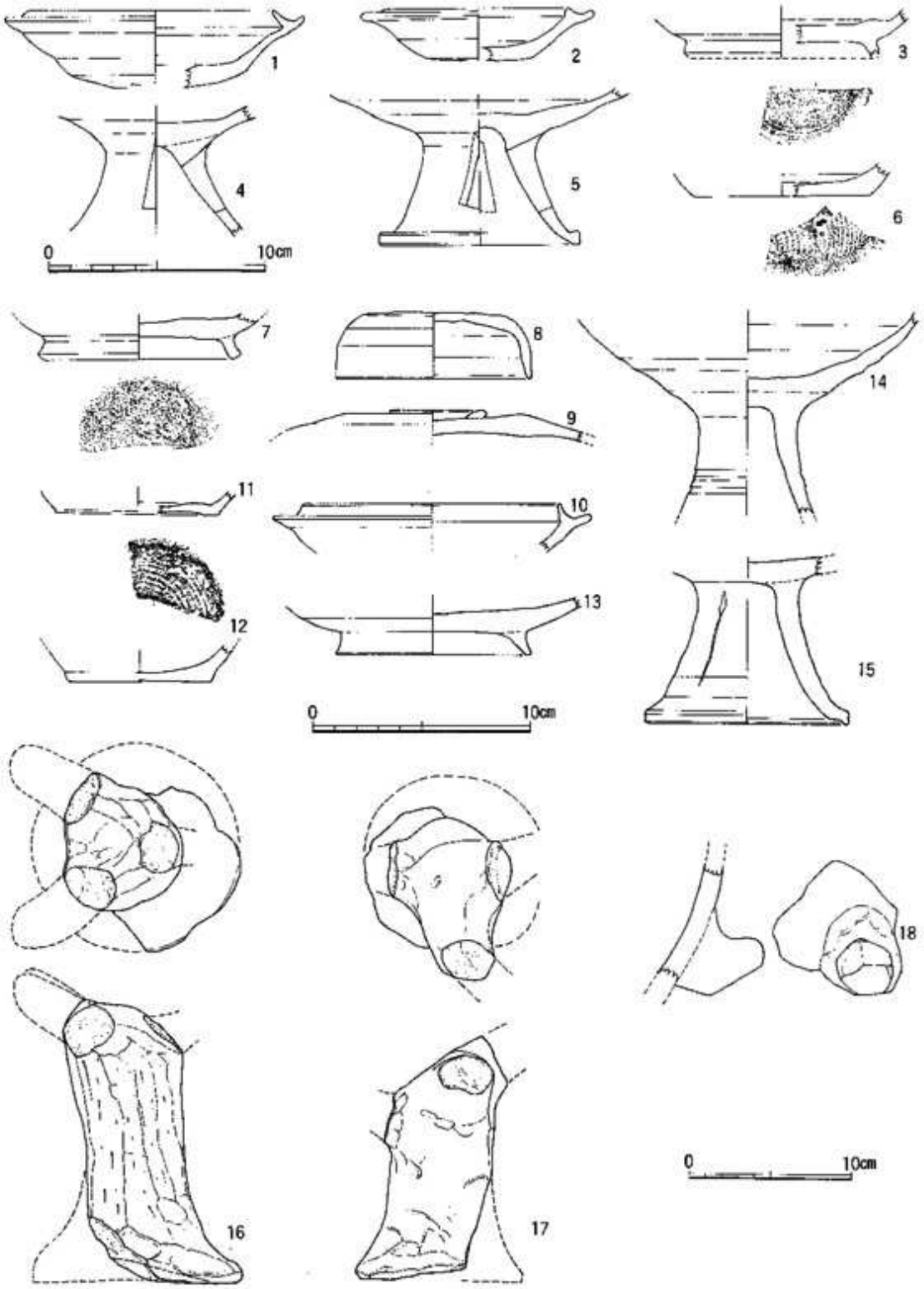
SK08（第69図）

SK05の南端に重なって，その上で検出された土壙である。長径1.65m，短径1.45mの不正円形土壙で，深さは30cmを測る。時期，性格とも不明だが，SK05との関係から９世紀以降であることはいえる。

（丹羽野　裕）



第70図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＤ０６，ＳＫ０５実測図



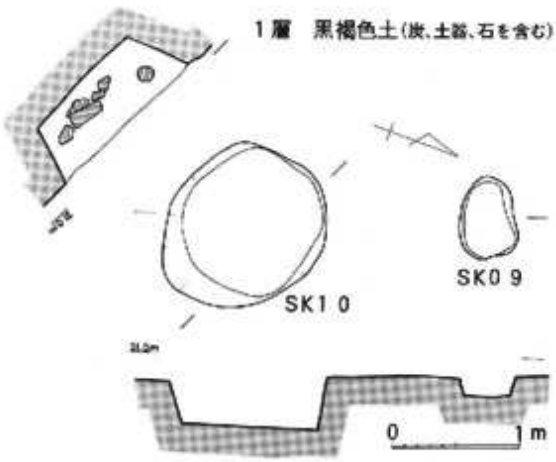
第71図　カンボウ遺跡Ⅱ区ＳＤ０６，ＳＫ０４，０５出土遺物実測図
（１～６……ＳＤ０６，７……ＳＫ０４，８～18……ＳＫ０５）

SK09（第72図）

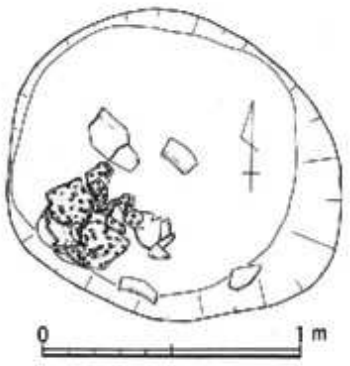
南調査区の斜面中程，SI07の東方２ｍに位置し，長軸60cm短軸40cmの楕円形を呈する土壙である。深さ約20cmで黒褐色土が堆積する。遺物は全く出土していない。

SK10（第72，73図）

SK09の南１ｍ付近に隣接して確認された直径約１ｍ，深さ50cm程度の円形の土壙である。底面は平坦で黒褐色土が堆積し，炭化物，多量の角礫に混じって須恵器，土師器が検出された（第74図）。土師質土器の坏にはナデ調整が施され（１，２，３）４の碗は外面が淡褐色で内面は黒灰色でミガキがみられる。５は須恵器の壺である。胴部の最も張ったところに幅６mm程度の突帯を張り付ける。底部は平底で指頭圧痕が施されている。胴部外面に平行タタキ目文，内面には扇形の放射状タタキ目文が認められる。６の須恵器壺は外面が平行タタキ目文，内面が同心円タタキ目文と認められるが総体として劣化が著しい。７の土師器甕は口縁内外面ヨコナデ，胴部外面上半はナデ調整が施されているが，一部に薄いヘラ状のもので不定方向のナデがみられる。内面は横方向のヘラケズリである。形態は口縁が緩やかに外反し，端部はわずかに上方につまみ出され，，胴部はさほど張らない。９の土師器甕は口縁内外面回転ナデ，胴部外面はハケメのちナデ，内面は横方向のヘラケズリで調整されている。口縁の形態は７と同様であるが，胴部はほとんど張りがみられない。８は口縁部が大きく外反し，甕もしくは鍋と思われる。これらの土器の特徴から基本的には同時期のものである可能性があり，時期的には10世紀頃のものと推定される。SK10の出土遺物の所属時期から考えて，SK10は，近くにある３棟の住居跡とは関係しないものである。（大本公良）



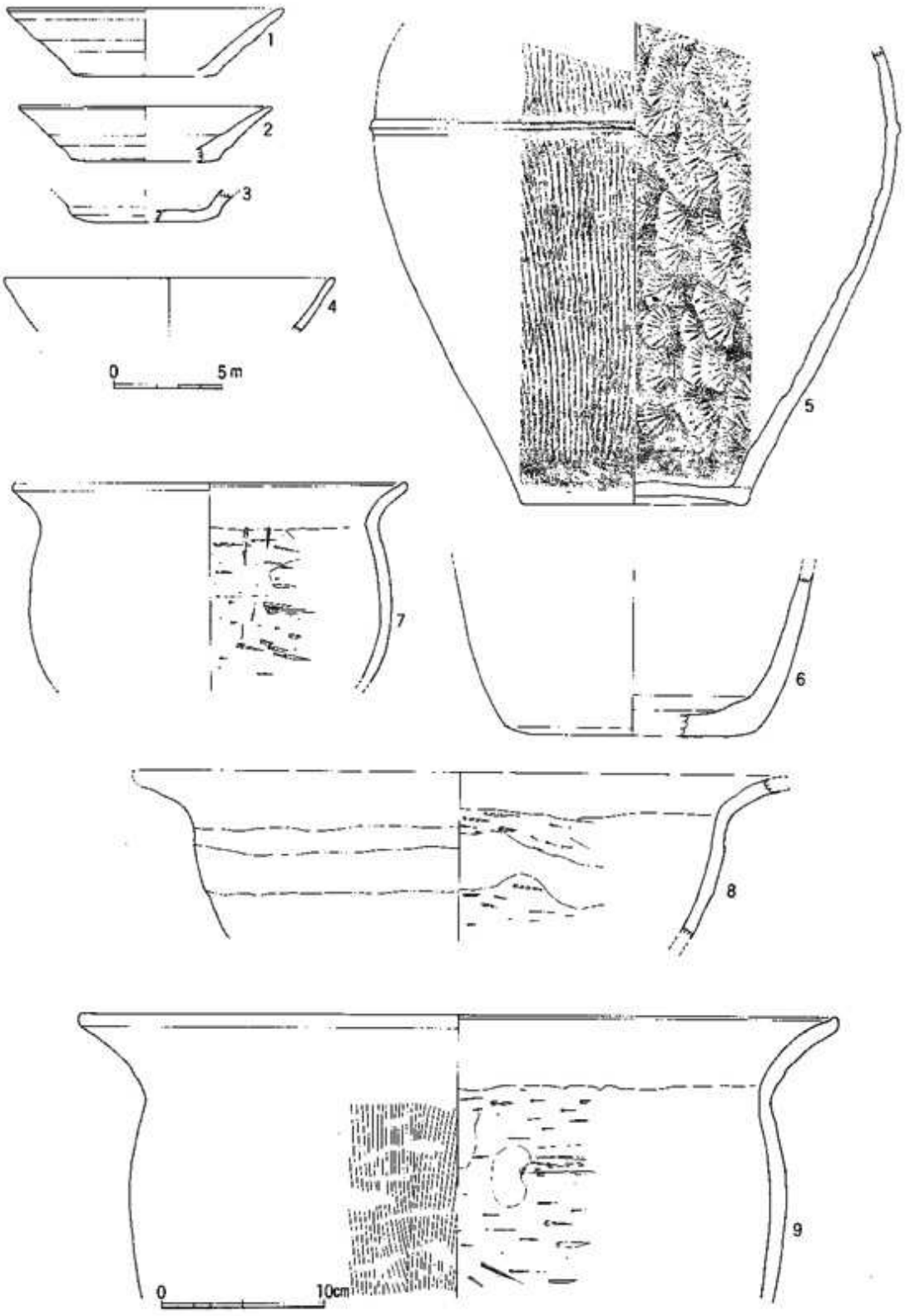
第72図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＫ０９，１０実測図



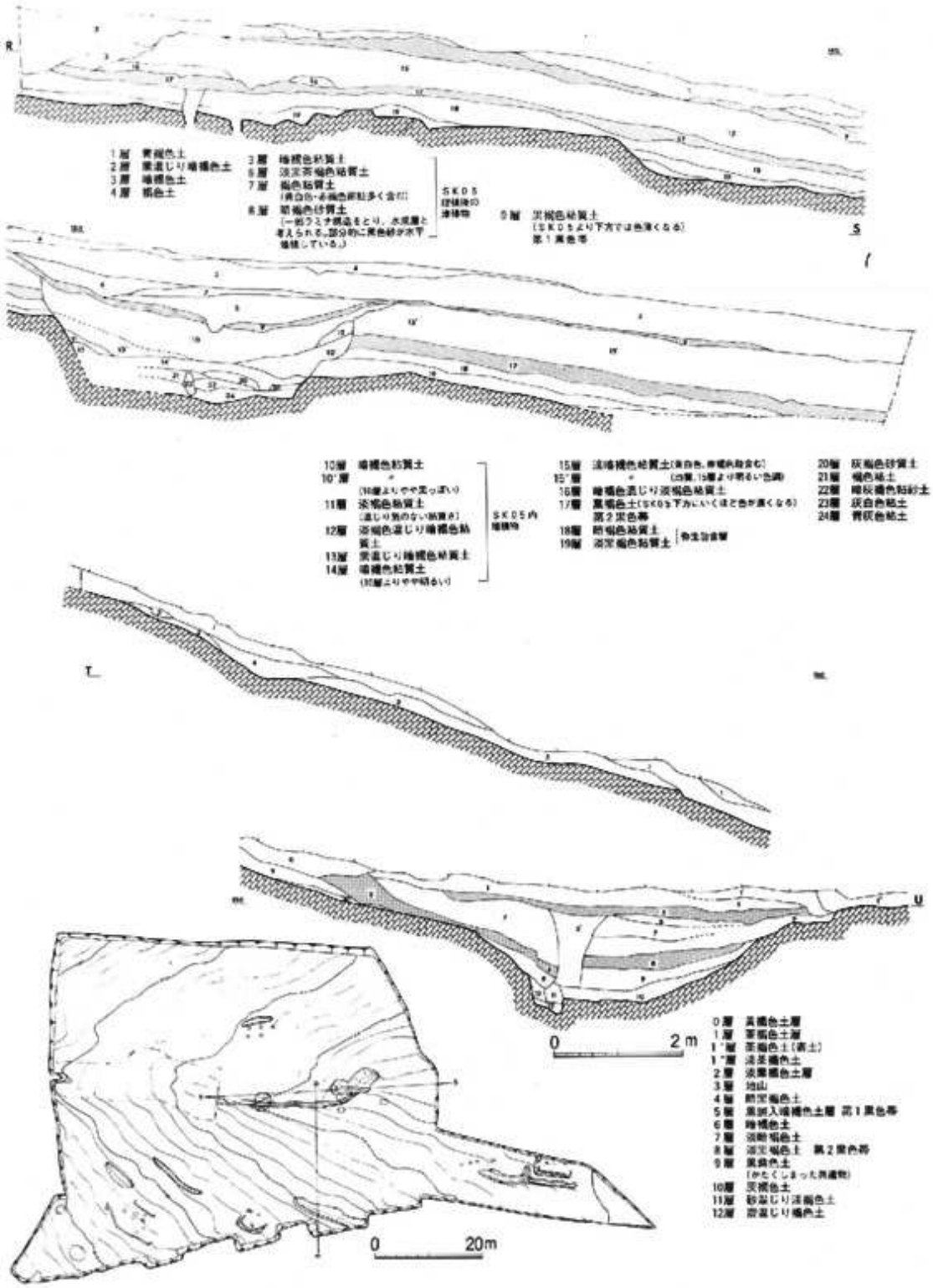
第73図　ＳＫ１０遺物出土状況実測図

谷底包含層の調査

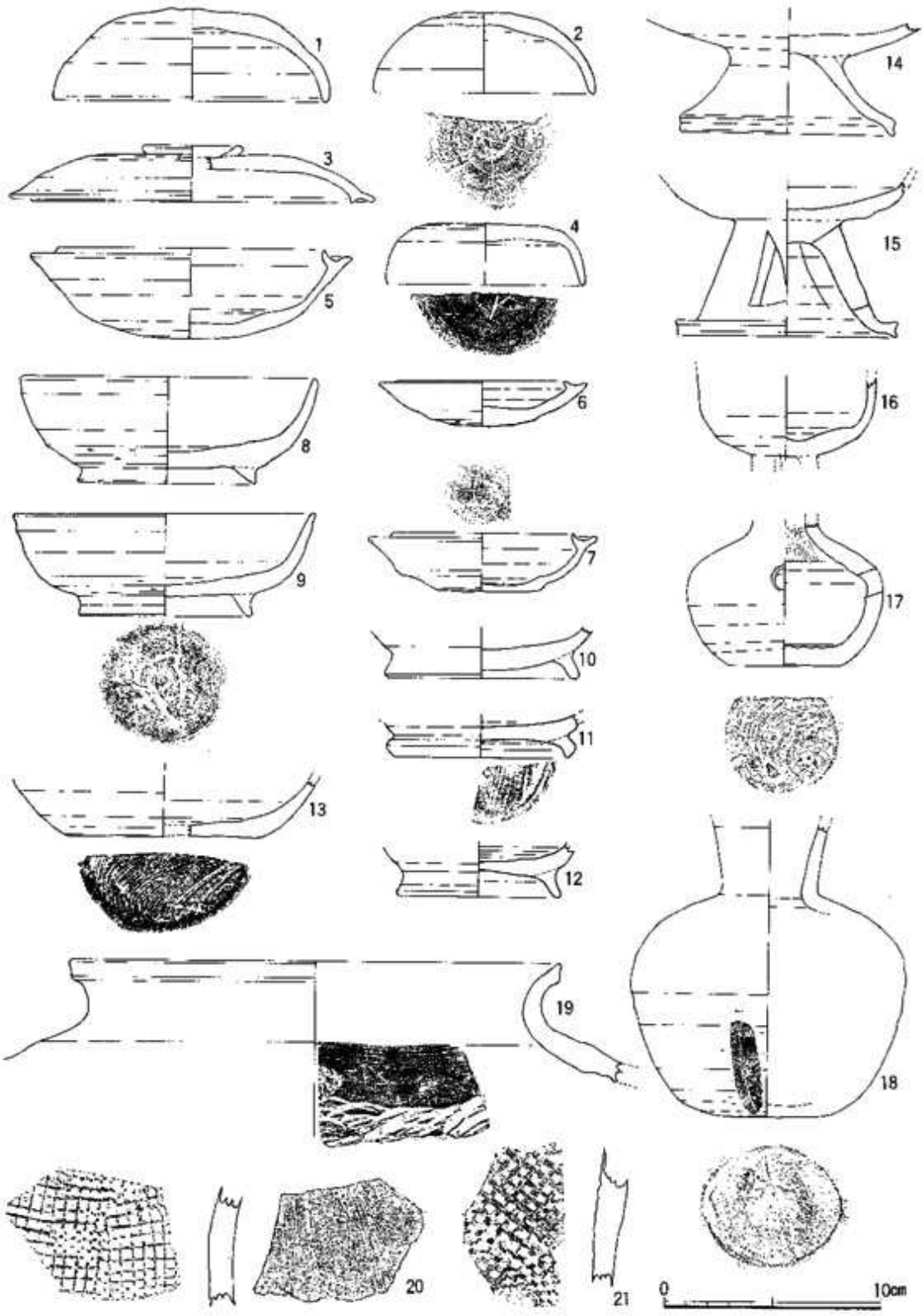
北調査区の谷底には，深いところで２ｍ以



第74図　カンボウ遺跡Ⅱ区，ＳＫ１０出土遺物実測図



第75図　カンボウ遺跡Ⅱ区北調査区，谷底土層堆積状況図



第76図　カンボウ遺跡Ⅱ区，第２黒色帯より上層出土遺物実測図(1)

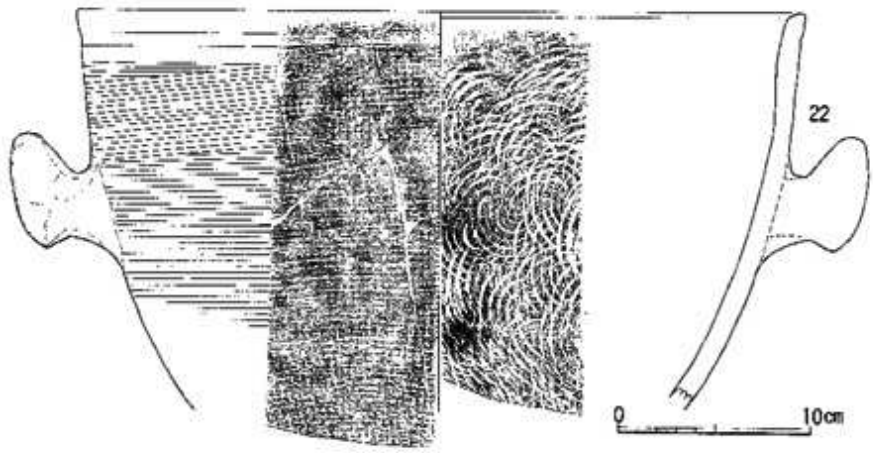
上に及ぶ土砂が堆積し，そこから多くの遺物が出土した。土層は上下に２枚の黒色土層がみられ，上位の層を第１黒色帯，下位の層を第２黒色帯と称した（第75図）。調査の結果，遺物は基本的に第２黒色帯を境に，それより上には古墳時代後期以降の遺物が，第２黒色帯を含んだ下の層からは弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土した。

第２黒色帯より上位出土の遺物（第76，77図）

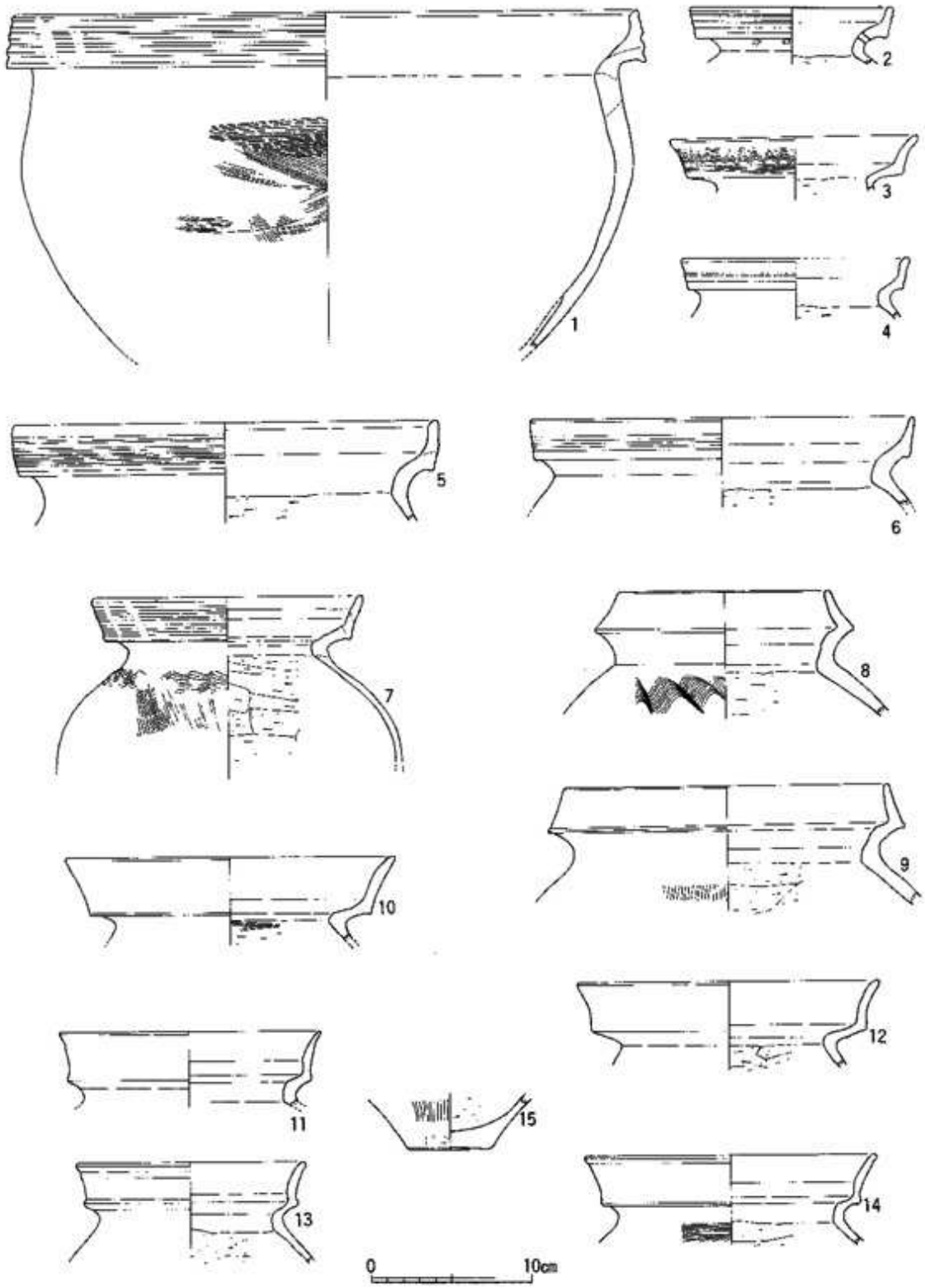
須恵器，土師器，土製支脚，鉄滓等の多くの遺物が出土した。１～４は須恵器蓋で，２，４には内面にヘラ記号がみられる。６～11は須恵器坏でかえりを持つもの，高台を持つもの，平底のものがあり，底部に回転糸切り痕を残すものもある。14～16は高坏で，16は小形でボール状の坏部を持つものである。17は須恵器で，底部には回転糸切り痕を残す。18は須恵器直口壺で底部外面と胴部下半部に線状のヘラ記号がみられる。20，21は須恵器甕の胴部で，外面には格子状タタキ，20の内面にはハケメ状の調整がみられる。22は復元口径38cmとやや大形の須恵器甕である。外面は平行タタキの後カキメを施し，内面は同心円タタキ痕が見られる。さまざまな時期の遺物が混在しているが，少なくとも８世紀以降に堆積した土層と考えられる。

第２黒色帯以下出土の遺物（第78，79図）

弥生時代後期を中心とする遺物が出土している。第78図は甕である。１はやや浅い鉢状の甕でわずかに内傾する口縁を持つ。２～７は若干外方に開く口縁を持ち，外面に沈線や波状文（３）を施している。２は頸部に２つの小孔が開けられ，７は不規則な波状文がみられる。８，９は内傾する口縁部を持ち，８の肩部には櫛状工具による波状文がみられる。10～12は外反する口縁部を持ち，端部は丸く納める。13，14は口縁部は外反し，端部をわずかに外方につまみ出すようにして納めている。16は比較的長い頸部に内傾する口縁を持つ壺である。胴部のほぼ中央部にはキザミをいれた

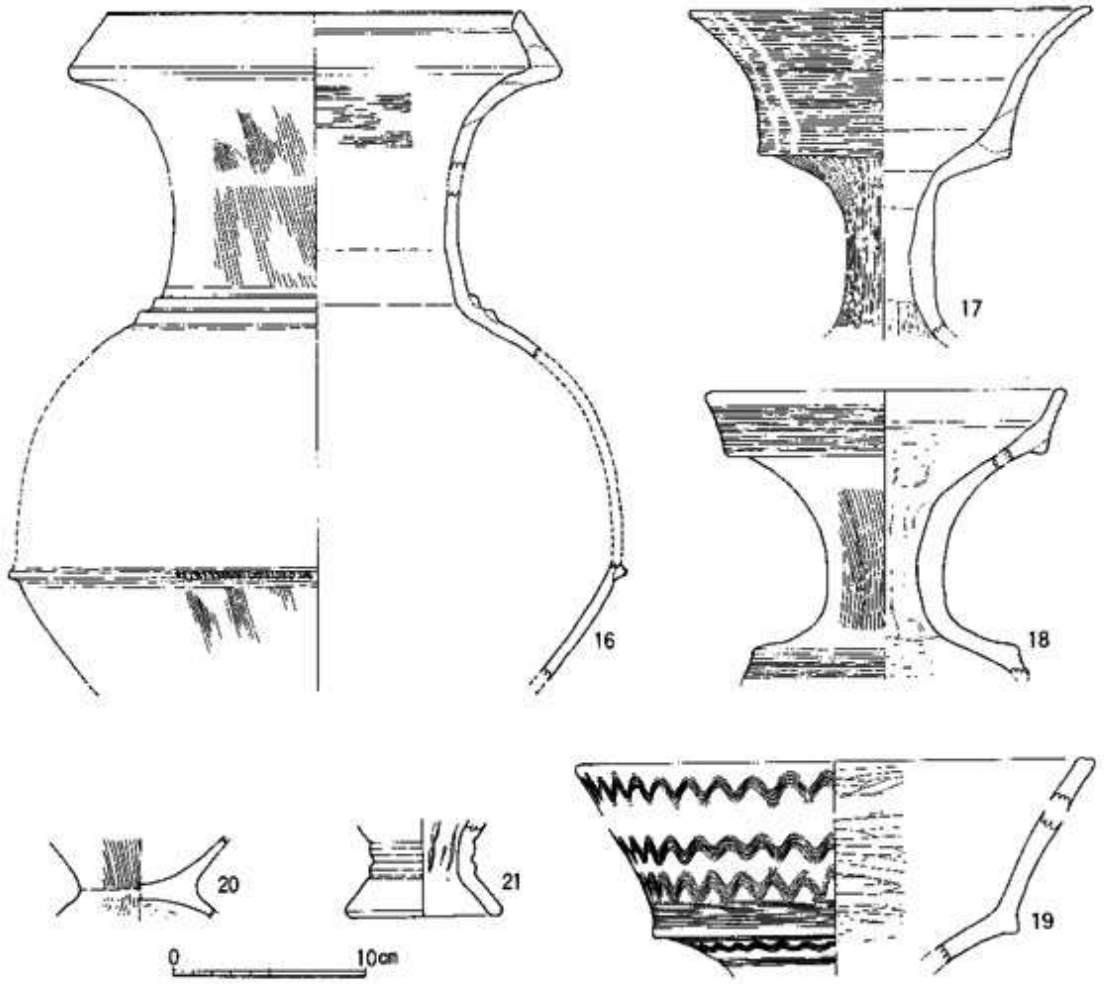


第77図　カンボウ遺跡Ⅱ区，第２黒色帯より上層出土遺物実測図(2)



第78図　カンボウ遺跡Ⅱ区，第２黒色帯以下出土遺物実測図(1)

突帯を，胴部と頸部の境付近には２条の突帯を貼り付けている。胴部外面，頸部外面には縦方向のハケメ，頸部内面には横方向のハケメを施している。胎土は４㎜以下の砂粒を多く含み，色調は淡橙褐色を呈す。その形態的特徴は九州北部地方の弥生後期の土器と類似しており注目される。17～19は器台である。17は細長い筒部に比較的長く，外方に開く受部が付くもので，筒部は九重式，受部は的場式の特徴を持つ。19は外面に沈線と波状文を施している。20，21は器種不明であるが，20は甕の底であろうか。以上の土器の特徴は，時期的に大きく２分できそうである。一つは弥生時代後期中葉のもので１から７，16～19が該当する。今一つは弥生時代末期から古墳時代初頭のもので、８～14が該当する。この時期の遺構は検出されていないが，こうした土器の存在から既に削平された尾根上や用地外に，該当期の集落が存在した可能性が高い。

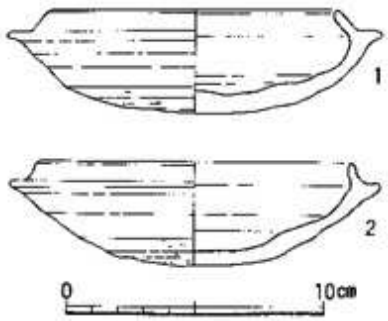


第79図　カンボウ遺跡Ⅱ区，第２黒色帯以下出土遺物実測図(2)

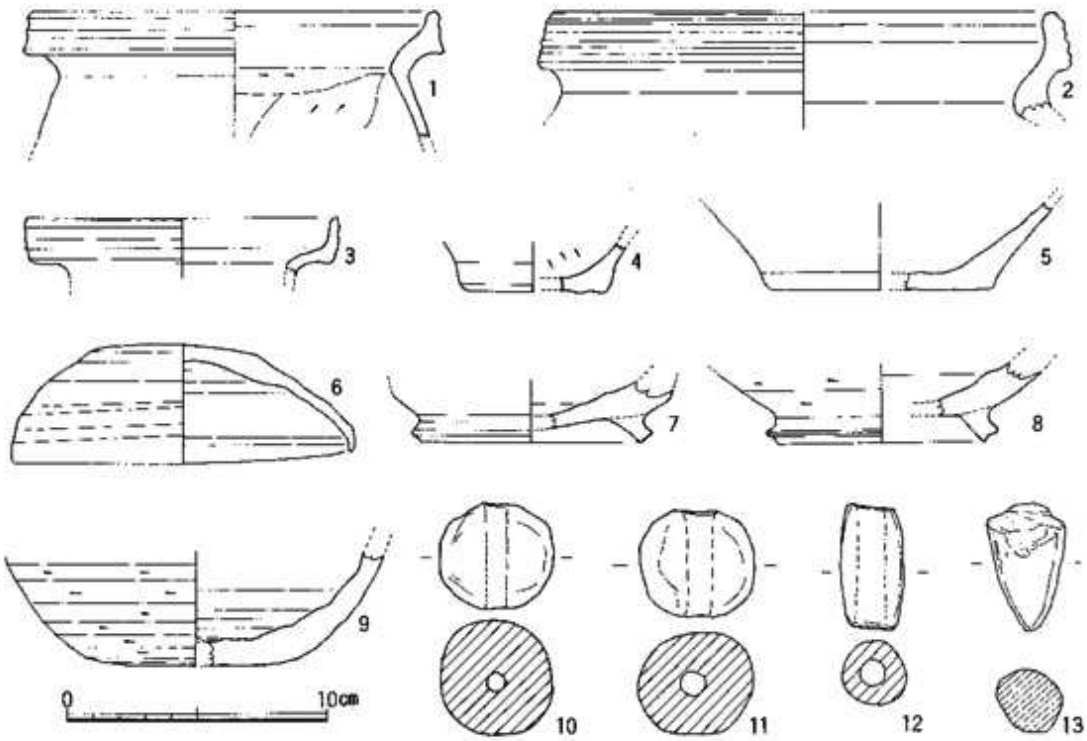
遺構に伴わない遺物（第80，81図）

第80図は北調査区の東端，SD04の南東付近で重なって出土した須恵器坏である。かえりがやや内傾して立ち上がり，底部には回転ヘラケズリを施す。6世紀後半頃のものと考えられる。

第81図は南調査区で出土した遺物である。1～3は弥生土器の口縁部，4，5が底部で，およそ弥生時代後期のものであろう。6～9は須恵器で，6は蓋，7～9は壺の底部であろう。10～12は土錘である。ほぼ球形のものとやや膨らんだ円柱状のものがある。時期は不明である。13は欠損しており全形は不明だが磨製石斧の基部であろう。遺構は検出されていないものの，弥生時代及び7世紀前後の遺物が出土しており，既に失われているものの南調査区の近辺に何らかの当該期の遺構があった可能性が高い。



第80図　北調査区出土遺物実測図



第81図　カンボウ遺跡Ⅱ区南調査区，遺構に伴わない遺物実測図

第4節　小　　結

以上記してきたように，カンボウ遺跡では古墳時代後期の住居跡等の遺構や古墳が検出されたほか，注目すべき遺物が多く出土した。以下簡単に今回の調査の成果についてまとめてみたい。

旧石器時代の遺物　Ⅰ区から出土した安山岩製削器（第49図３）は，その素材が幅広い横長剥片で，背面にはこの剥片剥離と同方向，同打面の剥片が取られたネガティブ面と底面がみられ，打面部には背面方向からの調整剥離がみられる。この特徴は山形に調整された打面から連続して横長の剥片を剥ぎ取る「瀬戸内技法」によって取られた翼状剥片の特徴と同一である。その他に関連資料がないことから断言はできないが，これは翼状剥片を素材にしている可能性も十分考えられる。県内で瀬戸内技法関連の遺物は，古曽志平廻田遺跡から国府形ナイフ形石器類似のナイフ形石器が２点出土している（足立，丹羽野1989）が，これらは加工の度合いが大きく，翼状剥片素材かどうかは断言できる資料ではなく，その意味で貴重な資料といえる。また翼状剥片は基本的に国府形ナイフ形石器の素材であり，本例のようにていねいに削器に加工した例は稀な例といえよう。(註１)

弥生時代の遺物　Ⅰ区東調査区東側，Ⅱ区北調査区谷底部からは相当量の弥生土器が出土した。Ⅰ区東調査区では主に弥生時代後期前半の土器（第48図）が，Ⅱ区谷底部では後期中葉と後期末～古墳時代初頭の土器が出土しており，この地域が弥生時代後期を中心に生活の舞台となっていたことがうかがえる。遺構は検出されなかったが，果樹園等で既に削平された尾根頂上付近に集落があった可能性が高い。果樹園ではなかったⅠ区東調査区東端付近で集中して弥生土器が出土していることや，安来市周辺の他の調査で尾根頂上部に高い比率で弥生後期の住居跡が検出されている(註２)ことがそれを傍証するであろう。

また他地域からの搬入品，または影響を受けた土器が出土したことは注目される。第48図４は比較的長い頸部にヘラ描きの沈線がめぐり，口縁部が内傾して上下に肥厚するあり方などは，吉備地方のいわゆる上東式の壺に合い通ずる特徴といえる。胎土は当地域に通有の黄褐色を呈し，細部の特徴などには違和感があることから，吉備地方ないし近隣地域からの何らかの影響を受けて当地で製作されたものであろうか。一方Ⅱ区谷底部で出土した壺（第79図16）は，その形態や調整のあり方は明らかに九州北部地方のそれの特徴を具備している。北九州地方の編年に照らし合わせれば，大まかに後期中葉の特徴をもち，それは谷底部第２黒色帯以下出土の土器のうち古相の時期と一致する。胎土にはやや大粒の石英，長石，雲母等を含み，色調の特徴などからも北九州地方からの搬入品の可能性が高い(註３)。九州地方の土器が他地域に流出している例は比較的少ない（常松1992）だけに貴重な例といえる。この他にも，隣接する石田遺跡でも山陽地方の特徴を持つ土器も出土しており，他地域との交流を示す資料が多く出土したことはこの地が国境に立地することと合わせて興味

深い事実といえる。

古墳　II区において，古墳の基底部残欠が2基，さらに東調査区東端から1点ながら埴輪が出土したことから可能性としては3基の古墳が存在したことが明らかになった。相当深くまで削平されていただけに，さらに全く検出できなかった古墳があった可能性も否定できない。これらの古墳の時期については，出土した円筒埴輪しか判断材料がなく，厳密な時期特定は困難だが，少なくとも2号墳出土の埴輪は底部調整が行われ，底端部には切断調整がみられないことから，およそ6世紀後半期頃とみて大過ないものと考えられる。

ところでカンボウ遺跡に続く尾根には神代塚古墳や神宝古墳群などの古墳が知られ，この丘陵一帯に古墳時代後期にはかなりの古墳が築かれたことが明らかになった。現状ではこれらの古墳群のあり方や時期の詳細を語ることはできない。しかしこの丘陵の谷を隔てた西側の丘陵には穴神横穴群等の横穴墓が多く存在し，あたかも古墳と横穴墓が墓域を分けているがごとき様相を呈す。両者の前後関係はいまだ十分に明らかではないが，神代塚古墳の石室は出雲地方東部においては余り例のない形態であり，横穴墓は逆に出雲地方東部の影響を受けたものの可能性が強い。「国境の地」であるだけに古墳時代後期の激動が浮かび上がってくるかも知れない。

（丹羽野　裕）

註

（1）　翼状剥片を削器，掻器等に利用した例は京都府広沢池遺跡（佐藤1993）や沢池遺跡（松藤1974），香川県国分台遺跡群（竹岡1984）等が知られているが，全体の割合からすればきわめて少なく，特に本例のような刃縁部全体にわたり丁寧な加工を施す例は希有な例であろう。

（2）　安来道路建設に伴う調査では非常に高い割合で尾根頂上から弥生時代後期の住居跡が検出されている。宮内遺跡，大原遺跡，白コクリ遺跡，越峠遺跡（宮本，山尾1993，今岡，寺尾1994），岩屋口遺跡（平成4年度調査），普請場遺跡，猫の谷遺跡（平成5年度調査）などが具体例である。

（3）　福岡市教育委員会，常松幹雄氏にご教示いただいた。

参考文献

足立克己・丹羽野裕　1989『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　島根県教育委員会

今岡一三・寺尾令　1994「白コクリ遺跡・大原遺跡－一般国道九号（安来道路）建設予定地内埋蔵　文化財発掘調査報告書Ⅳ」島根県教育委員会

佐藤良二　1993「京都市広沢池遺跡の掻器一例」『旧石器考古学』47

竹岡俊樹　1984「国分台遺跡群」『日本の旧石器文化』3雄山閣

常松幹雄　1992「大和・纒向遺跡における北部九州の壺形土器」『庄内式土器研究』Ⅱ

松藤和人　1974「瀬戸内技法の再検討」『ふたがみ』学生社

宮本正保・山尾一郎　1993『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』　島根県教育委員会

安来市教育委員会　1991『安来市内遺跡分布調査報告書』

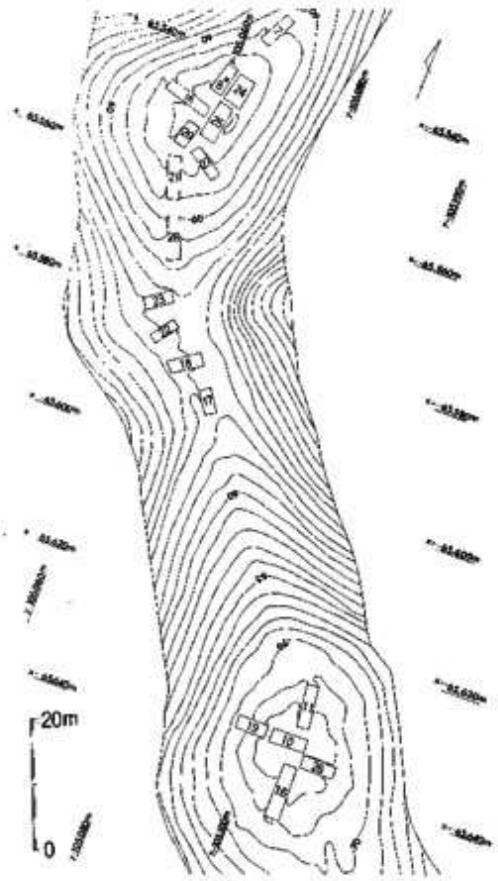
第5章　国　吉　遺　跡

立地と調査の概要　国吉遺跡は，吉佐町字国吉1261－1外にあり，鳥取県との県境にある標高約60mから86mの丘陵上に立地する。北には，中海，島根半島，弓が浜，東には，米子市街，大山を望み，西には，眼下にカンボウ遺跡，石田遺跡を俯瞰する事が出来る。

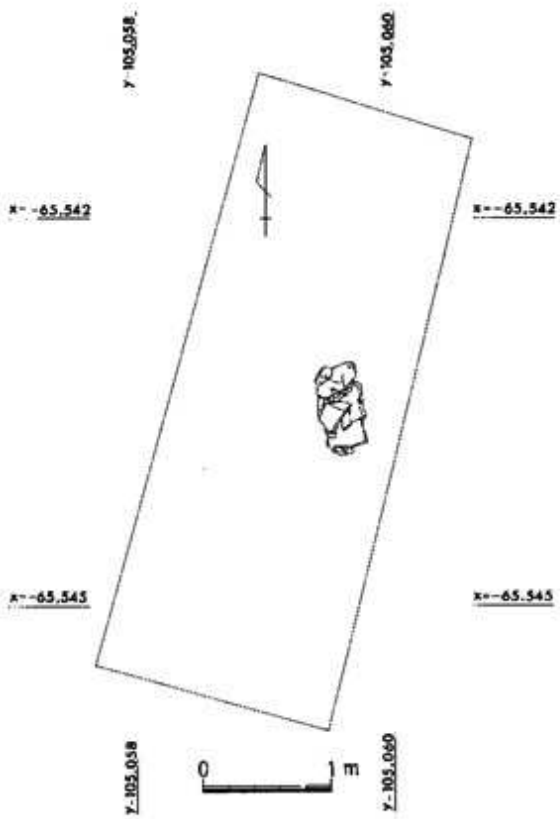
調査は，馬の背状にほぼ南北に延びる尾根に，地形の変化に配慮して合計28ヵ所のトレンチを設定した。当初，この尾根には3ヵ所の高まりがあり，墳丘墓の存在する可能性も考慮されていた。

北の高まりには3ヵ所のトレンチ（13～15）を設定した。いずれも，表土から30～50cmで地山に達し，遺物，遺構とも検出できなかった。

南の高まりには，頂部平坦面に東西，南北に直交するように4ヵ所のトレンチ（10，11，16，26）を，また，西斜面にトレンチ19を設定した。トレンチ10では地山ブロックを若干含む厚さ約20cmの盛り土とも考えられる黄褐色土が確認された。このため，遺構の確認を行うべく，さらに，地山と



第82図　トレンチの配置



第83図　石蓋土壙の位置

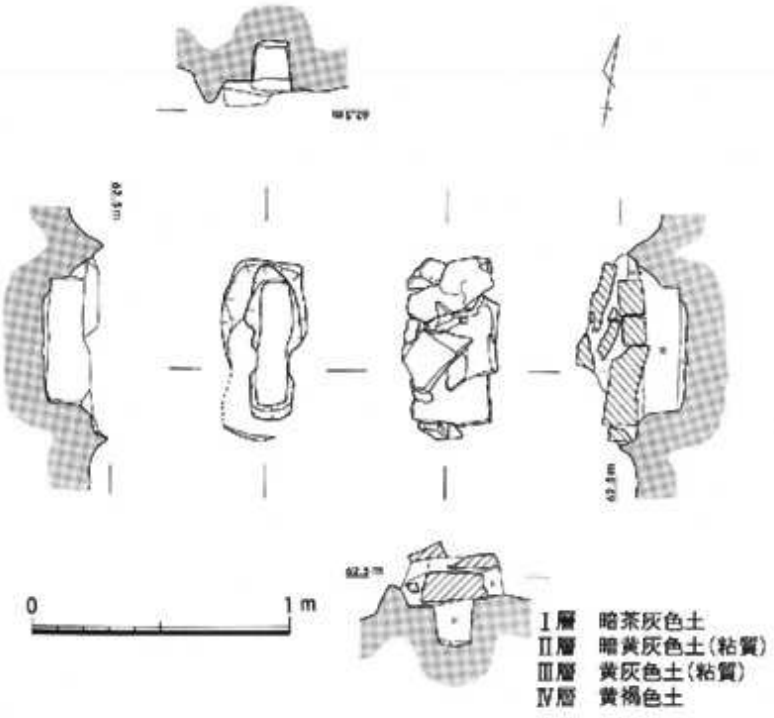
考えられた赤褐色粘質土まで掘り下げ，精査をおこなった。黄褐色土はトレンチ11，16，26でも平坦面の中央部では確認されたが周辺では順次消滅することが確認された。いずれのトレンチも赤褐色粘質土まで掘り下げ，精査を行った。トレンチ11では北側半分の地山が岩盤に変わり，斜面なりに傾斜している様子が確認された。この南の高まりにおいては遺構，遺物ともに検出することはできなかった。確認のため，トレンチ10の西にトレンチ19を設定したがやはり遺構，遺物ともに確認できなかった。

中央の高まりとその南北の尾根上には20ヵ所のトレンチを設定した。ほとんどのトレンチは，表土から20～30cmで地山に達した。このうち，トレンチ８からは石蓋土壙１基を検出した。

石蓋土壙　トレンチ８で検出した石蓋土壙は，約５cm表土を除去したところで集石の上面を確認したため，周囲を精査してその全容を明らかにすることとした。その結果，南北70cm，東西35cmの範囲にほぼ長方形の石棺の蓋石様の割石の集石を確認した。石は，概ね３段に重ねられていた。一番下の石は３枚で構成され，ほぼ水平に置かれ，それぞれの石の重なりは無かった。上２段の石は，下の石の繋ぎ目を覆っていたものと判断された。石を取り除くと，その下からは上縁が15cm×55cm，深さ15cmの南北に主軸をとる小さな長方形の土壙を検出した。蓋石の堀り方は一部を除いて確認できなかった。土壙内からは，遺物は検出されなかった。

小結　この遺跡で検出された石蓋土壙と類似するのは，鳥取県米子市新山研石山遺跡例がある。ここでは，他に石積木棺墓，小石棺を伴っている。石積木棺墓からは鉄剣と鉇が出土している。しかし，他に土器などの共伴遺物が存在しておらず，時期は明らかでないという。

米子の例からすると，国吉遺跡の石蓋土壙は，墓の可能性が強い。性格，時期等今後の資料の増加をまって検討したい。



第84図　石蓋土壙実測図

図　　版

石田遺跡(左)
カンボウ遺跡(右)
全景

カンボウ遺跡から
国吉遺跡
手前　カンボウ遺跡Ⅰ区
中　カンボウ遺跡Ⅱ区
奥尾根頂上 国吉遺跡
国吉遺跡の向うは鳥取県

図版 2

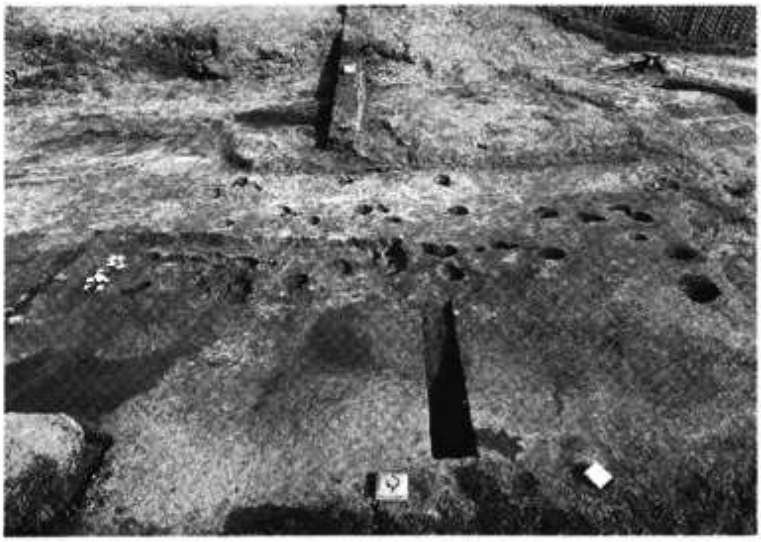
石田遺跡
Ⅰ区完掘状況全景(南西側より)

石田遺跡
Ⅰ-1区SI01完掘状況(北側より)

石田遺跡
Ⅰ-1区SI01完掘状況(南側より)

石田遺跡
I-1区SI01カマド正面(東側より)

石田遺跡
I-1区SI01カマド断面(北側より)



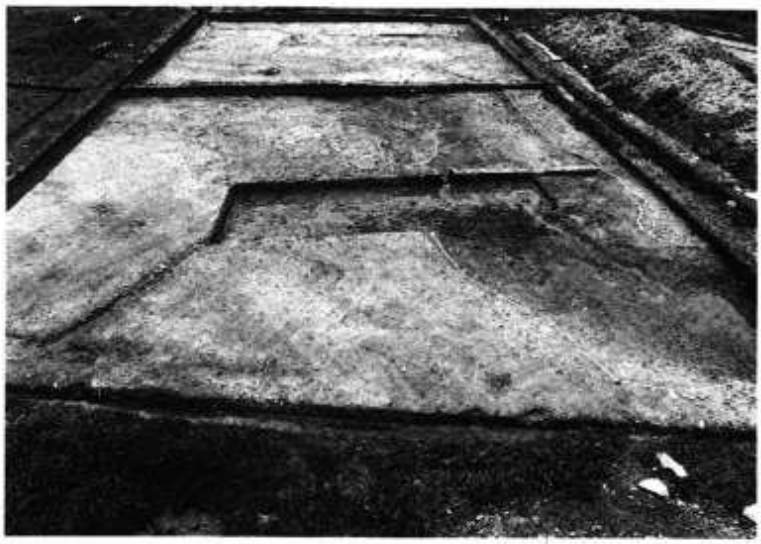
石田遺跡
I-2区完掘状況全景(北側より)

図版4

石田遺跡
Ⅰ-2区焼土直上遺物出土状況

石田遺跡Ⅰ-2区SK02(東側より)

石田遺跡Ⅰ-3区土器溜(西側より)



石田遺跡
Ⅱ-1・2区SR01全景（西側より）

石田遺跡Ⅱ-3区SD05・06検出状況

石田遺跡
Ⅱ-6区SR01断面1（南西側より）

図版6

石田遺跡
Ⅱ-6区SR01断面2(南西より)

石田遺跡
Ⅱ-6区SR01全景(南西より)

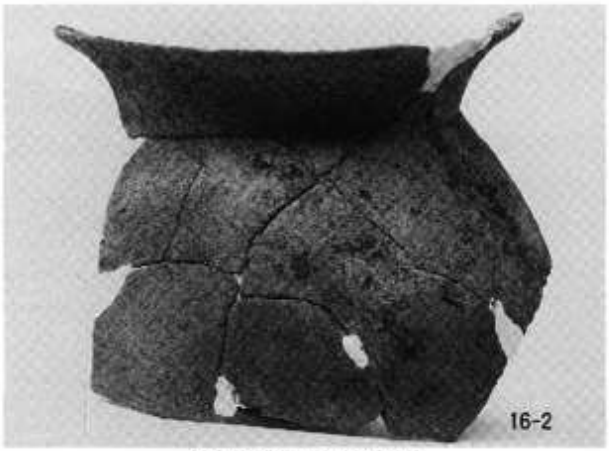
石田遺跡
Ⅱ-6区SR01流木出土状況(北より)

石田遺跡
Ⅱ-5区全景（南より中海方面を望む）

石田遺跡Ⅲ区SR01全景（南側より）

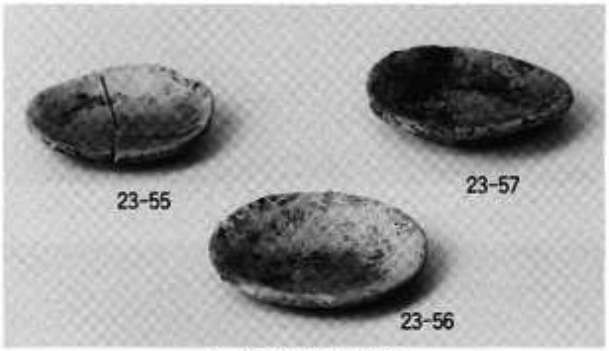
石田遺跡Ⅲ区SR01断面（西側より）

図版 8

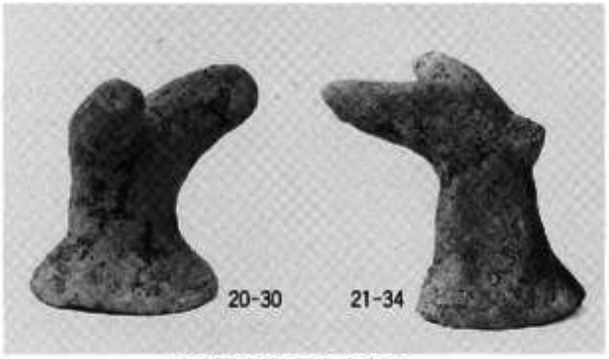


I区SI01出土土師器

I区SK01出土須恵器



I-3区出土土師器



I-3区土溜出土土製品

I-2区出土須恵器

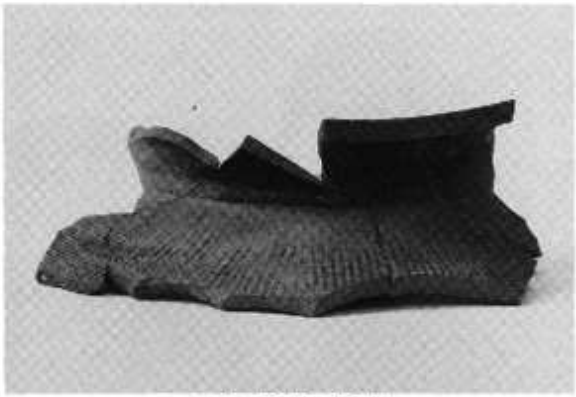
II-1区出土須恵器

I-3区SD01出土須恵器

I-3区出土須恵器

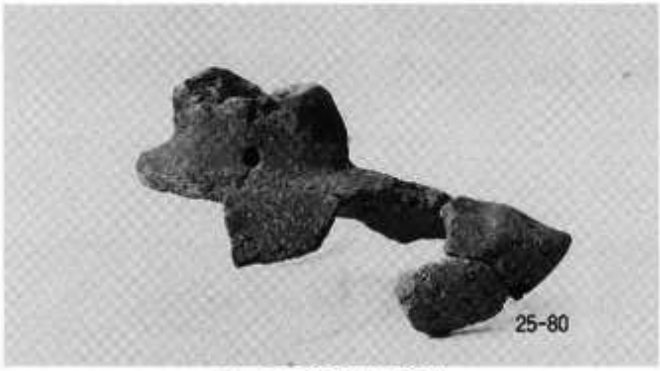
I-3区土器溜出土土師器

Ⅰ-2区SK02出土土師質土器



Ⅰ-3区出土須恵器

Ⅰ-3区土器溜出土竈



Ⅱ区SR01出土須恵器

Ⅰ-3区SD01出土須恵器

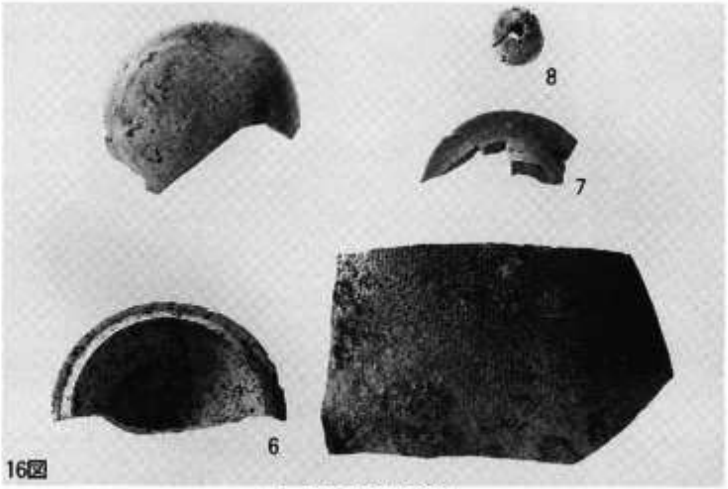
Ⅱ-6区SX01出土須恵器

Ⅱ区SR01出土須恵器

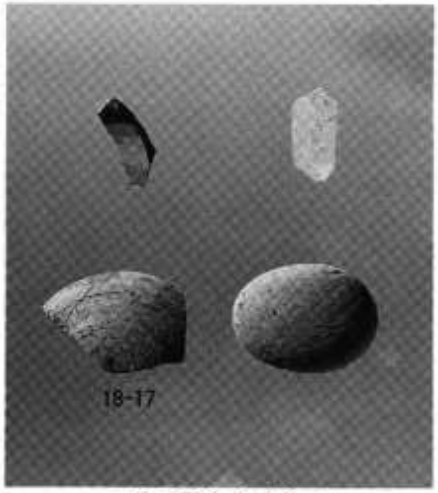
Ⅱ-2区出土土師器

Ⅱ区SR01出土須恵器

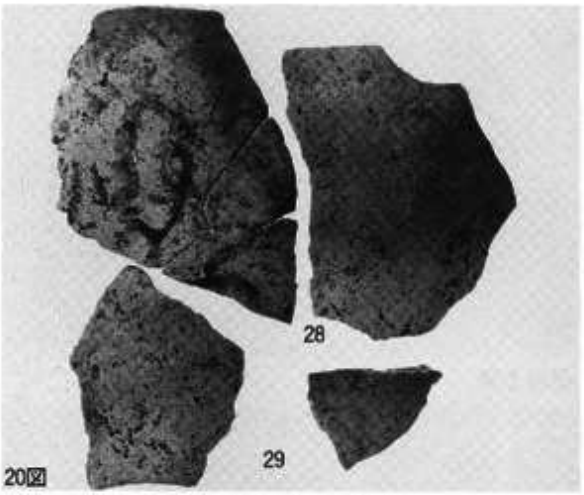
図版10



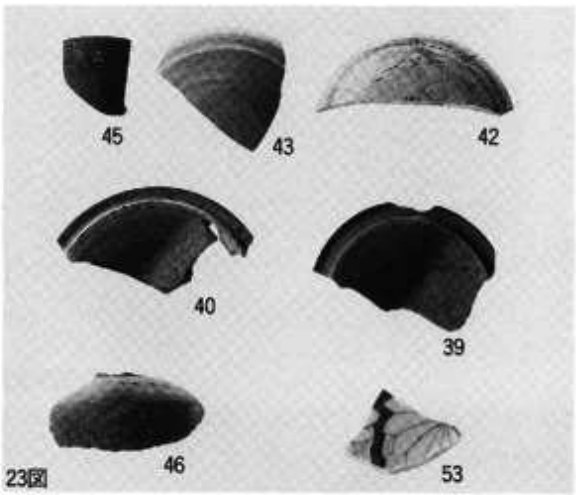
I区SI01出土遺物



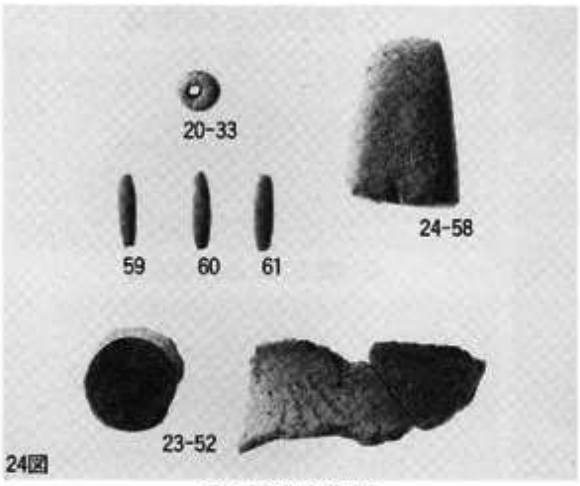
I-2区出土遺物



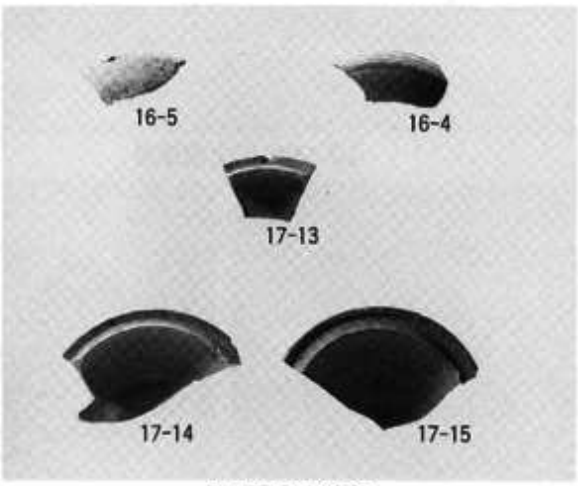
I-3区土器溜出土遺物



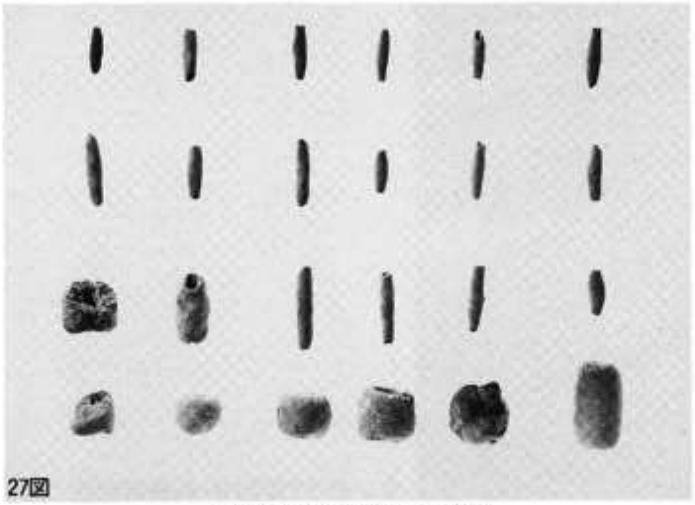
I-3区出土遺物



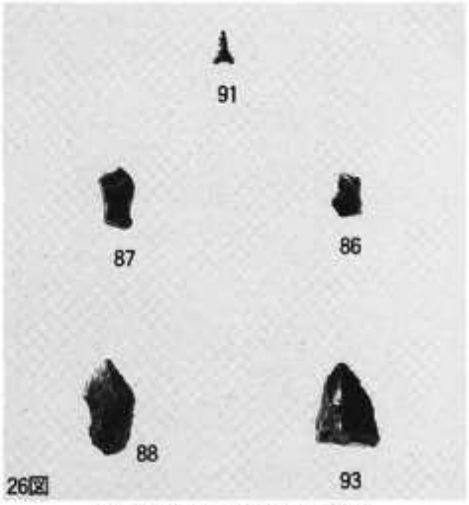
I-3区出土遺物



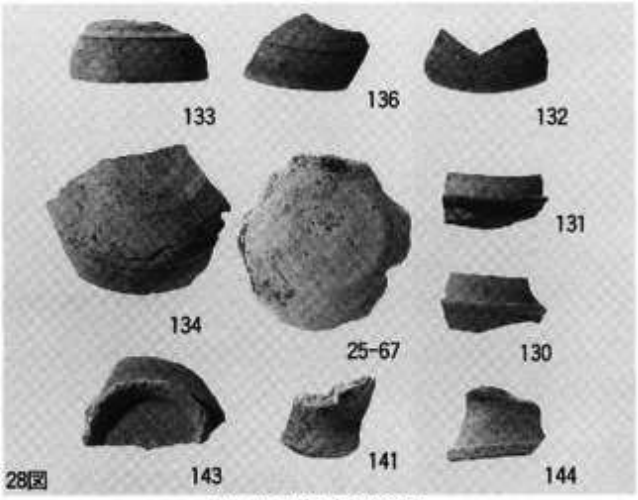
I-1区出土遺物



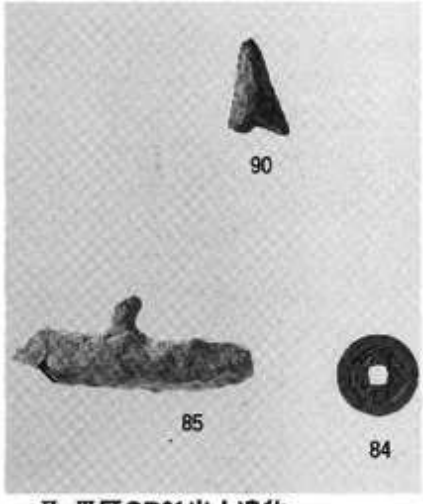
Ⅱ・Ⅲ区SR01出土土製品



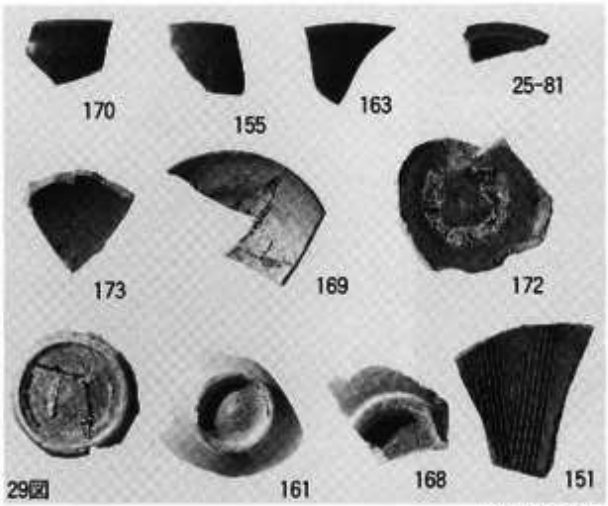
Ⅱ・Ⅲ区SR01出土石製品



Ⅱ・Ⅲ区出土須恵器



Ⅱ・Ⅲ区SR01出土遺物



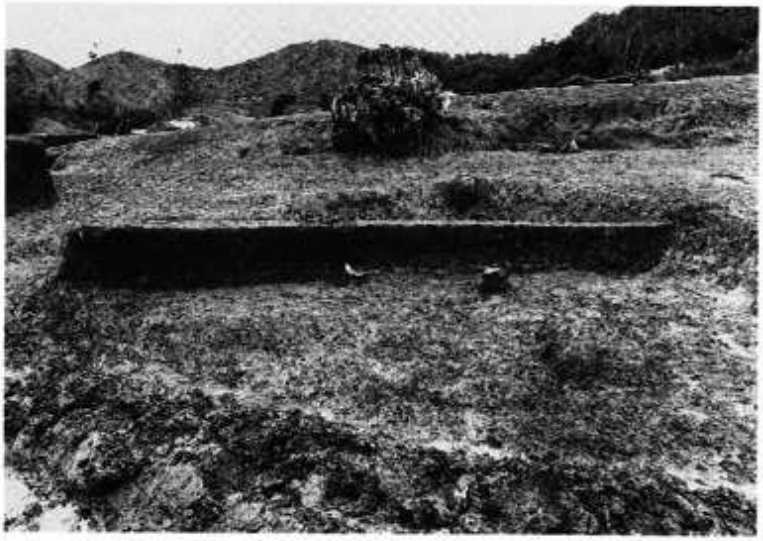
Ⅱ・Ⅲ区出土陶磁器

図版12

カンボウI区SI01・02完掘状況
(西より)

カンボウI区SI01・02完掘状況
(南より)

カンボウI区SI01・02土層断面



カンボウⅠ区SI02内土層断面

カンボウⅠ区SI03付近土層断面

カンボウⅠ区SB01・SD01全景

図版14

カンボウⅠ区SK01遺物出土状況

カンボウⅠ区北1号墳全景

カンボウⅠ区北2号墳全景

カンボウⅠ区北1号墳周溝土層断面

カンボウⅠ区北2号墳土層断面

カンボウⅠ区北2号墳遺物出土状況

図版16

カンボウ遺跡Ⅱ区全景
上：南調査区
下：北調査区
右：Ⅰ区東調査区

カンボウ遺跡Ⅱ区北調査区全景

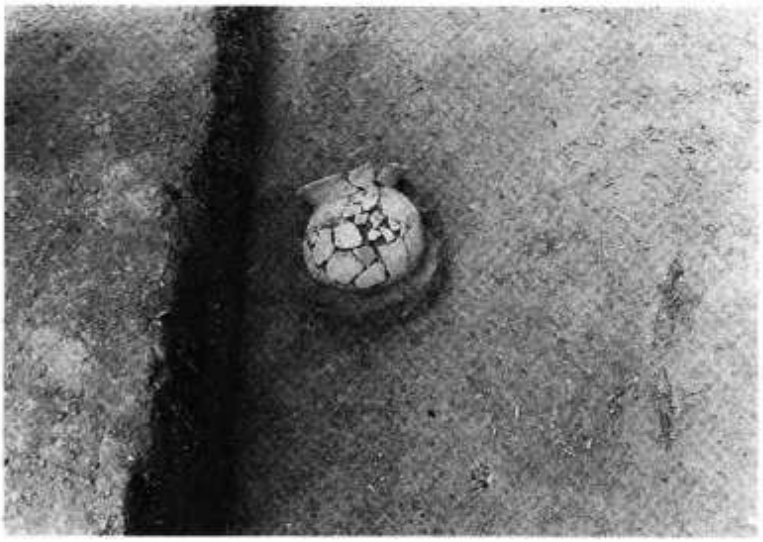
カンボウ遺跡Ⅱ区南調査区全景

カンボウ遺跡Ⅱ区SI04土層断面

カンボウ遺跡Ⅱ区SI04全景
（北上方から）

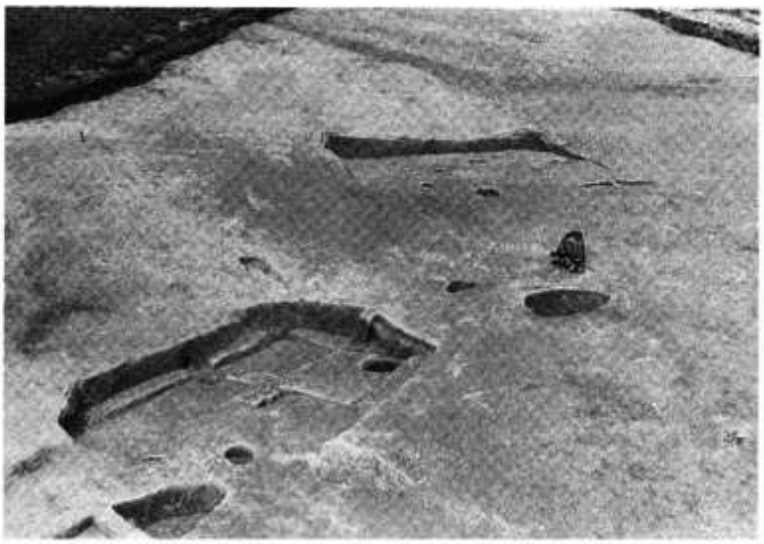
カンボウ遺跡Ⅱ区SI05全景（西から）

図版18



カンボウ遺跡Ⅱ区SI05遺物出土状況

カンボウ遺跡Ⅱ区南調査区全景
SI06・07・08(東上方国吉遺跡から)



カンボウ遺跡Ⅱ区SI06・SI07(手前)